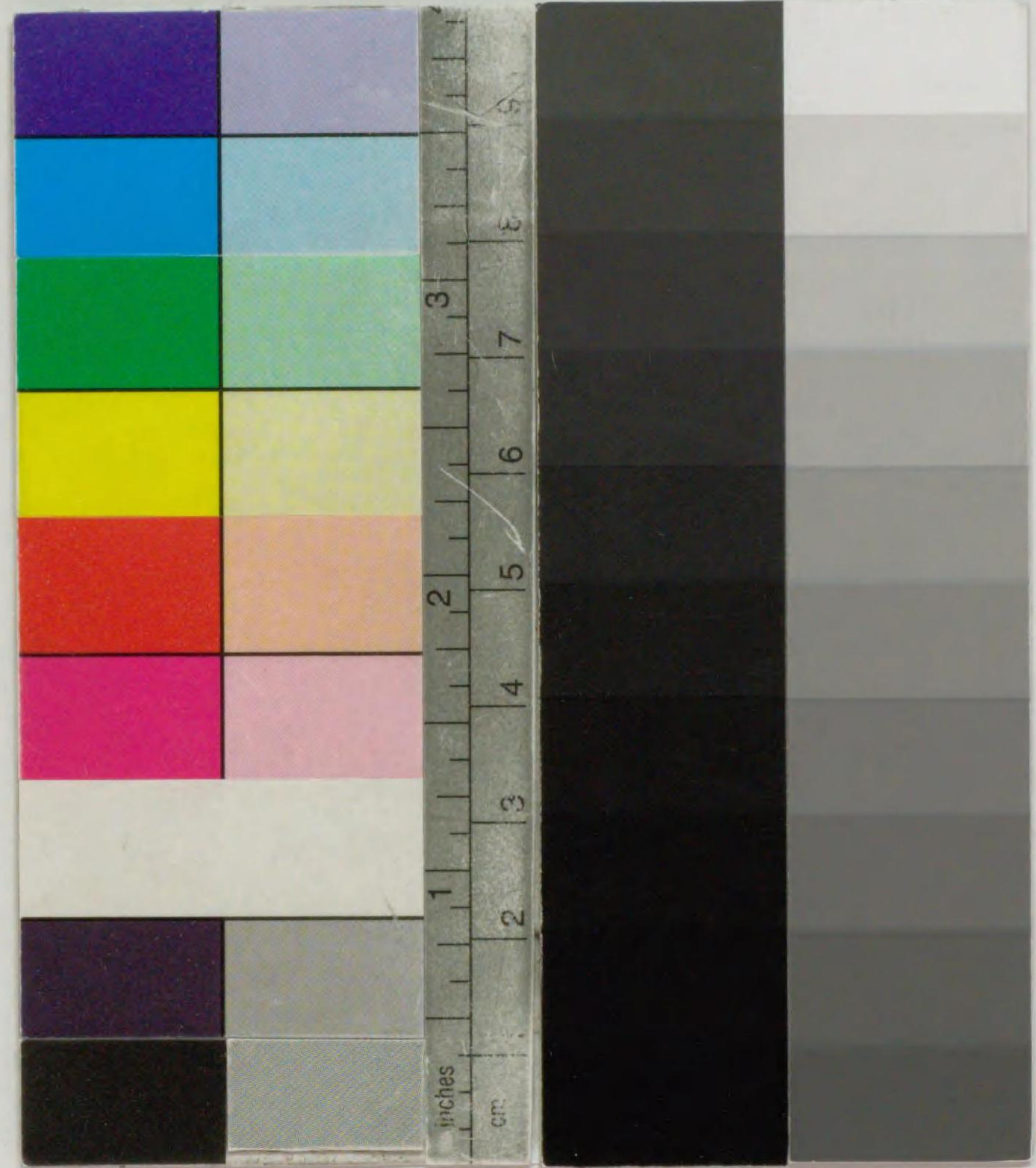


528-1131



1200501495764

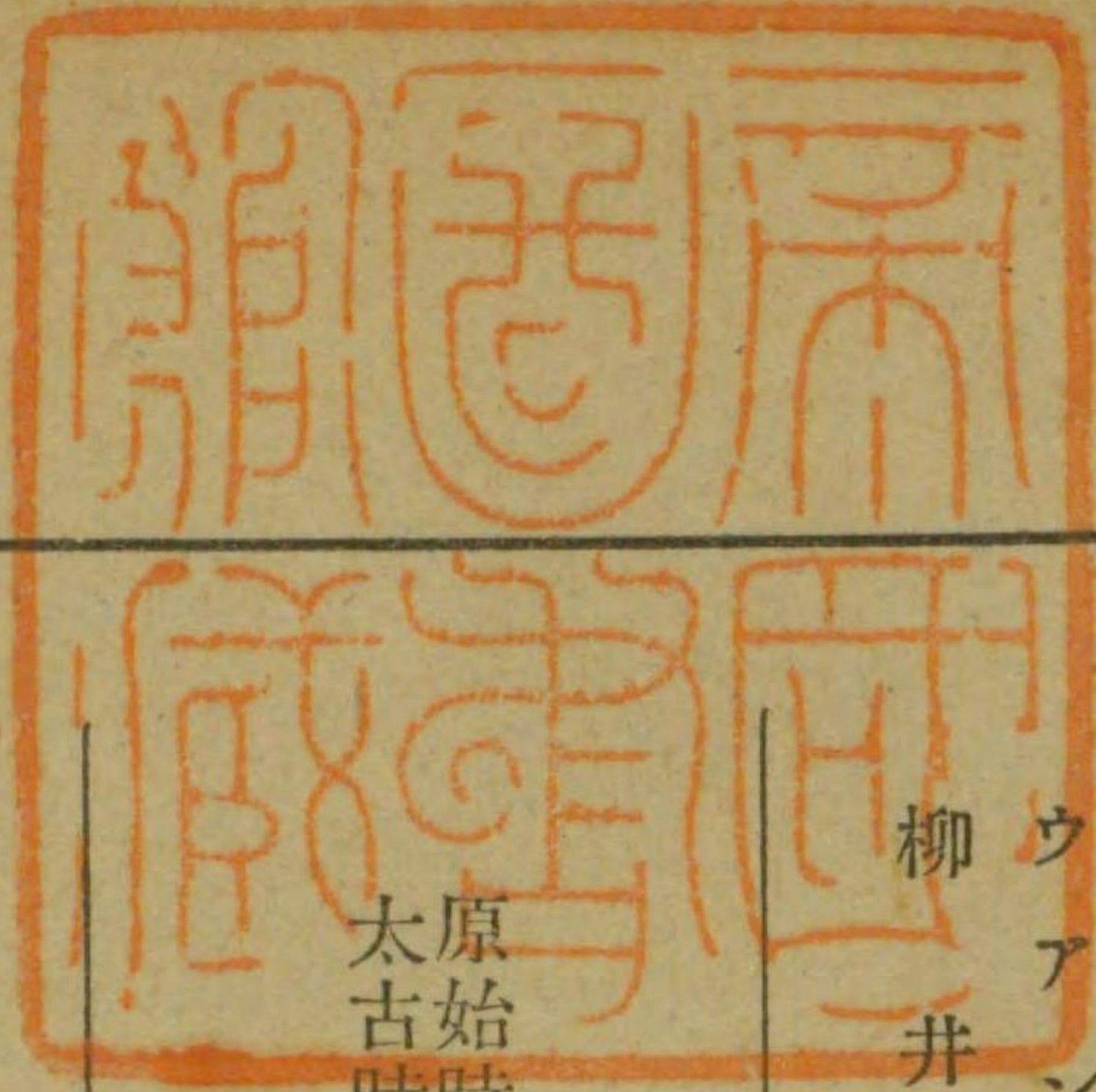
528  
1





56





ウ  
ア  
ン  
・  
ル  
ー  
ン  
著  
柳  
井  
和  
助  
譯

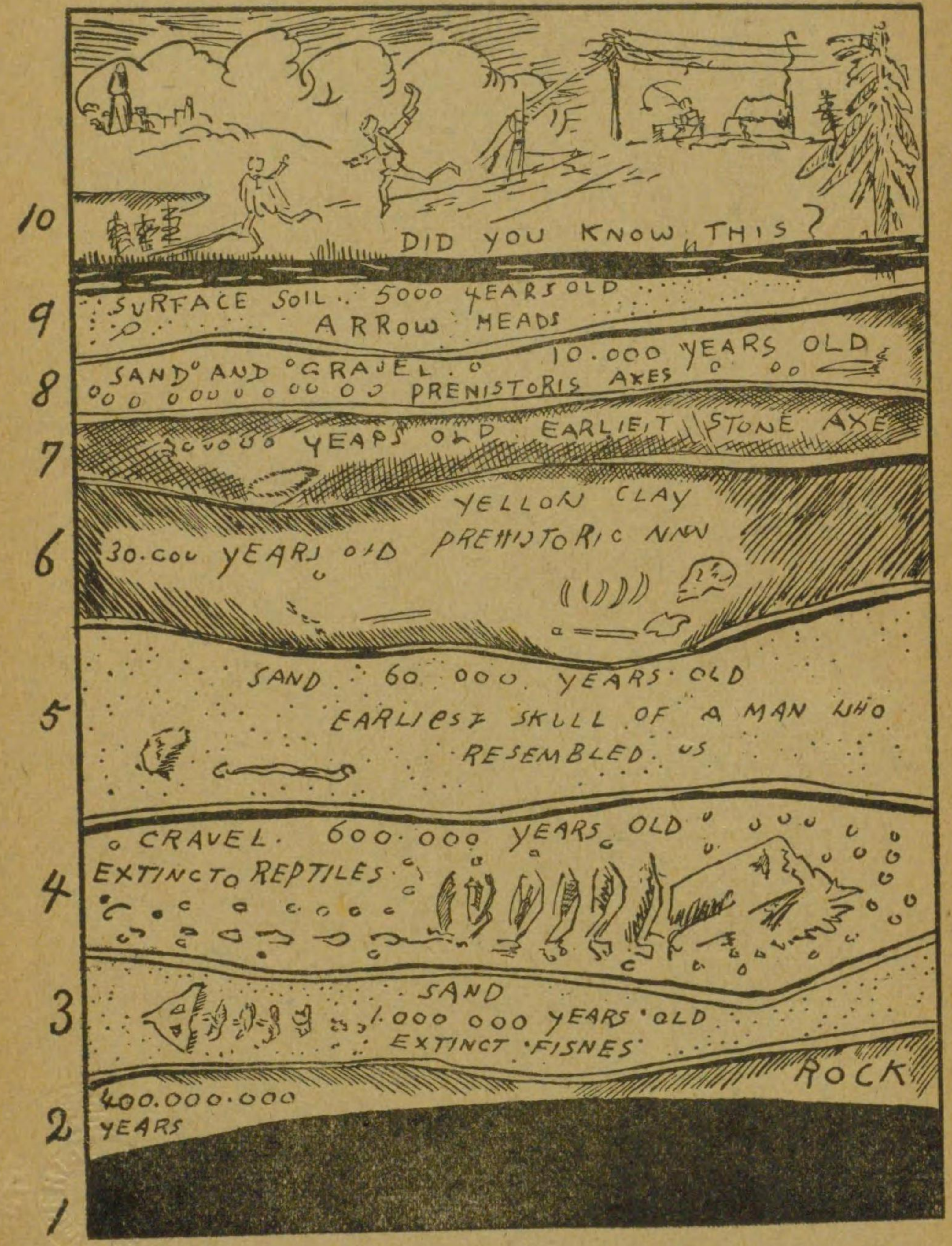
原始時代より  
太古時代まで

人類の足蹟

東京  
精  
文  
堂  
版









528  
1134

はしがき

本書は、原始時代から太古時代までの人類生活進展の一般経路に就いて、現代人の生き生きとした史的眼光に依つて大觀したところを、一般讀者のために、簡明に、印象的に、敘べたものである。

くだ／＼しい羅列的な敘述を避け、時代の外殻を剥ぎ去つて其の核心に觸れ、要領を引き攫んで物語つてゐるから、讀者は煩雜なものに出會ふことなく、容易に、人類初期の生活が如何なるものであつたかを理解することが出来るだらうと信ずる。

單に其の時代の事實を知ることが出来るといふに止まらない。今まで歴史の書物などは餘り讀んだことが無いといふ歳頃の若い人々でも、此の書を一讀することに依つて所謂歴史眼——史的眼光といふべきものを養ふことが出来る。歴史眼、史的眼光、それは過去現在を問はず時代の眞相を見抜く力である。そして未來をさへ豫測し得る力である。歴史的常識を持たねばならんとは、過去の事實を正確に記憶せよといふ意味よりは寧ろ、この遍通無礙の史



光を養へといふ意味である。史的眼光の缺如した人間は色々な意味で時代後れの、水平線以下の人間とならざるを得ない。

この書で取扱つた時代は人間の世の始りであるから凡ての人に取つて非常に深い興味のあることは言ふ迄もない。此の興味ある事實を探りながら史的眼光を養ふことを心掛けて貰ひ度い。

既に充分歴史を知つてゐるといふ自信のある人々でも此の書を通讀することに依つて、今迄の知識に纏りを附けることが出来るだらうと思ふ。

頁數も比較的少く、敘述の事柄も簡單ではあるが讀後胸中に残るものは、豊富な感じであることを保證する。

著者はオランダ生れの歴史家で、世界の諸國を數年づゝ住み歩いたといふ經歷のある文學博士ヘンドリック・ウィレム・ヴァン・ルーン氏である。氏は此の種の印象的な巧みな説話法を用ひて歴史の書物を幾つも書いてゐる。何れも非常な高評を博してゐるが本書はその内の一つである。原名は *Ancient Man, The Beginning of Civilizations.*

這般、北米合衆國は吾が日本國に對して甚だ以て怪しからぬ態度を採るに至つた。種々の感慨無からざるを得ぬ。然し乍ら吾々は何處までも自重して、正義の道を彼等に知らしむるの時を待たねばならぬ。此の時に當つて、數百年前に吾が國に親交を寄せ來つたことのある舊友オランダ國に生れた一史家の文字に依つて、世界人類初期の歴史を回顧し、人類國家の歸趨する所に就いて一考するの勞を取るのも決して無駄ではあるまいと思ふ。

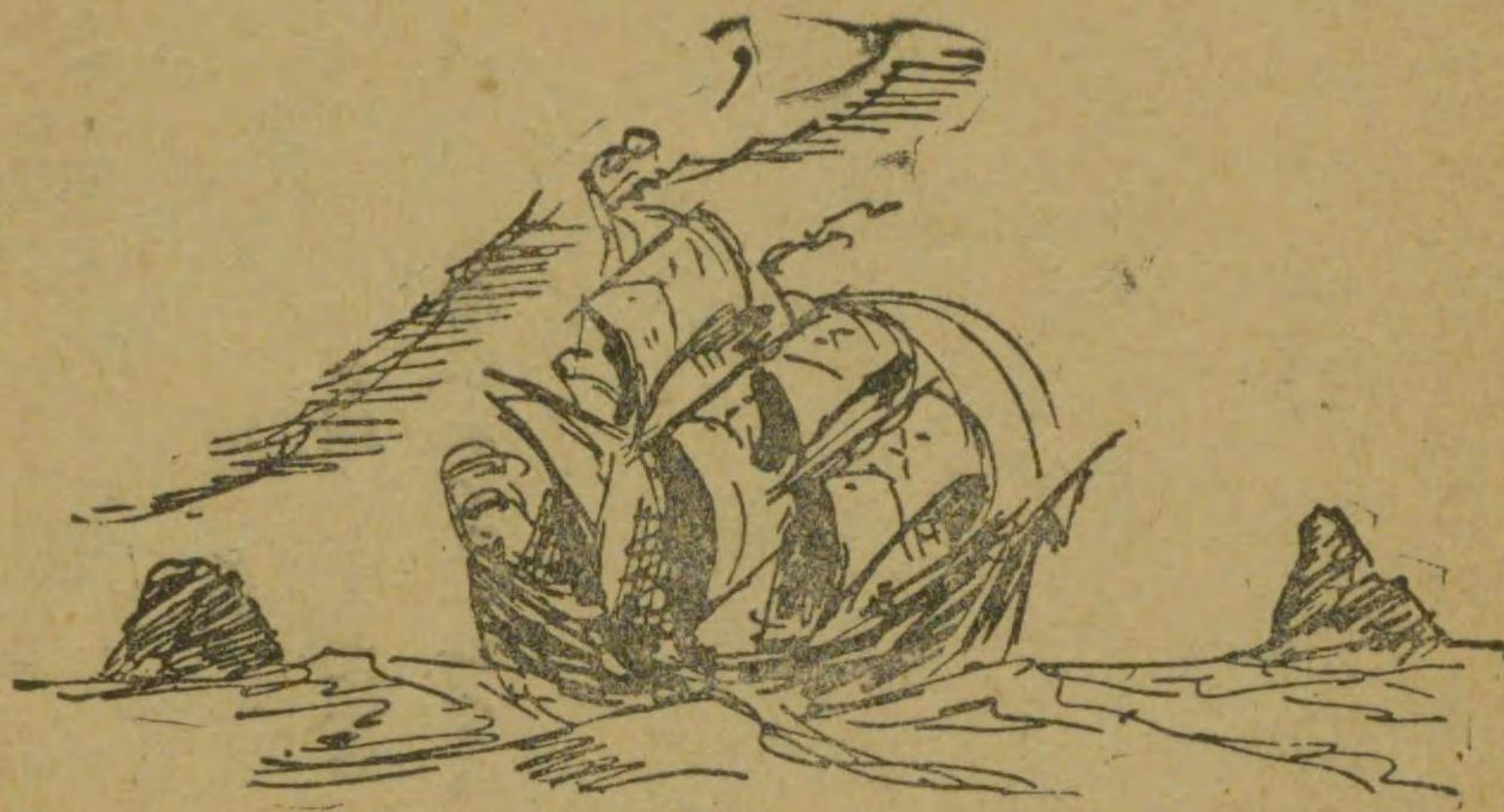
下總中山にて 譯者 識



序

「過去」の知識なき國、  
そは羅針盤なき船の如し。  
「未來」の未知の海原に乗り出で  
新しき海圖作るべき若人等に  
余は此の小著をば獻ぜん。  
彼等若人をして、その困難なる事業をば、既に吾等の果し  
たるよりも彌更に良く成就せしめよ！

著者識



原始時代より太古時代まで 人類の足蹟 (目次)

一、原始人類の出現

人類出現の時期……人類の高祖父……原始人類の體格面貌……食と住……犬の様に吼えた原始人……二十萬年以前の時代

二、世界が寒くなつて來た

氣候の大變化……氷河時代始る……時間の觀念の無かつた原始人……四季循環の事實に氣附く……夏が無くなつた……巨大なる氷河……雪が降り出す——着る物を探す……熊の毛皮を着る……洞窟に虫毛等と同棲……森林の大火……火を利用する事を初めて知る……料理法の發明……洞窟崩壞して生理となる……人類學者の發掘

三、石器時代の終末

寒い氷河時代に消滅せる人種や動物……季候徐々に變化す……自然は急がず……氷河時代の四期……三萬年前……人類の遺物……人類の歴史始る……木や石の道具……荒



削りの石斧……磨いた石斧……人類洞窟を去る……水邊の生活始る……樹上の家……湖上の小家……食料の貯蔵を始む……貯蔵器の發明……農耕の始り……流浪生活の打ち切り……新文明の光り南から来る……石器時代の終り。

#### 四、文明の夜明け

……三六

近代文明の基礎を据え附けた太古の諸民族……バビロニア人……エジプト人……カレドニア人……スメリヤ人等の功績……文明發祥地（ナイル河畔……メソポタミヤ……地中海東岸）

#### 五、太古の繪文字

……四〇

六千五百年前のエジプト……言葉を保存する術の發明……文字なしに暮らした百萬年間……音聲を形に移して示す方法……ローマ人とエジプト……ナポレオンのエジプト上陸の結果……青年士官ブルッフサルドのロセッタ石發見……エジプトの太古文明の秘密を握る「石の鍵」……象形文字解讀者小シャーンポリヨンの功績……エジプト僧侶と象形文字……「ハイエローグリフィック」の語義……洞窟民の繪文字とエジプト文字の相違

#### 六、ナイルの岸邊

……七五

初めてナイル河畔に入り込んだ種族……「吾々はレミイぢや」……ナイル河の氾濫……エジプトの民族性……彼等の宗教……來世の生活……神……物神崇拜……自然力の崇拜……エジプト王オサイリスの話……肉を離れた魂の住む國……ミイラの造り方……マンミイといふ語……墓穴……その發達経路……ピラミッドといふ語の起り……ピラミッド築造の話。

#### 七、國家の起源

……七九

吾々と國家……原始人と國家……國家形成までの経路……村の長老……王の選舉……農民……王の事業……税金……貴族階級の出現……百姓の魚どんが貴族になる迄の物語……「大きな家の持主」フェロー即ち王……王と貴族と民衆

#### 八、エジプトの興亡

……一〇一

文明の移動……エジプトの文明……メンフィスとテーベ……曆の始り……榮枯盛衰の理……ヒクソス……エジプト新帝國……武斷的國家の短命……トレミイ王朝……女王クレオパトラの自殺……エジプトの滅亡。

#### 九、メソポタミヤの平原

……一一三

ピラミッドに攀ぢ登る……ナイルの流れ……沙漠の涯……舊約聖書の樂園……メソ



ポタミヤの語源……ブラツツ(ユーフラテス)河とディクライト(チグリス)河……生活環境改善の欲望……住地争奪

### 十、楔形文字とバベルの塔……………二九

ベルシャのシラツ丘陵の廢寺……爪痕の様な文字……其の發見者と研究者……スメリヤ人の發明した楔形文字の讀方……ベヒスタンの岩壁……ダリウス王の事蹟刻文……スメリヤ人の住地「葦原の國」……岩山の神壇……「バブイリ」(バビロン)……スメリヤ人の塔……バベルの塔。

### 十一、アッシリヤ人とバビロニヤ人……………三三

セミ種族の一大坩堝……アメリカは世界人種の坩堝……スメリヤ人……遊牧民の生活……サルゴン王……アッカデア人……アモライト人……ハンムラビー大王……バビロニヤ大帝國……ヒッタイト人……アッシリヤ人の都ニヌア……チグラーニス・ペルザ1王……ブール1王の宏圖……アッシリヤ帝國の疲弊……シンメリア人……シ、ア人……カルデア人……アッシリヤ帝國の崩壞……バビロンの復活……ネブカドネツザ1ル王……バビロン世界的名地となる……カルデア人と星……時間の勘定……十進法……十二進法……定休日などの制定……ベルシャ人……アレキサンダー大王……新都セリユーシア……バビロンの廢墟。

### 十二、モーゼの話……………三五

ヘブライ人の住地ウル……エジプト時代のヘブライ人……ユダヤ人とヒクソス……モーゼ……エジプト人の異人種差別待遇……モーゼの出奔……メディア沙漠の生活……モーゼの企圖……ユダヤ人エジプトを脱出しシナイ半島へ行く……シナイ山下の生活……モーゼの改革的事業……イェホヴァ大神……モーゼの十誡……多神教より一神教へ……ユダヤ人パレスチナに入る……モーゼの功績。

### 十三、掟の都イエルサレム……………三七

パレスチナ……クナイン人……ユダヤ人……フィリスチヤ人……ブラサティ……甲冑を着けたゴリアス……強力者サムソンの話……イエルサレムの建設……イェブサイト人……ソロモン王……イエルサレム寺院の建立……ネブカドネツザールとイエルサレム……ローマ人とイエルサレム……ヘロド王……ローマ人の屬領統治の仕方……對宗教不干涉主義……ローマ人とユダヤ民族性……ローマ人のイエルサレム破壞……新都エーリナ・カピトリナ……世界の流浪者ユダヤ人……ユダヤ教の傳播。

### 十四、交易市ダマスカス……………三七

アモライト人の城塞……マラム人……商業市ダマスカスの發達……アラム語の流行……キリストの使つた言葉



十五 海の開拓者フェニキヤ人……………一八〇

開拓者といふ者の運命……………水平線の威嚇……………初めて水平線外に乗出したフェニキヤの航海者……………チルとシドン……………歐洲の未開民族とフェニキヤ人……………碧を繞らした交易場……………殖民地の起源……………物慾的なフェニキヤ人の末路。

十六、アジヤから生れた歐洲語……………一八〇

音聲と文字……………近代歐洲のアルファベット……………フェニキヤ人の文字の發達せる理由……………ギリシヤ人のフェニキヤ文字改良……………アジヤ太古民族の記録法の共通點……………母音再現の缺如……………ギリシヤ人と母音再現法の發明……………ギリシヤ文字の傳播。

十七、太古世界の終末……………一九七

漂浪生活より定着生活へ……………人類社會の發達……………國家……………航海術の發明……………天體研究……………道德律の發見……………記録法の發明……………過去の傳統と太古人類……………二本足で歩き初めた類……………インド、ヨーロッパ人種の出現……………アリアン民族の發達……………その新文明

附 録

太古史年表……………二〇三

- 一、有史前の人類。二、エジプト民族。三、ユダヤ民族。四、メソポタミヤ諸民族。五、フェニキヤ人。六、ベルシヤ人。



原始時代より  
太古時代まで

# 人類の足蹟

ヴァン・ルーン 著

柳井和助 譯



## 一、原始人類の出現

原始人類出現の時期……人類の高祖父……原始人類の體格面貌……食と住……犬の様に吼えた原始人……二十萬年以前の時代

新大陸の發見者として有名なコロムブスが今から凡そ四百三十年前にスペインの港から船を乗り出して西印度の島々まで航海した時には實に四週間以上の時日がかゝつた。然るに今

原始人類の出現



日の私達は飛行機なら僅か十六時間で大西洋を飛び越して了ふことが出来る。

五百年前には一冊の書物を手で寫すには三、四年といふ長い時日を要したものであるが、今日では鑄込植字器や輪轉印刷機といふ様な精巧な器械が発明されてゐて新しい書物を拵らへるにも一日二日もかゝれば立派に出来上つて了ふ。午前中の出来事が直ぐ新聞社の印刷室で其等の器械に依つて立派な夕刊新聞に仕上げられ、忽ち四方の讀者の手許まで配達される。讀者は楽しい夕餐の折に夕刊の記事に就いて語り合ふことが出来る。

私達は解剖學や化學や礦物學、その他無數の枝葉に岐れてゐる科學に就いて随分色々な事を澤山知つてゐるが太古の人類には此の科學といふ名前さへ無論知れてゐなかつた。

仍し或る點では私達とて最も太古の原始人類と同じ様に無智なところがある。——他でもない、吾々人類は何處から來たかといふ問題に就いてあるが、全く吾々は自分等が一體何處から來たのか知らないのである。一體人類といふものは如何にして、また何故に、また何時頃この地球の上に現れ始めたのか吾々は少しも知つてゐない。前にも言つたやうに科學進歩のお蔭で吾々は意のままになる事を萬、十萬、百萬と數知れぬほど澤山手許に持ち合せな

がら、人類創生といふ問題になると、お伽噺でもする時のやうに、

「昔々、そのまた昔、或る時、或る人間が棲んで居りました。」

といふ様な調子で始めなければならない。此の原始人類は今から數十萬年の昔に住んでゐた。

だが彼れはどんな顔付きや姿をしてゐたらう？ 何に似てゐたらう？

さう尋ねて見ても確とした事は分らない。吾々は彼れの姿を描いた太古の繪を見ることも出来ない。たゞ太古に出來た土の深い——底の方に時とすると吾々は彼れの骨格の幾片かを發見することがある。其等の骨片はづつと大昔に地上から消えて了つた様な動物の骨が澤山塊まつて埋没してゐる中に隠れてゐる。吾々はさういふ中から其等の骨片を掘り出し搜し出した。そして其等を組み立て、見て吾々人類の最初の祖先ともいふべき奇怪な動物の體格を造り上げることが出來た。

人類の高祖父——原始人は人目を惹かぬ極めて醜い恰好の哺乳動物であつた。彼れは全く小さかつた。太陽の暑い——光熱や嚴寒膚を刺すやうな冷い風は彼れの皮膚の色を黒いやう



人類の足跡

な赤茶色に焦がした。その頭や身體の大部分は長い毛に蔽はれてゐた。彼れの手は猿猴の手のやうな恰好をしてゐて、指は極く薄つぺらで長く而も極めて丈夫に出来てゐた。彼れの額は平たく、その頤骨はその齒をフォークやナイフとして用ひる猛獸の頤骨のやうに出来てゐた。

無論衣服などは着てゐなかつた。彼れは、全く素つ裸だつた。彼れは、地球全面を煙や熔岩で充たしたゴロ／＼ドロ／＼と奇妙な音を立て、鳴動してゐる無数の火山に燃え立つ火焰より他には火といふものは見なかつた。

彼れは涯しもなく打ち續いた鬱蒼たる大森林の濕つばい暗い奥の方に棲んでゐた。

空腹の劇痛を感じると彼れは植物の根や葉を生なまのまゝ嚙かつたり怒つた鳥の巢から卵を盗み取つたりした。

或る時には、長い間我慢強く追撃した後に漸く一羽の雀を捉へたり小さな野犬——多分野兎の先祖だつたらう——を捕へたりした。是等の動物を彼れは生なまのまゝ嚙かつたりしやぶつたりするのでつた。何故なら彼等原人は食物を料理することなど無論知らなかつたからである。



原始人（有史前——約廿萬年前を示す）



彼れの齒は大きくて、恰も現在吾々の周圍に見られる猛獸類の大抵のものが持つてゐるやうなあの頑丈な牙のやうなものだつた。

晝の間、彼れは、自分自身やその妻や子供のために食物を探しに出かけて森の中をさ迷ひ歩いた。

夜間は、餌食を探してゐる獸類が吼えたり叫んだりする騒々しい聲に怖れをなして彼れは大木の洞窟の内へもぐり込んだり、一面に苔が蒸して大きな蜘蛛などが巢を食つてゐるやうな數個の大きな轉石の蔭にかくれたりしてゐた。

夏の間は、焼けつくやうな熱い天日に曝され、冬の間は寒さに凍えた。

彼れは時々怪我をすることがあつても別段看護をしてくれるやうな者は無かつた。

危険が脅す時にその仲間の者に警告するために彼れは一定の音聲を發する道覺えた。それは恰も見知らぬ者が近づくのを見て吼え立てる犬のやうだつた。その他多くの點に於て彼れは、今日吾々の家庭に可愛がれてゐる慣れた犬や猫などよりも遙かに人目を惹かぬ一種の動物に過ぎなかつた。

詰り彼等原始人は、恐怖と饑餓の世界に棲み、無數の敵に取り圍まれ、その近親や友達が狼や熊や怖ろしいサーベル形の犬齒を持つた虎などに食ひ殺されるのを始終見ながら暮らしてゐた哀れ無慘な動物に他ならないのであつた。

此の原始人類の一番最初の歴史に就ては吾々は何事も知らない。彼れは手道具も持たず、家も建てなかつた。彼れは生活し死に、そしてその生存の跡形を少しも残さなかつた。吾々はその骨を頼りに彼等原人の歴史を辿つて見るより他はない。此の骨を研究して見ることに依つて、彼等原人の棲んでゐたのは少くとも二十萬年以前のことであるのを吾々は知ることが出來た。

その他は暗黒である。

やがて有名な石器時代になるが、彼等原人は此の時代になつて、今日吾々が文明と呼んでゐる所のもの、最初の初歩的原理を漸く知るやうになつたのである。

此の石器時代に就いては詳しくお話し、なければならぬ。



## 二、世界が寒くなつて來た

氣候の大變化……氷河時代始る……時間の觀念の無かつた原始人……四季循環の事實に氣附く……夏が無くなつた……巨大なる氷河……雪が降り出す——着る物を探す……熊の毛皮を着る……洞窟に虫毛等と同棲……森林の大火……火を利用する事を初めて知る……料理法の發明……洞窟崩壊して生埋となる……人類學者の發掘

その頃氣候に重大な變化が來た。

彼等原始人は時の觀念が無かつた。彼れは誕生日の記録も持たず結婚記念日が何時だつたかも知らず死の時の記録も持たなかつた。無論、今日は、何日だかも知らず週間といふことも年といふことの觀念も無かつた。

朝日が昇る時、彼れは「そら別な日になつた」とは言はなかつた。彼れはたゞ「明るくなつた。」と言ふだけであつた。そして家族に與へる食物を集めるために朝日の光を利用した。

暗くなつた時彼れは自分の妻や子供達の所へ歸つて來て、その日の獲物——或る種の莓類や幾羽かの鳥を家族の者に分けてやる。そして自分も生の肉をたら、腹詰め込んで眠りに就く……

長い經驗は彼れにも四季の循環することを教へた。寒い冬の次ぎには必ず溫和な春がやつて來、春がだん／＼と更けて行けば、木の實や草の實が挽ぎ取つたり捲り採つたりして食べられるやうに熟する夏となることを、何時の間にか自然と知るやうになつた。寒い風が吹き出して樹の葉を拂ひ落し、多くの動物が地の穴へもぐり込んで長い冬眠の用意をし始めると夏が終りになることに彼れも氣附いた。かういふ極めて一般的な仕方では彼れは四季の變化を知るだけであつた。寒暖相次いで巡る斯ういふ有效な變化を認めることは認めだが別段何の疑問も抱かなかつた。彼れは生活した。それだけで彼れには満足だつた。

然るに突然、彼れを非常に苦しめた或る事が起つた。

夏の暑い時候の日が來るのが大變遅くなつた。そして夏が來ても直ぐまた寒い冬になつた。草木の實が少しも熟さなくなつた。今までは青草に蔽はれるのを常とした山々の頂も厚い重

世界が寒くなつて來た



人類の足蹟

い雪の下に深く埋れてかくれて了つた。

すると或る日のこと、彼れの住んでゐる谷間の方へ、彼れの仲間とは違つた野人の一群が  
高い峰々の打ち續いてゐる地方から下りて來た。

その野人の群れは此方の谷に住んでゐる連中にはさつぱり譯の分らない妙な音聲を出して  
咬き合つた。彼等は全く窮乏して餓死しかゝつてゐるやうに見受けられた。餓えと寒さが彼  
等とその元の棲み所から追ひ出して了つたやうに思はれた。

かうしてやつて來た新しい野人の群れと元から住んでゐた連中と兩方とも満足させるほど  
の食物は此の谷間の地方には無かつた。彼等が數日餘滞在しやうとした時、其處には怖ろし  
い争鬭が惹起し無數の家族が殺された。残りの者は森林深く逃げ込んで再び姿が見えなかつ  
た。

それから長い間重大なことは何一つ起らなかつた。

併しその間に日はだん／＼と短くなり夜は前よりもづつと寒くなつて行くばかりだつた。  
終に、丘と丘との間に在る窪みにも薄緑の氷の小さな塊が現れ始めた。それは年が經つに



氷河時代—巨岩の轉落

世界が寒くなつて來た



連れて益々大きくなるばかりだった。その内に山の背の方から極めてのろ／＼と巨大な氷河が山腹を迂り始めた。無数の巨大な岩石が始終谷間へ突き落されて来た。百雷一時に落ちるやうな凄まじい音響を立て、轉落して来た岩石は恐怖した人々の間へ崩れ込んで眠つてゐる人々を押し潰した。數百年、千年といふ老齡に達した無数の巨木が、人間にも獸類にも無慈悲だつた高い氷の厚壁のために激しい力で押しつぶされて燃え易い枯木と變じた。

とう／＼雪が降り始めた。

雪は何ヶ月も何ヶ月も、何年も何年も降り續けた………  
植物は悉く死に、動物は南方の太陽を探しに逃げ出した。谷間は住むことが出来なくなつた。男達は子供を背中に背負ひ上げ、常に武器として用ひ慣れた數個の石片を携へ、新しい住み所を探しに出掛けた。

何故此の時期に世界が寒冷になつて来たのか吾々には分らない。吾々はその原因を推測することさへ出来ないと言つて良し。

斯様にして温度が段々と低下した事は併し乍ら人類に對して非常な大變化を齎らした。

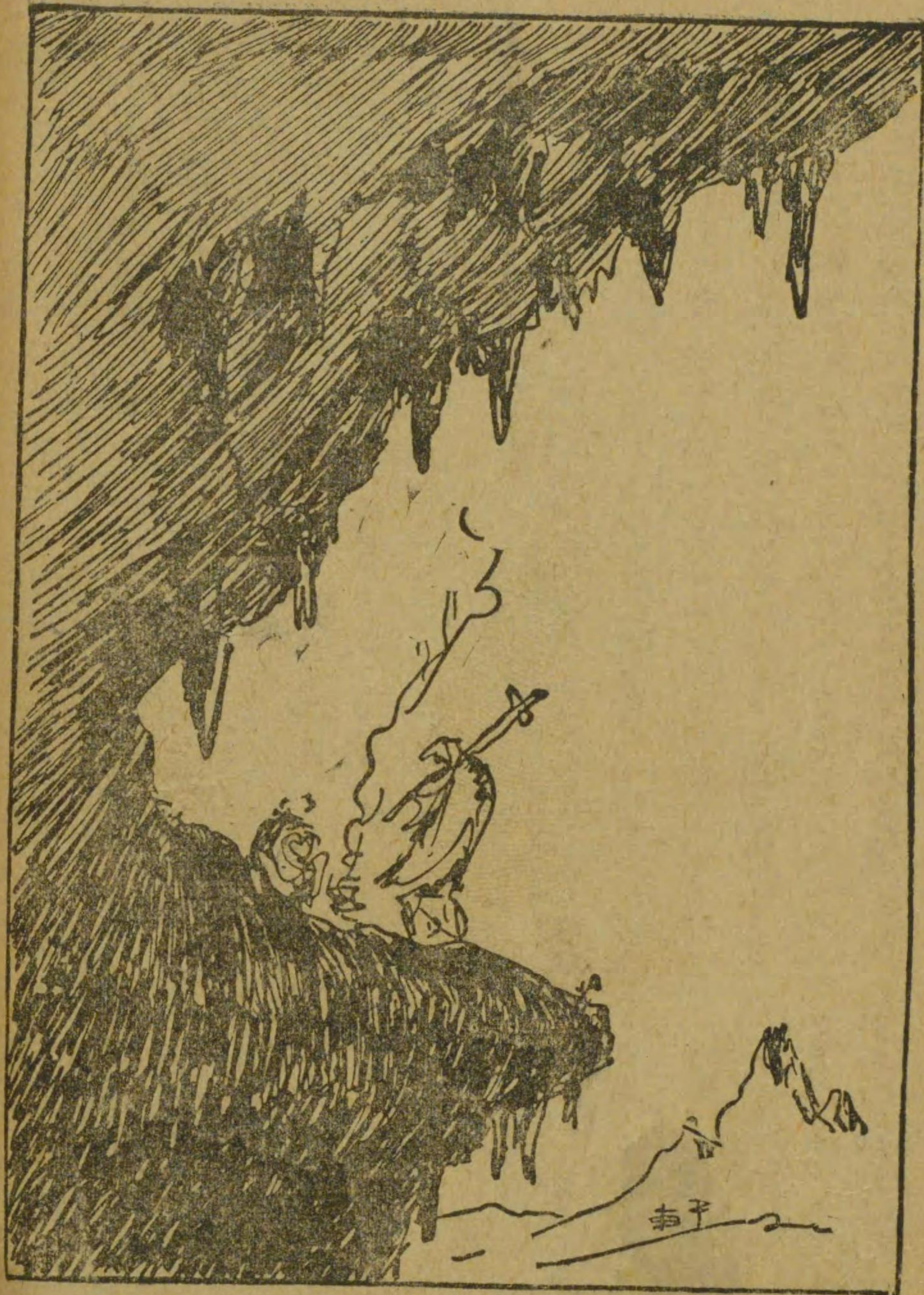
暫くの間は、誰も彼れも皆死んで了ひさうに見えた。併し此の苦しみの時期の終り頃には其れが眞の惠福であることが分つて来た。それは凡ての弱い人々を殺したが、生き残つた連中は死滅せぬやうに其の機智を鋭くするやうに促がされた。

忽ちに死滅するか其れとも一生懸命に考へて生き延びる方法を案出するか、二つに一つといふ場合に面した此の時代の原人等は、初めて石斧を造ることを發明し、それ迄の代々の人類が出會つたことの無い種々の困難を解決することが出来るやうになつた。

先づ第一に衣服の問題があつた。氣候が極めて寒冷になつて来たのであるから、如何に裸體の生活に慣れた彼等原人も何とかして何か人工的な被ひでも纏はなければ居られなくなつた。北方の地方に棲息してゐる熊や野牛などは厚い毛皮があるので雪や氷にも殆ど少しも苦しめられないが、彼等原人は頭や身體の大部分に長い毛が生えてゐたとは言つても其等の動物のやうに厚い毛皮を持つてゐたわけではない。彼等の皮膚は獸類のそれに比すれば遙かに弱く花車まがしやに出来てゐたから氷雪に攻められ寒風に襲はれては實に名狀し難い苦痛を感じた。

世界が寒くなつて来た





穴居時代——洞窟に棲める人類

彼れは此の問題を極めて單純な仕様で解決した。彼れは穴を掘つた。そして木の枝や葉や小さな草などで穴の上に蔽ひを造つた。すると熊がやつて來て轉げ込んだ。食物が無いために熊が弱り切るのを待つてゐて、さて彼れは大きな石をやたらに敲きつけて打ち殺した。それから鋭い燧石で其の背中を切り裂いて毛皮を引き剥き、之を天日で乾してから自分の肩から纏ひつけた。かうして彼れは以前に熊を幸福にし氣持ち良くしてゐたと同じ温か味を享受することが出來た。

次ぎに住居の問題があつた。

多くの動物は暗い洞穴に入つて眠る習慣があつた。原人等は之を見做つて諸所を探し廻つた揚句洞窟を發見した。その中には蝙蝠や有ゆる種類の虫毛等が這ひ廻つてゐたが、彼れは別に氣にもせず一緒に棲むことにした。これが彼れの新しい家だつた。虫けらや蝙蝠などと同居する家も彼れに取つては暖かであつた。それで彼れは満足だつた。

物凄しい雷暴風の時、時とする怖ろしい落雷があつて大木が焦がされて了ふことがあつた。時にはそれが燃えひろがつて森林全體が炎々たる火焰に包まれて了ふこともあつた。原人等

世界が寒くなつて來た



はかうした森林の大火を奇妙な感じで眺めた。火の手が押し寄せて來ると邊り一面が温かくなつて來たが更に近づくに堪へ切れぬほど熱くなつて來たので彼等は奇怪な叫びを發しながら逃げ惑つた。ちり／＼と熊の毛皮が焦げた。に燃え上つた。急いで脱ぎ捨て、元の裸かに歸つたまま、氷雪の上を逃げ廻る者もあつた。逃げ遅れたものは身體中の毛を焦がされて了つたり、皮膚をだら／＼に焼け爛らされたりした。中には猛火に包まれて忽ち影も形も消え失せて了ふのがあつた。それを目撃した仲間も氷雪の上を轉びながら一生懸命に逃げた。熱さが減じて來た。更に遠ざかると暖いだけになつた。

これ迄は火は怖しい敵だつた。併しかうした経験を繰り返してゐる内に今度は火は親しい友となつて來た。

森林の大火が熄んだ時彼は引き返して行つて見た。未だ煙が盛んに立ち昇りあち／＼にめろ／＼と焰の赤い舌が動いてゐた。彼は燃えさしの枝を拾ひ上げて見た。向ふ端は燃えてゐるけれども手許は別に熱くもない。片手を伸ばして燃えてゐる所へ翳して見ると暖い。彼は喜びの叫びをあげた。今度は他の枯木の所へ持つて行つた。すると見てゐる間に火が

燃え移つた。今度は身體中が暖まつて來た。彼はまた満足げな叫び聲を發した。

彼れは何事か思ひ附いたと見えて端の燃えてゐる枝を持つて自分の洞窟へ急ぎ歸つた。枯れて打ち倒れてゐる丸太を洞窟内へ引きずり込むと、彼れは火事の森から取つて來た燃えさしの枝を押し着けて火を移した。枯れ丸太は少しづつ燃えて行つた。暗い洞窟内には時ならぬ光が充ち壁には彼れの亂れ髪の影響や奇妙な姿などが不思議な模様を投げた。冷い洞窟内は何時もとは全く違つた氣持のよい暖か味に充たされた。彼れはう／＼と／＼として火の不思議な力を感じ入つた。

恐らく讀者は笑ふことであらう。全く斯うした事柄は實に單純極まる話に違ひない。がそれは現代の吾々から見ればさうであつても今から何十萬年かの昔に是だけのことを考へ附いたのは非常な大発見であつたと言はなければならぬ。實に此の時の大発見に依つて吾々人類は火を利用することが出来るやうになつたことを思へば彼等原人の智慧を讚美せずには居られない。枯れた老木の火に依つて氣持ち良くされた此の最初の棲家——原人の洞窟は、初めて電燈に依つて照らされた家などよりも遙かに強い興味を惹いたに違ひない。

世界が寒くなつて來た



それから生肉を食ふ前に先づそれを熱い灰の中へ投げ入れて見たらば何ういふものだらうと或る特別に氣の利いた男が終に考へ附いた。これに依つて彼れは、當時文明の頂點に達してゐるやうな氣持ちのしてゐた穴居民等の人間智の總量に全く新たな或る物を更に付け加へたのである。

今日の吾々は、何か新しい驚歎すべき發明を耳にすると誇りかな氣持ちがする。

「これ以上の事を何か人間の頭で成就することが出来ようか！」などと吾々は言ふ。

そして満足げに吾々は微笑する。吾々が現に住んでゐる時代は過去の有ゆる時代の内で最も顯著な時代であるし、現代に於ける技術家や化學者のやうに驚異すべき奇蹟を成就したものは曾て無かつたのであるから、吾々が現代に満足を感じるのも決して無理はない。

世界が生物には殆ど生き抜けられないと思はれる程寒冷になつた今から四萬年以前の頃に、梳りもせず沐浴もしなかつた蓬頭垢面の彼等洞窟民が、その赭黒い指や大きな白い齒などの助けに依つて半死の鳥から羽毛を捲り取つては打ち捨て引き抜いては投げ捨て、洞窟内の地面に積み重つた羽毛やら骨屑やらの上に寝そべつた時、彼れは何を感じたことであらう。

——火の燃え殻や熱灰などが生肉を美味な食物に變ずることを教へられた時のやうに幸福な誇りかな氣持ちがしたに違ひない。

「何といふ驚くべき時代だらう！」彼れは恰も現代の吾々が無線電話の發明を耳にして今の時代を驚嘆するやうな風に叫んだに相違ない。小犬ほどもある大きな蝙蝠が休まず洞窟内を飛び廻つたり、小猫ぐらゐもある大きな鼠が其處らに打ち捨てられてゐる動物の骨屑などの間をがさ／＼と捜し廻つたりしてゐる側で、彼れが自分の最上の食事として嚙つた様々な動物の骨片が散亂し、羽毛や骨屑などの推積した中に寝ころびながら、彼れは自分自身の完成といふことを夢見たことであらう。

さうして暮らしてゐる間にも洞窟が周りの岩石の重みで押し潰されて了ふことが良くあつた。さういふ時には彼等は、自分自身が食つた動物共の骨屑の間へ、かた／＼か敲きつけられたり擲り出されたりするのだつた。そんな風にして其のまゝ埋められて了つた者が幾らあつたか知れない。

何萬何千かの長い年月の後に人類學者といふものが現れて来て、シヨベルや手車などを持ち

世界が寒くなつて来た



廻つて諸所に穴掘りを始めた。

彼れは此方に横穴を掘つて見たり彼方に竪孔を掘つて見たりした。そして終に此の太古の時代に於ける悲劇の舞臺を掘り當てた。私が今斯うして皆様に穴居時代の原人のことをお話することが出来るのも彼れのお蔭である。

### 三、石器時代の終末

寒い氷河時代に消滅せる人種や動物……季候徐々に變化す……自然は急がず……氷河時代の四期……三萬年前……人類の遺物……人類の歴史始る……木や石の道具……荒削りの石斧……磨いた石斧……人類洞窟を去る……水邊の生活始る……樹上の家……湖上の小家……食料の貯藏を始む……貯藏器の發明……農耕の始り……流浪生活の打ち切り……新文明の光り南から來る……石器時代の終り。

此の寒冷な時代に生き抜けようとした生物の苦闘は實に激しくも凄まじいものだった。人類や動物などの多くの種類が此の間に地球の表面から消え失せた。吾々はたゞ其の骨を發見するだけである。

其等の種族は飢餓と寒さと缺乏のために地上の生活から拭ひ取られて了つたのである。先づ最初に子供達が死に次ぎに親達が死んで行つた。年寄つた連中は、防禦の手が無くなつた



洞窟を占領しやうと焦慮<sup>あせ</sup>り立つてゐる荒々しい猛獸共の情容<sup>なさげようしや</sup>赦<sup>ゆる</sup>もない爪牙に蹂躪<sup>しや</sup>されるまゝとなつた。併し漸くまた氣候の變化が來て徐々に空中の水分が減じて來た時、是等の荒々しい侵入者——猛獸共はアフリカの藪地の中心に陰れ<sup>かげ</sup>所を見出さなければならぬやうにされた。それ以來彼等は其處に棲息して來たのである。

今お話しやうとする氣候の變化といふのは極めてのろ／＼とだん／＼にやつて來たのであるから此の時代の歴史を適當に語ることは誠に困難である。

自然といふものは決して急がない。彼女は永遠の時を持つてゐるのだ。その永遠の時の内で周到な注意を以て必要な變化を生み出して彼女の仕事を完成しやうとしてゐるのである。

氷が谷々へ下りて來てヨーロッパその他の諸大陸の大部分を今日のグリーンランドに見るやうな數千呎の厚い氷で埋めつくして了つた時期を有史前の人類は少くとも四回通過した。

此の四期の最後の一期は今から殆ど三萬年前に終局したのである。

人類が道具類や武器や繪といふ様な形式でその生存の具體的證據を死後に残すやうになつたのは此の時代から後のことである。歴史は此の最後の寒冷な時期が過去の事になつた時に

始まる、と吾々は一般的に言ふことが出来る。

生活への終りなき苦闘は生き残つた者共に多くの事を教へた。

石や木で工夫した色々な道具が、恰も現代に於ける鋼鐵の諸道具のやうに其の時代には一般に行はれるやうになつた。

粗雑<sup>ざつ</sup>に削つて造つたどけの是までの燧石<sup>フリント</sup>の斧が、もつと無限に利用された所の斧のためにだん／＼取つて代られるやうになつた。この斧も矢張り燧石<sup>フリント</sup>であるが其れ迄の物のやうに荒削りに拵らへたのとは違つて念入りに磨いて鋭い刃を附けたものだつた。今まで彼れが蹂躪されてゐた多くの動物に對して此の時代からは敢然として攻撃することが出来るやうになつたのも此の磨いた石斧のお蔭だつた。

マンモスは最早見られなかつた。

マスク・オックスといふ麝香牛は北極圏内へ退却して了つた。

虎は永久にヨーロッパから立ち去つた。

洞窟に棲んでゐた穴熊も最早小さな子供達を食ふやうなことが無くなつた。



凡ての動物中で最も弱く最も孤獨無援だつた人類の有力な脳髓は、今や人類が他の凡ての動物の君主となり得たほどの怖るべき破壊器を案出したのである。

自然に對する最初の大勝利は斯くして得られ多くの大勝利もやがて相次いでやつて來ることになつた。

獸獵にも漁獵にも適した一揃ひの道具が備はつた洞窟民等は今度は新しい住地を探し始めた。

河川や湖沼などの岸邊は一定の活計を保つ上に最上の機會を供してくれた。

斯くて古い洞窟は抜け殻となり人類は水の在る方へ移住するやうになつた。

今や重い斧を自由に扱ふことが出来るので樹木を切り倒すことも最早左して困難なことではなくなつた。

數へ難いほど長い〳〵年代の間、鳥類は、木の枝切れや草などを集めて樹の枝の差し交はした間などに、棲み心地の良い家を組み立て、は生活して來た。

原始人は此の鳥類の仕方を見習つた。そして彼れも亦「巢」を築いて人間の「家」と呼んだ。

アジア洲の或る一部の地方に住んでゐた原始人は鳥と同じ様に樹木の枝の間に巢を造つたものもあつたが他の地方のものはさうはしなかつた。樹の枝の間に造るのでは餘り狭すぎるし彼れの目的に取つても不便であつた。

そこで彼れは多數の立木を伐り倒した。是等の丸太を淺い湖の底の軟かい土中へ打ち込んだ。其等の枝の頂上に木を並べて床敷を造り、此の上に彼れの最初の木造家屋を建てた。

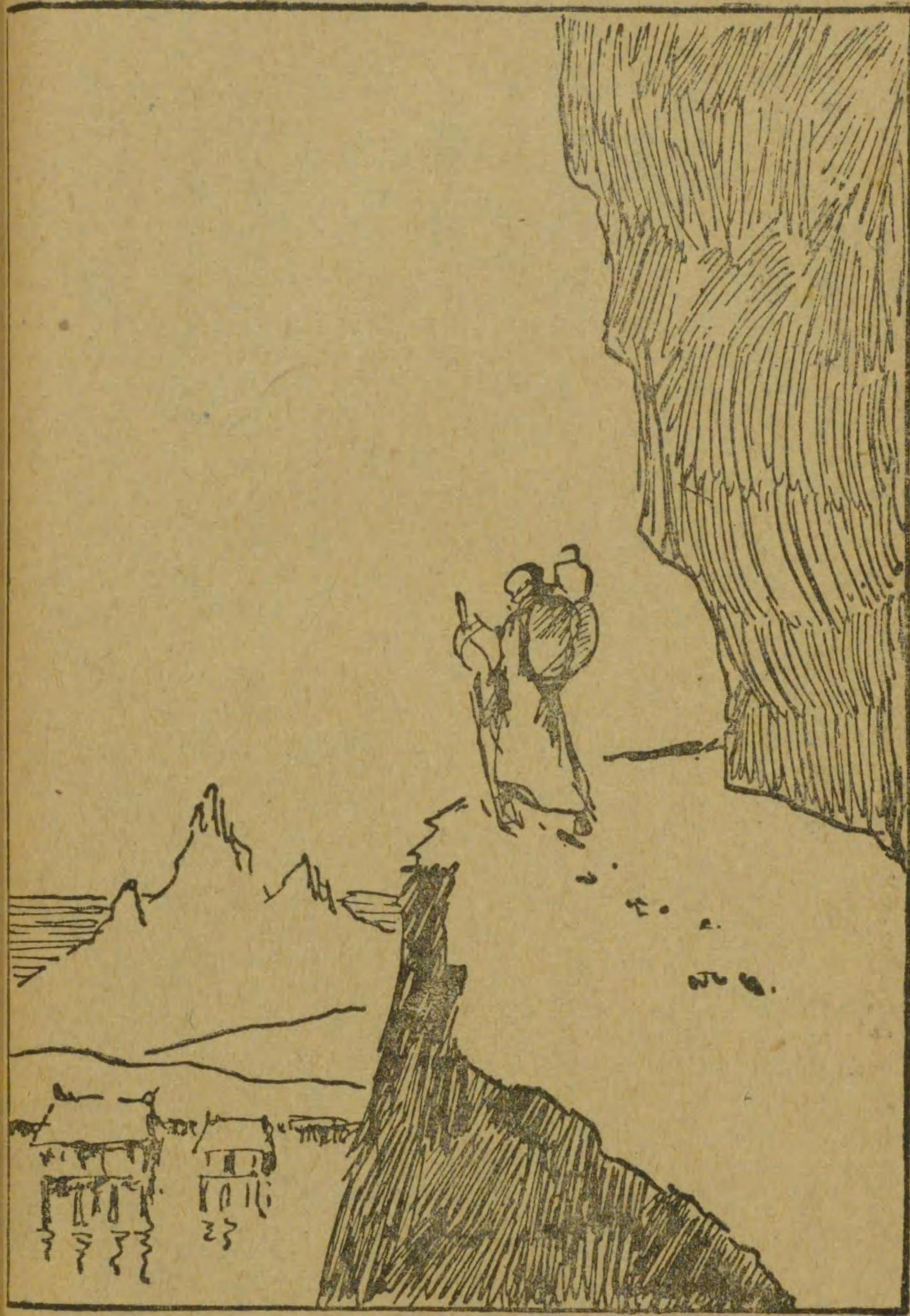
これはあの前に住んでゐた洞窟などより色々な便利があつた。

猛獸も之を破つて飛び込むことは出来なかつたし盜賊が侵入することも出来なかつた。また湖その物は新鮮な魚類を無限に供給する無盡藏の貯藏庫のやうなものだつた。

かうした棧の上に建てた家は古い洞窟などより遙かに健康に適してゐたから、子供は丈夫に成育する機會を與へられたわけだつた。従つて人口は堅實に着々増加したから、原始の時から曾て一度も人類に占領されたことのない荒野も、廣い地域をだん〳〵と人類のために占領されるやうになつた。

さうしてゐる内にも始終新しい發明が次ぎ〳〵に行はれ、そのために生活は益々氣持ち良





有史前ノ湖上住民の小屋——南方から来た旅人が発見して驚いてゐる所

くなり危険も益々減じて來た。

併し是等の生活革新は必ずしも人類の腦力の明敏なるが爲めに生み出されたものでないことが随分屢々あつたのである。これは吾々人類が自分を反省して見る必要のあることを語つてゐる。

彼れは大抵の場合單純に色々な動物の眞似をしただけである。

夏の間には豊富に在るところの胡桃や櫟の實などを埋めて置いて、長い冬の間を過ごすための用意をする動物が澤山あることは無論誰も御存知だらうと思ふ。例へば栗鼠の如きも其の一つで、彼れは冬から早春までの間に食べる食料を、庭や公園などに在る自分の食料置場へ貯へるために、始終せつせと稼いでゐる。

多くの點で此の栗鼠などよりも愚かだつた原始人類は、將來の用意のために何物かを貯へて置くといふやうな事は少しも知らなかつた。

彼れは自分の飢えの感じが止まる迄食ひ、少しも欲しくなくなれば其のまま、腐敗するに委せた。その結果、寒い冬の間中食ひ物無しで通さなければならぬやうな事が良くあつた。



従つて飢えと缺乏のために死んだ子供達が多かつた。

とうとう彼れも他の動物の仕方を見習つて食料の貯藏を始めるやうになつた。夏や秋に色々な食物が在り餘るほど手に入ると其れを適當な置場に圍つて匿しまひ込んで置くことにした。その中には小麥その他の草の實などが澤山あつた。

「その内に土器、陶器などの焼物を用ふるやうになつたが初めて斯ういふ物を發明したのは如何なる天才であつたか吾々は知るよしもない。

だが是は多分、料理場で始終骨を折つて働かなければならなかつた女達が發明したものであらうと思はれる。ごたくと不整頓な料理場で次から次へと手の掛かる煩はしさに疲れた彼女は少しでも其の手数を省かうとつて、終に斯うした發明を成就するに至つたのであらうと察せられる。粘土の厚切れが強い天日に長く曝さらされてゐると自然に焼かれたやうに堅くなつて板のやうになることに彼女は氣が附いた。

平つたい粘土板を煉瓦のやうに拵へることが出来るとすれば、同じ物で少し反そり加減になつた恰好かつかうの物でも同様に堅くすることが出来る筈である。

その通り、煉瓦は陶器の一片を成すやうになつて今や人類は明日の日のために食物を取つて置くことが出来るやうになつた。

此の發明に對する私の賞讃が誇大に過ぎると思ふ者があるならば先づ朝餐の卓を眺めるが良い。そして其れれ違つた形を持つた色々な陶器類が貴方の生活にどんな風に役立つてゐるか見るが良い。

茶飲み茶椀、御飯茶椀、小皿、鉢、その他大抵の用器が陶器である。その他時節物でない食料を一年中何時でも食膳のぼに上せることが出来るやうに貯へて置くにも色々な陶器類が用ひられてゐる。明日食べる物、數ヶ月後に食べる物など皆其れれ適當な陶器類に入れて置く場合が多い。日本のやうに立派な漆器類や木の椀などが出来る國でも陶器類の用ひられる場合の方が多い。

ガス・タンクの如きは、陶器類のやうに壊れ易くなく粘土ほどに多孔質でないところの鐵で造られてゐるが、これも要するに大きな甕かひに他ならない。甕も此の時代の原始的な人類のお神さんが工夫して拵らへ出した物の一つである。樽でも桶でも、瓶や徳利でも、鍋類でも



今日では木や金物類で造られてゐるが是等も要するに太古の土焼きの甕からだん／＼と發達して來たものに他ならない。是等の物も皆、吾々が現在多量に持つてゐる食料を將來のために貯へて置くために用ひられることが多い。

石器時代の人類も斯様にして必要な日のために食物を貯へて置けるやうになつたので、其處で初めて野菜や穀物類の收穫といふことを始め、其の餘りは將來必要な時のために廻して置くやうになつた。

之に依つて吾々は、人類最初の小麦畑やその他の田圃は此の石器時代後期の間に初めて出現したもので、初期の湖上住民の居住地の附近を取り巻いてゐたに違ひないと判斷することが出来る。人類の農耕は此の時代に始まつたのである。

また之に依つて吾々は推察することが出来る——此の時代になつて人類は流浪生活の習慣を初めて放擲して一定の場所に落ち着き、彼れは其處で自分の死の時が來て自分の仲間の者共の間に鄭重に葬られて了ふ迄自分の子供等を養育するやうになつたのである。

吾々の祖先に當る是等の最も初期の祖先達は、あのまゝ、彼等の運命のまゝに放任されてゐ

たにしても、彼等自ら進んで野蕃な風習から脱却したに違ひないと言つても決して誤りではなからう。

併し突然、彼等の孤立状態に終局を告げる日が南方からやつて來た。

怒濤逆巻く海原を勇ましくも乗り越え、行く手を阻む山々を踏み越えて未知の南國からやつて來た旅人が、中央ヨーロッパにちらほらと散在してゐた彼等野人の國へ現れたのである。二六頁の挿繪参照)

旅人は荷物を背負つてゐた。

彼れは荷物をひろげた。驚いた野人等は眼玉を圓くして好奇心に戦きながら旅人の取り出す色々な物を見詰めた。彼等の眼に映つた物は今まで夢にさへ見たことのない不思議な物ばかりだつた。

彼等が見たのは青銅の鎚や斧、鐵造りの色々な手道具、銅造りの呪かまど、旅人が硝子と呼んだ不思議な色をしてゐる物で出來てゐる美しい裝飾品などであつた。

斯くして其の夜の中に、あの長かつた石器時代も遂に終局を告げた。



石器時代は新しい文明に取つて代られたのである。新文明、それは今から數十世紀の昔に木や石の諸道具を免職させたものであり、吾々の現代まで持續してゐる金屬時代のために基礎を据え附けたところのものであつた。

これからお話しやうとするのは此の新文明に就いてあるが、暫く北方大陸を去つてエジプトや西方アジアを歴訪すること、しやう。

「併し、それは不可い。」と讀者から苦情が出るかも知れない。「初めの約束は有史前の人類に就いてお話し、てくれる筈だつた。そのお話が今恰度佳境に入つて來た所で、此の章をお終ひにして世界の他の部分へ跳び移つて私達讀者を否應なしに引つ張つて行かうといふのは約束違ひではないか！」

まあ、そんなに騒がなくても宜しい。如何にも讀者の苦情は一應は御尤もだ。

だが皆さん、不幸にも歴史といふものは、あの規丁面一方の數學のやうなものではないのだ。數學の方では一の次ぎは二、二の次ぎは三、三の次ぎは四、といふ風にキチンと順序が極まつてゐる。

ところが歴史は一から九へ飛んだり、九から今度は三へ飛び歸つたり、それから五へ跳び移つたりする。一寸見たところ少しも精確さや順序といふものが無いやうに思はれる。これには相當の理由がある。

元來、歴史は嚴密に言ふと科學ではないのである。歴史は人類に就いて物語る。ところで其の人類なるものは、その性質を吾々が變化させてやらうと思つて如何に努めて見たところで、二三が六、六九の五十四といふやうな工合に規則正しく精確に活動する事を拒絶する。これは個人に就いて見れば明らかである。時計の針のやうに或ひは物指のやうに何から何まで規丁面づくめで生活出来る者は餘程の變り者である。そんな變人は萬人に一人も居るか何うか怪しい。それほど大抵の人間は自由を欲する。殆ど氣儘勝手と評して良いほど自由を愛するのである。而も個人々々で皆それが色々に變つてゐる所に更に面白い複雑味がある。

二人の者が同じ事を少しも違はないやうに行ふものではない。二人の人間の別々の腦髓に向つて、精確に同じ結論に到達せよと望むのは無理である。

かうした事は幼少の人達には呑み込みにくいかも知れないが今に大きくなれば自然に分る



ことである。

斯かる關係は數百世紀以前の太古に於ても別に異つてゐたわけではない。

有史前の人類は今もお話し、た通り既に進歩向上の途に就いてゐた。彼等は氷や雪や猛獸などに打ち勝つて生き抜けなければならなかつた。そのために苦心慘膽して工夫を凝らした。たと其れだけでも既に重大な立派な進歩をなしたものと言はなければならぬ。その他有用な物を澤山案出したのである。

さうしてゐる内に、突然、世界の別な地方に居た他の民族が彼等の地方へ入つて來た。あの荷物を背負つて來た旅人はその一人だつたのである。

世界の別な地方、それはエジプトや西方アジアのことである。此の地方に住んでゐた民族は、中央ヨーロッパの地方で未開野蕃な生活をしてゐた民族よりは大分考へが進んでゐた。南方からやつて來た進歩した是等の民族のお蔭で、中央ヨーロッパの野人等は忽ち石器時代から引き出され、怖しい速度で突進し始めた。さうして曾て此の遊星——吾々の地球の上に見られなかつた高度の文明へ極めて短い歲月の間に到達したのである。彼等は斯様にして自

分等の知つた事柄を、今度は自分等よりも無智な更に他の民族に教へ始めた。

斯ういふわけであるから石器時代の野蕃状態から彼等が斯かる向上進歩の道へと進んだ有様を知るためには、彼等を先づ斯様に導き出してくれたところのエジプトや西方アジアの地方に住んでゐた民族に就いて知らなければならぬ事になる。





## 四、文明の夜明け

近代文明の基礎を据ゑ附けた太古の諸民族……バビロニヤ人……エジプト人……カ  
レドニヤ人……スメリヤ人等の功績……文明發祥地（ナイル河畔……メソポタミヤ……  
地中海東岸）

吾々は實行時代の子である。

吾々は自働車と呼ぶ自働的機關車に乗つて好きな所を殆ど自由に旅行することも出来る。  
五十里、百里も離れた所にゐる友達と話さうと思へば電話口へ行つて「もしく……」と話す  
ことが出来る。

夜、室内が暗くなれば、一つのボタンを押すとか或ひはスイッチを一寸ひねるとかしさへ  
すれば直ぐに灯が點く。

若し愈々寒くなつて來たならば、別のボタンを押せば良い。すると電氣暖爐から、吾々が

勉強したり會談したりしてゐる間中氣持の良い暖か味がひろがり出て來る。

その反對に熱い夏になるとこの同じ電流が扇風機を動かして小さな人工的の嵐を掻き起し  
吾々を涼しく氣持ち良くさせてくれる。

吾々は自然の有ゆる力を自由に驅使する魔法使ひのやうに、恰も自然の力が吾々の極めて  
従順な奴隷であるかの如く吾々のために働かしめることが出来る。

併し吾々の輝かしい成功を誇る時に吾々の忘却してならない事が一つある。

吾々は斯様に輝かしい吾々の近代文明といふ大廈高樓を建築したが、それは太古の世界に  
於ける諸民族が多量の苦闘を拂つて養ひ來つたところの智慧をその土臺として建築されてゐ  
るのである。吾々はこの一事を忘れてはならない。

さて、これからお話する所には奇妙な名前が始終出て來るが讀者は怖れてはならない。

バビロニヤ人、エジプト人、カレドニヤ人、スメリヤ人などの諸民族は悉く死に果て、今  
日では居なくなつたが、併し彼等は今日の吾々自身の生活の上に有ゆる點で影響を持續して  
ゐる。吾々が書く文字、吾々が使用してゐる言語、吾々が橋梁や摩天樓を建築する前には是



非とも解かなければならぬ複雑な數學上の問題、といふやうな其他種々の點で吾々の生活に對し今尙ほ彼等は影響を持続してゐるのである。

彼等諸民族は、吾々の此の遊星が高い空の宏大無邊な空間を運行し續けてゐる限り、何時までも吾々の感謝を受ける資格を失はない。

私がこれからお話しやうとする是等の民族は一體何處に住んでゐたか、といふと大體三つの定まつた地方を指すことが出来る。

その内の二つの地方は大河の岸邊に沿うてゐた。

第三の地方は地中海(メデイテレーニアン・シー)の岸に位置を占めてゐた。

文明の最も古い中心はエジプト(埃及)の國にあるナイル河といふ大河の谷間に發生した。

その第二に古い中心は西方アジアに在る二つの大きな河、チグリス河とユーフラテス河との間に挾まれた肥沃な原野に在つた。古代人は此の原野にメソポタミヤといふ名前を付けてゐた。

*Mesopotamia*

第三に古い文明中心地は地中海の沿岸に見出される。此の沿岸地方には、有ゆる殖民國の内で最も早かつたフェニキヤ人や、自分等の持つてゐた道德法の主要な原則を世界の爾餘の地方へ與へたところのユダヤ人などが住んでゐた。

此の第三の文明中心は吾々がシリヤと呼んでゐる地方で、昔のバビロニヤ人の呼んだ名前で言へばスーリーである。シリヤといふ發音は此の昔の名前スーリーから移つて來たものである。

さて是等の諸地方に住んでゐた民族の歴史は前後五千年以上の長きに亘つてゐる。

それは極めて複雑に入り組んだ物語であるから、茲でそれを詳しく述べてゐることは出来ない。

であるから、私は彼等の冒険に充ちた多くの經歷を興味深い一つの物語に織り込んで皆さんの前へ贈らうと思ふ。



## 五、太古の繪文字

六千五百年前のエジプト……言葉を保存する術の發明……文字なしに暮らした百萬年間……音聲を形に移して示す方法……ローマ人とエジプト……ナポレオンのエジプト上陸の結果……青年士官ブルースサルドのロセッタ石發見……エジプトの太古文明の秘密を握る「石の鍵」……象形文字解讀者小シャーンポリヨンの功績……エジプト僧侶と象形文字……「ハイエローグリフィック」の語義……洞窟民の繪文字とエジプト文字の相違

キリストの生れる五十年前にローマ人は地中海の東岸に沿つてゐる地方を征服した。此の新版圖の内にエジプトといふ國があつた。

吾々の歴史の舞臺の上で偉大な役割を演ずべき將來を持つてゐた當時のローマ人は實行果敢な民族だつた。

彼等は多くの橋梁を架設し、長大な道路を四方八方に切り開いた。彼等はまた小部隊の併

し非常に良く訓練された軍隊や文官や武官に依つてヨーロッパの大部分、東部アフリカ並びに西方アジアの大部分を統治した。

藝術や諸種の學問は何うだつたかといふと是等のものは餘り彼等の興味を惹かなかつた。堅琴を奏でられる者や春の詩を詠ずることが出来る者などを彼等は疑念を以て眺め、綱渡りの出来る者やプードル犬を後足で立てるやうに馴らしたりする者の方が惻口なのだと思ふだけに過ぎなかつた。彼等は藝術や學問を彼等の輕蔑してゐたギリシヤ人や東洋人に委せ、自分等はその膨大な帝國內に屬する一千餘りの國々の間に秩序を保たせることに夜も日も足らなかつたのである。

彼等が初めてエジプトに足を踏み入れた時此の國は既にずづと前から驚くべく古い歴史と高度の文明とを持つてゐた。

エジプト民族の歴史が始まつてから今日まで實に六千五百年以上も經過してゐるのである。

チベル河畔の沼澤地の眞中に都市を建設することなどは誰一人夢にも見なかつた時よりも



つと以前に、エジプトの代々の王は遠く廣く此の地方一帯を統治し其の宮廷を凡ての文明の中心としてゐたのであつた。

未だローマ人が不恰好な石斧で狼や熊を追ひ掛けてゐた野蕃な原始状態に在つた頃疾うからエジプト人は書物を書いたり、複雑な醫術に依つて色々な醫療や手術を施したり、彼等の子供達に掛け算の九々を教へたりしてゐたのである。

此の偉大なる進歩が何うして彼等の間に出来てゐたかといふと、それは主に一つの實に驚嘆すべき發明のお蔭だつた。即ち彼等の口で話す言葉や頭に浮ぶ觀念を自分達の子孫のために残して置けるやうに保存する術——彼等の進歩は主に此の術のお蔭だつたのである。

吾々は之を記録術と稱する。

今日吾々は、太古の人間が書物もなく新聞紙や雑誌なども無しに良くまあ生活することが出来たものと驚くほど、吾々は文字の使用といふことには深い慣染になつてゐる。

併し實際彼等は文字なしに暮らした。人類が此の遊星の上に於けるその滞在の最初の百萬年間にあの様にのろ／＼と極めて少し、か進歩しなかつたのは實にそのためだつたのである。

る。

犬や猫はその仔に極く單純な事を幾つか數へるばかりである。例へば見知らぬ者に吼えるとか、猫ならば立木その他のさうした物に掛け上ることとか、極く簡單なことを幾らか教へるだけで、無論彼等には文字を書くことは出来ないから彼等以前の無數の先祖が代々經驗した事柄を知識として用ふることが出来ない。原始的人類は恰度かうした犬や猫のやうなものだつたのである。

かう言ふと奇妙に聞えるかも知れない。そんな單純な事を何故そんなに大騒ぎすることがあるのだ？と思ふ人もあるだらう。

だが皆さんが手紙を書く時のことを考へて見られるが良い。

何處か山奥へでも旅行して珍らしく熊か鹿でも見たとする。早速それを町の家待つてゐる家族の者か友達にでも知らせ度くなる。

その時貴方は何うするか？

先づ一枚の紙を取り出してペンか鉛筆で點を打つたり棒を引いたりする。それから封筒の



表にも幾つか點や棒を書き附ける。かうして出来上つたお使者に切手を貼りつけてポストへ持つて行つて投げ込む。

斯様にして點や棒をかけたのは一體何うするためだつたのか？ といふと、口で言ふべき言葉を色々な形に移し變へて他の人にも分るやうな、眼で分る符牒にするためであつた。

然らば貴方はさういふ符牒を造る方法を如何にして知つたか？

無論、それは貴方の口で話す言葉の音を表示した所の精確な形即ち文字を如何にして書けば良いか、其の書き方を誰か教へてくれたからこそ貴方も知つてをられるのである。決して貴方が自分の力だけで考へ出したものではない。若し勝手氣儘に造り出したものなら郵便配達夫にも分らないだらうし無論相手の人の手にも入らないだらう。運良く入つても分る筈がない。詰り口から發生する一定の音聲が萬人共通の合言葉であるやうに、それを形に移した文字は萬人共通の符牒である。吾々は同じ國語を用ひてゐる人々と斯ういふ合言葉や符牒を用ひて意思の交換をすることが出来る。

吾々は唇や齒や舌や呼氣や聲帯などの複雑な關係に依つて色々な音聲を發することが出来

る。そして之に相當した符牒を形として示すことが出来る。或る喉音を發しては之を「ぐ」とか「G」とかいふ風な形に表し、齒を閉ぢて其の少しの隙間から平らに息を吹き出した時にはその音を「す」又は「S」といふ符牒で形に示し、口をや、廣く開けて蒸汽機關のやうな噪音を發する時には「ふ」とか「H」とか書き表す。

斯様に一定の音聲を一定の形に移し變へて示す方法を人類が發見する迄には實に何十萬年といふ長い〜歲月を要したのである。而して此の發見の功績は太古に於けるエジプト人に歸するものと言はなければならぬ。

無論彼等は此處に印刷されてゐるやうな文字を使つたのではない。彼等は彼等で別な文字を持つてゐたのである。

それは何んな物だつたかといふと可なり複雑ではあつたが、なか〜美的なものであつた。詰り一種の繪文字である。

一般にそれは、家や田園に關する様な事物、即ちナイフや鋤、鳥や壺といふやうな物の小さな繪形から組み立てられてゐた。是等の小さな形を書家が寺院の壁や、彼等の死んだ王



の棺や、パピルス草の葉を乾した物などへ刻みつけたり或ひは塗りつけたりしたのである。英語の「ペーパー」即ち紙といふ語は此の「パピルス」といふ語から移つて來たものである。

併しローマ人が此の言はゞ大きな圖書館へ入つた時、彼等は別段興味も感じなかつた。

當時ローマ人は無論彼等自身の記録術を持つてゐた。彼等はそれが非常に優れてゐると考へてゐた。

彼等は、ギリシヤ人(此のギリシヤ人からローマ人はそのアルファベットを學んだのである)がフェニキア人からそれを學んだのである事、そのフェニキア人が更にまた太古のエジプト人から學んだものであることを知らなかつた。ローマ人はそんな事は知らなかつたし元來氣にも留めなかつた。彼等の學校ではローマ式アルファベットのみ教へられ、ローマ人の子供達に良かつた事は他の如何なる者にも良いものだとされてゐた。

貴方がたは、エジプトの言語が當時ローマの統治者達の探つた無關心と反抗とのために其後餘り長く經たない内に亡びて用ひられなくなつた事實を承認するだらう。それは恰も「アメリカ・インディアン」の大抵の種族の言語が今日では既に過去の物になつたと同じやうに死滅

して了つたのである。

その後ローマ人の後を繼いでエジプトの統治者となつたアラビヤ人やトルコ人などは、彼等の聖書即ち「コーラン」と關聯してゐない凡ての記録法を極端に忌み嫌つた。

十六世紀の中頃になつて終に西方の國からエジプトの地へ訪ねて來たものが幾人かあつて此の地に在る奇妙な繪文字に興味を見出した。

だが其の繪文字の意味を讀み解く者は一人も無かつた。是等の西方からの訪問者は此の國の文字に興味を感じた事は感じたが要するに以前のローマ人やトルコ人と同じことだつた。

ところが第十八世紀の終りになつてブーナボルトといふ佛國の一將軍がエジプトを訪ねることになつた。彼れは昔の歴史を研究するためにエジプトへ行つたわけではない。彼れは此の國を足溜りとして遠く印度に在るイギリスの殖民地を遠征しやうといふ計畫だつた。併し此の遠征は全く失敗に歸したが、太古のエジプト文字の神秘に閉ざされてゐた問題の解決を會々助ける結果となつた。

此の佛國將軍ナポレオン・ブーナバルトの麾下の將校達の内にブルーッサルドといふ青年士



官がゐた。彼れは、ナイル河の河口西部に在るロセッタ河沿岸のセント・ジュリエンといふ城塞に留まつてゐた。

青年士官ブルーッサルドはナイル河下流の沿岸に散在してゐる古代エジプトの廢墟を捜し廻るのが好きで屢々出かけたものであつた。ところが或日のこと彼れは或る石を發見して非常に驚いた。

その附近に在る他の凡ての物と同じ様に此の石の表にも繪文字が彫りつけられてゐた。たゞこれだけでは彼れを驚かすには足らなかつたが此の玄武岩の平石は曾て發見された何れの物とも異つてゐた。

といふのは其の彫刻の書體が三様になつてゐて其の一つが有難いことにはギリシャ文字になつてゐたのである。

そのギリシャ語は直ぐ知れた。

其のエジプト式の繪文字の部分が此のギリシャ文の翻譯であることは殆ど確實だつたから詰り太古エジプトの繪文字に對する鍵が發見されたも同然だつた。これが一七九九年のこと

である。

併し此の鍵が錠前に丁度良く合ふやうにされる迄には實に苦心慘憺たる研究を要した。而もそれが三十年以上の歳月を要して此の石面に彫られてゐるエジプト文字が漸つと解讀されたのである。

鍵が錠前に合ふやうに完成されたわけである。其處で秘密の扉は開かれた。斯くしてエジプトといふ太古の寶藏はその秘密を殆ど悉く曝け出さなければならなくなつた。

此のエジプト文字の解讀といふ難事業に生涯を捧げた人を吾々は忘れ度くない。それはジャン・フランソア・シャンポリヨンといふフランス人であつた。彼れの兄も非常に學識の深い人だつたので兄と區別するために通常彼れは小シャンポリヨンと呼ばれてゐる。

彼れはフランス革命が勃發した時には未だ極く小さな赤ん坊だつたが後に將軍ブーナポルトの軍隊に務めたこともある。間もなくそれを止めて歴史の研究に没頭した。

フランスの彼れの同胞が連戦連勝の軍事に忙しい間に彼れはエジプトの土着民でキリスト教徒だつたコプト人の言語をこつ／＼と研究してゐた。十九歳の時彼れはフランスの或る小





佛國の青年士官ロセッタ・ストーンを発見す。  
(西歴1799年のこと)

さな大學の歴史學の教授に任ぜられ、其處で太古のエジプト語の繪文字を翻譯する大事業を始めた。

此の目的のために彼れは、彼のナイル河口附近の廢墟の間でブルッサルドが発見した所の有名なロセッタの黒石を用ひた。普通此の石は「ロセッタ・ストーン」と呼ばれてゐる。これこそは古代文明の秘密の扉を開くべき「石の鍵」であつた。

當時ロセッタ・ストーンは未だエジプトに在つた。ナポレオンは急遽此の國を撤退しなければならなかつたので此の珍奇な物を其のまゝ残して來たのである。一八〇一年にイギリス軍がアレキサンドリアを奮回した時、彼等は此の石を発見してロンドンへ運ぶことにした。翌年それはロンドンへ無事に到着した。今日でも此の太古の石はロンドンの大英博物館に納めてあるから誰にも見る事が出来る。斯様にしてロンドンへ運ばれて來は來たが其の碑文を讀み解く者は一人も無かつた。シャーンボリオンは此の碑文の寫しをフランスへ取り寄せて研究し始めた。

ギリシヤ文字で彫つてある部分は明瞭に解つた。それはエジプト王トレミイ五世と其の後

太古の繪文字



クレオパトラに關する話を含んでゐた。此のクレオパトラはシェイクスピアの書いた女王クレオパトラのお祖母様に當つてゐる。

併し他の二様の書體で彫られてゐる碑文はその秘密を固く閉ぢて黙つてゐた。象影文字ハイエログリフの原その一つの書體は象形文字——最も古いエジプトの繪文字——で在つた。語即ち Hieroglyphic はギリシヤ語であつて「神聖なる彫刻」の意味である。此の記録術をの目的や性質を十分に喜ばしてゐる語であるから極く相應はしい名前である。此の記録術を案出したのはエジプトの僧侶階級で彼等は、言葉を記録に留めて保存するといふ事の深い秘密を普通の人民には餘り知られ度くないと思つてゐた。書くといふ事を彼等は一つの神聖な務めとしたのである。

彼等は之を多くの秘密で押し包み、象形文字を彫刻することを神聖な技術と見做し、之を商業その他通常の實際目的のために用ふることを一般人に對して禁止した。

國內の住民が自家にのみ留まつて生活し彼等自身の田園に成熟する物だけで満足してゐた單純な農民ばかりであつた間は、斯うした僧侶階級の強制的手段も效目ききめがあつた。然るに段々とエジプトは商人貿易者の國となつて來た。そして彼等は口で發する言葉以上の交通手段

の必要を感じて來た。そこで彼等は大膽にも僧侶階級獨占の小さな繪文字を採つて其等を彼等自身の目的に合ふやうに單純化した。爾來、彼等は此の新書體で自分等の事務上の手紙を書くやうになつた。かくて此の新書體は「通用語」として知られるに至つたのである。吾々は之を其のギリシヤ名前に依つて「民用語」と呼んでゐる。

ロセッタ・ストーンには、神聖な文字とされてゐた古體と、ギリシヤ文を新書體の象形文字に翻譯したものと此の兩方が彫られてあつた。此の二つの書體にシャンポリヨンの注意が集中された。彼等はエジプト文字の彫り附けられてゐる有ゆる石片を出来るだけ澤山蒐集し、其等をロセッタ石と比較研究した。斯様にして我慢強い骨折り仕事を続け二十年後に漸く彼等は十四箇の小さな繪文字の意味を理解することが出來た。

彼れは實に、その各一箇の繪文字を解讀するのに至ま一ヶ年以上の時日を要したのである。その苦心慘憺たる耐忍強い努力は誠に敬服の至りと言はなければならぬ。

終に彼れはエジプトへ行つた。そして一八二三年に、古代象形文字に關する最初の研究書



を著した。

その九年後に彼れは死んだ。過勞のためであつた。實に彼れは、その少年時から既に携はつたところの此の難事業に對する眞の殉死者として地上を去つたのである。併し彼れの成就した偉大な功績は人類のあらん限り永遠に生き残るに相違ない。

彼れの死後、他の諸學者が彼れの研究を繼續した。その結果今日のエジプト考古學者は吾々が新聞を読むと同じ様に容易に古代エジプトの象形文字を読むことが出来る。

「シャーンポリヨンの解讀し得たのが二十年間に僅かに十四字だつたといふと、大へんよろしくした仕事のやうに思はれるだらうが、彼れが耐へ忍んだ難事業が如何に困難な物だつたかを知れば讀者も尤もだと首肯されるだらうと思ふ。そして彼れの不撓不屈の勇氣を嘆賞せずには居られないだらうと思ふ。

古代エジプト人の用ひてゐたのは獅子の繪を描いて其のまゝ獅子を意味するやうな原始的な繪文字ではなかつた。彼等の文字も獅子や鴉などを描いた繪文字——形を象つた文字に相違ないが併し其のまゝ獅子又は鴉を意味したのではない。彼の洞窟民が自分の洞窟の壁など

に猛獸の繪を彫りつけたり描いたりし始めてからといふもの長く使用されてゐた所の繪文字は、獅子の繪は獅子といふ意味を示し鴉の繪は鴉といふ意味を表はしてゐたのであるが、エジプト人は當時さうした楷梯を既に通過してゐたのである。一寸見た所彼等の文字も原始的な洞窟民が用ひ始めた繪文字と同じであるが、これは意味を表はしたのではなく音オケを表はしてゐるのである。例へばエジプト人の獅子の繪は獅子といふ意味を表はしたのではなく「ル」といふ音を表はしてゐる。此の「ル」は英語のL即ち「エル」といふ字の音「ル」に相當してゐる。また鴉の繪は「ア」といふ音を表してゐるのであつて鴉といふ觀念を示してゐるのではない。即ちエジプトの文字は形式は繪文字即ち象形——物の形を象つた——文字であるけれども實は音を示すところの音標文字である。

併しその他に原始的な繪文字——即ち「ジラフ」の繪はジラフといふ動物を意味するといふ風な繪文字も幾らか用ひられてゐた。これが音標文字の間に混せて用ひられてゐたのである。斯ういふ音標文字や純然たる原始的な繪文字などを幾つも綴り合せて一つの觀念又は文章が出来てゐるのであるから、全然手引きなしに之を獨力で解讀することは近代人には非常



な困難であつた。シャーンポリヨンの苦心と忍耐の程も察せられるのである。併し彼れの研究を基礎として後の學者達が熱心に研究した結果エジプト文字の秘密も全く明らかにされた。

當時のエジプト人は音標文字を極く省略して書く迄に發達してゐたから、其等を自由に驅使して思ふまゝを文章に表現することが出来た。従つて今日殘存してゐる彼等の文章に依つて古代の彼等の文明を可なり明瞭に知ることが出来るのである。

かういふ譯で吾々は古代エジプトの歴史は他の何れの古代民族の歴史よりも詳しく知ることが出来る。シャーンポリヨンの如き篤學者のお蔭で吾々は五六千年前のエジプト人の生活に接することが出来るのである。

## 六、ナイルの岸邊

初めてナイル河畔に入り込んだ種族……「吾々はレミイチャ」……ナイル河の氾濫

……エジプトの民族性……彼等の宗教……來世の生活……物神崇拜……自然力の崇拜

……エジプト王オサイリスの話……肉を離れた魂の住む國……ミイラの造り方……マ

ンミイといふ語……墓穴……その發達經路……ピラミッドといふ語の起り……ピラミ

ッド築造の話。

人類の歴史は一面から言へば、腹が減つて食物を探し廻る動物の經歷に他ならない。

食物が澤山あつて容易に獲り入れられる場所ならば人類は何處へなりと旅行して行つて其處に住む。

ナイル河の谷間は極く早い時代から其の名が廣まつてゐたに違ひない。遠い地方から野人の群が此の河の岸邊に集つて來た。周りを沙漠や海に圍まれてゐたので、此の河岸の肥沃



な野原に達するのは容易ではなかつた。困難に最も良く耐へ切つた男や女達だけしか生き残らなかつた。

斯様にして是等の肥沃な原野へ移つて來た民族が一體何といふ民族だつたか吾々には分らない。中にはアフリカの内地から沙漠を越えてやつて來た連中もあつた。彼等は羊毛のやうな髪の毛をして居り唇が厚かつた。

中にはまた皮膚の黄色がかつた連中もあつた。彼等はアラビアの沙漠から或ひは西部アジアの大河の岸邊からやつて來たのである。

是等の連中とアフリカ内地から出て來た連中とは此の驚くべき土地を所有するために闘ひ合つた。

彼等は部落を建設したが兩群互に打ち壊し合つた。そして今度は他の隣り部落を襲撃して奮つて來た煉瓦で彼等の部落を再建した。

段々と新しい人種が出來て來た。彼等はレミイと自稱した。これは人類の意味である。此の名前には誇り氣味が含まれてゐた。彼等は恰度今日の吾々が「大英國人」だとか「大和民

族」だとか自稱する時と同じ様な意味で「吾々はレミイぢや」と言つてゐたのである。

ナイル河は毎年夏季になると定つて氾濫したが、さういふ時の彼等は、沙漠と海で世界の他の部分から切り離されてゐる一國內の小さな島々に生活してゐた。彼等が吾々の「島國民」と呼ぶところの者であり、稀れに彼等に接する隣りの部落民の風俗習慣を持つてゐたことは當然である。

彼等は彼等自身の仕來りを最も好んだことと言ふ迄もない。自分等本來の風俗習慣が他の誰のよりも少し上等だと彼等は考へてゐた。それと同じ様に彼等の崇拜した神々は他の何れの國の神々よりも偉いのだと考へられてゐた。彼等は必ずしも外國人を輕蔑したわけでは無いが何となく外國人を可哀さうな人間だと感じてゐた。そして外國人の思想のために自分等の仲間が墮落腐敗されることがないやうに、出来るだけエジプトの領土内へ踏み込ませまいとしてゐた。

彼等は心の優しい民族だつた。慘酷な事などは殆どしなかつた。また忍耐強くして仕事に骨折ることが平氣だつた。従つて生活は安樂であつた。彼等は、單なる生存のために苦闘しな



ければならぬ北方地方の住民のやうに吝嗇にもならず卑しくもならなかつた。太陽が遠い沙漠の血のやうに紅い地平線上に昇る時彼等は田畑を耕しに出かけ、夕日の最後の光が山々の背後に消えせる時寢床へ入つた。

彼等は勤勉に働き、仔々砵々として働き、如何なる出来事に遭遇しても平然として耐へ忍んだ。

彼等はいかに信じてゐた。——此の世の生活は死が吾家へ見舞つて來た瞬間から始まる新生活への短い序幕に他ならないと。斯くて終に來世の生活が現世の生活よりも重要だと見做されるに至り、彼等はエジプトの肥沃な國土を死人崇拜のための一大伽藍に變へた。

此の太古の谷間に發見されたバビロンの卷物は、大抵みな宗教上の物語に充たされてゐる。之に依つて吾々は、彼等エジプト人が如何なる神々を崇拜したか、また永遠の眠に就いた人々に對して有ゆる幸福と怡樂とを確保しやうとして彼等が如何に努力したか、精確に知ることが出来る。その初期の時代には各々の小部落が其れ／＼一つの神を持つてゐた。

此の神は奇怪な恰好をした岩石とか特別に大きな樹木の枝とかに宿つてゐると屢々考へら

れた。神は非常な禍害を加へたり收穫物を破壊したりすることがあつたから人々は神を慰め神と仲良くしなければならなかつた。そこで各部落では神に贈物を捧げた——食物や花束などを神前に献じた。

エジプト人がその敵と戦ふために出かけた時彼等の神も一緒に出陣するものと思はれてゐた。終に神は、人々が危険な時に周りに集るところの一種の軍旗となつた。

併し國が古くなり益々良くなつた時、道路は敷設されエジプト人は良く旅行し始めた。かくて奇妙な岩石や老木といふ様な古い物神は重要さを失ひ、誰も係はない片隅の方へ投げ棄てられたり入口の段々として用ひられたり腰掛けに使はれたりするやうになつた。

是等の古い物神の地位に新しい神々が取つて代つた。其等の新しい神々は古い物神よりも遙かに偉大であつた、ナイル河の谷間に住む全エジプト人の生活に影響した所の諸々の自然力は皆この神々の示現に他ならぬと考へられてゐた。

是等諸々の神々の内で最高の座に在つた大神は何であつたかといふと、凡ての物を生育させるところの太陽であつた。



1. 太陽

その次ぎの神は、日中の暑熱を和らげたり、田畑を新しくし肥沃にするために上流から肥えた土を毎年運んで來たりするところのナイル河であつた。

2. ナイル河

第三位の神は、夜中に空のアーチを小さな舟で漕いで行く優しい心のお月様であつた。また雷神や稲妻の神があつた。その他エジプト人の快樂と慾望に就いて生活を幸福にしたり慘めにしたりする様々な自然力が神として畏敬された。

3. 月

斯うした様々の自然力のために全然左右されるまゝになつてゐた太古の人類は今日の吾々のやうにたやすくは自然力から逃れることが出来なかつた。吾々は家根の上に避雷針を立て、落雷を豫防したり、大きな貯水池を造つて夏季數ヶ月間全然降雨がなくても水に差し間へることのないやうにしたりする。彼等にはそれが出来なかつた。その生活は恰かも荒れ狂ふ波の間に／＼漂ふ小舟のやうなものであつた。

神々は太古人の日常生活の一部をなしてゐた。彼れが母の胎内から生み出された瞬間から彼れの肉體が永遠の休息のために用意される日まで神々は彼れの道伴れであつた。

轟雷、電光、河水の氾濫といふやうな激しい現象が單なる非人格的な物であらうとは彼等

には想像も出来なかつた。或る自然力は恰も機關手が機關車を運轉し船長が汽船を自由に舵取りするやうに、古代人の生活を操りその主宰者となつてゐたのである。

そこで至上神が軍隊に於ける司令官のやうに造り出された。司令官の下に幾人かの幕僚があるやうに此の至上神の膝下に數體の神々があるとされた。

是等の神々は至上神の命令に従つて其れ／＼自分の領内で獨立して活動することが出来るのだと考へられてゐた。エジプト全住民の安危に係はる非常時には是等の神々が至上神の命を畏んで一致協力して活動するものと信じられてゐたのである。

エジプトの國を統治す至上神聖の王者はオサイリスと呼ばれてゐた。彼れの驚くべき生活に關する物語はエジプトの凡ての子供達にまで知られてゐた。――

或る時、ナイル河の谷間にオサイリスといふ王様が住んでゐた。

この王様は、田畑を耕す方法を人民に教へて下すつたり正しい法律を定めたりした善良な方だつた。然るに彼れはセスといふ名前の悪い一人の弟があつた。



さて、心の悪い弟のセスは兄のオサイリスが徳の高い善良な王であるのを妬んでゐたが、或る日のこと、兄を晩餐に招待した。食事が終へてからセスは「兄様に御覧に入れ度い物があります……」と言つた。

始終何事にも熱心に氣を配つてをられる王様が、それは何物ぢやな、とお尋ねになつたのでセスは次ぎの様に説明した。

「それは一つの棺ですが、なか／＼面白い恰好に出来てゐるんです。中へ入つて寝ころぶと着物を着たやうに工合良くびつたり身體に合ふんですよ。」

「ふム、面白さうぢやの、一つ入つて見ようかな。」

「え、入つて御覧なさい、全く素敵な氣持ちがするものですよ。」

さう言ひながら彼れは優しい王様を導いて行つて棺を見せた。そして蓋を取つてオサイリスを中へ入らせた。王様が棺の中へ寝ろんだ。その時ボタン、とセスが蓋を閉ぢて了つた。それからセスは下僕共を呼び寄せて命じた。

「この棺を抛り込め、あのナイル河の水底へ！」

間もなく此の恐ろしい事件の報道は國中にひろまつた。オサイリスを非常に深く敬愛してゐた後のアイシスは時を移さずナイル河の岸邊に駆けつけた。暫くすると波のために岸邊に打ち上げられた物があつた。それはセスの投げ込まれた棺に相違なかつた。早速それを宮殿に運ばせるとアイシスは、別の土地を治めてゐる自分の王子ホーラスに此の話をするために出かけて行つた。

隙を覘つてゐた悪人セスはアイシスが出掛けるのを見済まして直ちに宮殿内に闖入し、棺の中から引きずり出すとオサイリスの五體を十四箇に切斷して了つた。

やがて立ち歸つて來たアイシスは此の慘酷な仕業を見て愕いた。急いで死體の十四切れを集め、心を籠めて叮嚀に縫ひ合せた。と不思議や、一度無慘に斬りさいなまれた王の肉體は間もなく息を吹き返し元の立派なオサイリスとなつた。

悪漢セスは何うなつたか？ 彼れは王の復活を耳にして早くも何れへか姿を晦まさうとした。がさうは行かない。王オサイリスと后アイシスとの間に生れた王子ホーラスが母后からの警告に依つて直ちに彼れを召し捕つた。ホーラス王子の正義の劍に依つて終に悪人セスの



命は絶たれた。

復活せる王オサイリスは、人々の靈魂が肉體を去つた後に行かねばならぬといふ地下の世界の王として永遠に治めてゐるのだと言ふ。

誠實な妻、悪人の弟、父の仇を打つた孝順な子、そして悪に對する善の最後の勝利に關する此の物語はエジプトの人民の宗教的生活の根柢となつた。

オサイリスは、冬になると一見死滅するやうに見えても來春また新しく復活して來るところの凡ての生ける物を主宰する神と見做された。未來の生活の統治者たる彼れは人々の行爲の最後の審判者であつた。慘酷だつた者、不正だつた者、弱きを虐げた者に取つては禍なるかな！ オサイリスの最後の審判は斯かる者を見逃す筈がない。

肉體を離れ去つた魂の住む國、それは何處に在つたかといふと西方の高い山々の彼方にあつた。(それはナイル河の水源地に當つてゐる。)であるから當時のエジプト人は誰れかゞ死んだ、と言はうとする時「彼れは西へ行つた。」と言ふのが慣はしになつてゐた。

アイシスもオサイリスの光榮と義務とを彼れと共に分擔してゐた。彼等の王子ホーラスは

Horizon

太陽の神として崇拜され、エジプトの新王朝の始祖となり代々のエジプト王は中年時までの名前をホーラスと呼ぶのが慣はしであつた。太陽の沈む場所を指す「ホライズン」といふ語は此の最初の王子の名前ホーラスから來たのである。

各々の小都市や小部落は無論依然として其れれ、彼等自身の神々を崇拜してゐた。併し一般に言つて、凡ての人民はオサイリスの神々しい威力を認め彼れの恩寵を受けようと努めたのである。

これは實に容易ならざる仕事であつた。その結果種々奇妙な習慣が生ずるに至つた。先づ最初にエジプト人は、如何なる魂でも此の世に於ける其の住み家だつた所の肉體を持たないではオサイリスの國へ入ることは出來ない、と信するやうになつた。

何うしても肉體を死後に保存しなければならぬ。そして永久的な適當な家を死後の肉體に與へなければならぬと信じられた。そこで人が死ぬや否や、その死骸を木乃伊<sup>ミイラ</sup>にして保存することにした。

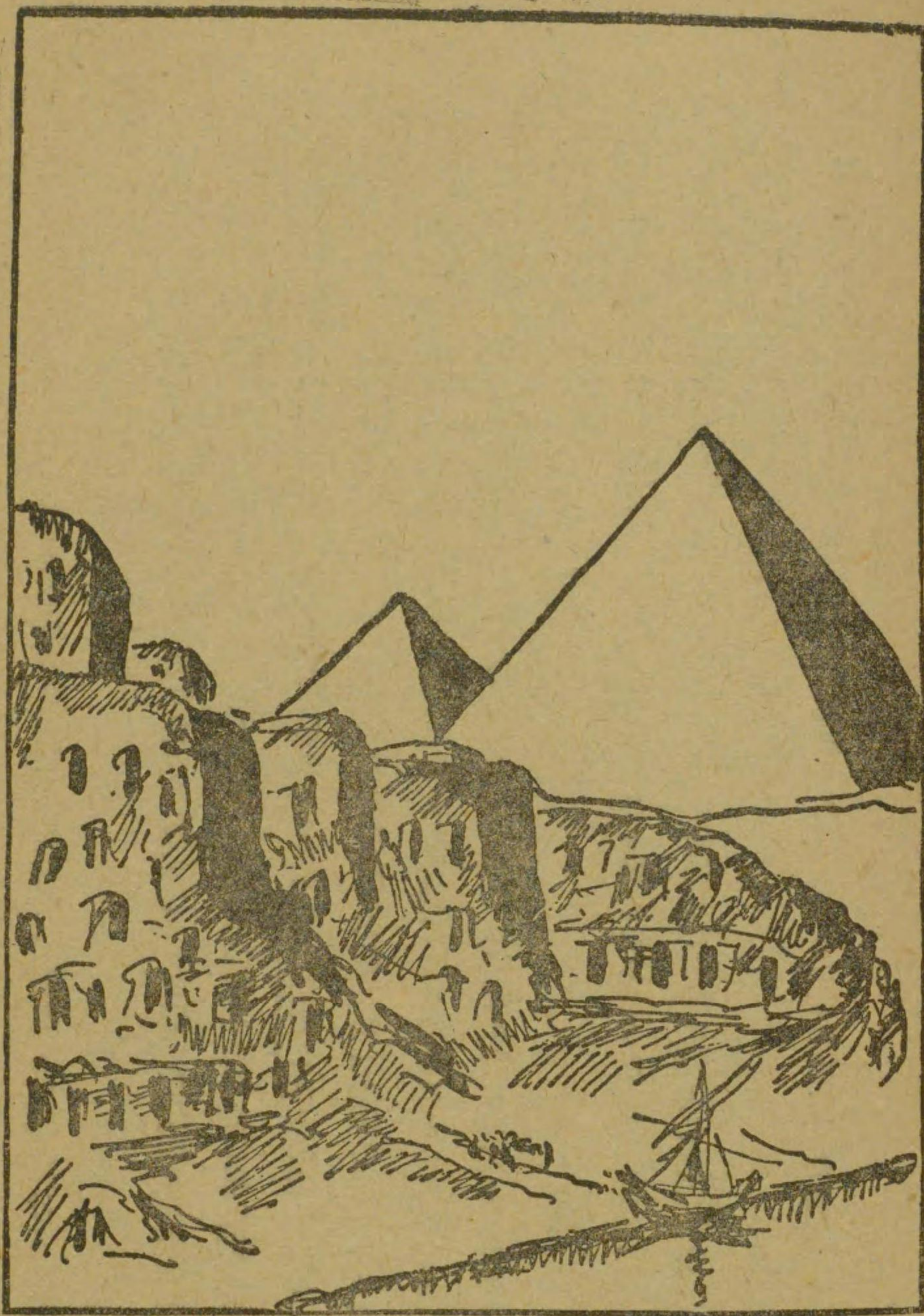
之には、むづかしい複雑な手術が必要だつた。半ば醫師、半ば僧侶といふ一種の役人があ

ナイル河の岸邊



つて此の役人が助手に手傳はせてやつたのである。此の助手の仕事は死人の胸から腹へかけて切開手術をやることであつた。其の裂け目から胸腔や腹腔内へ西洋杉の樹脂や没薬や旃那といふやうな物を詰め込んだ。此の助手は、最下級の卑しい特殊民の階級に屬する者に限られてゐた。といふのはエジプト人の考へでは、死んだものにせよ生きてゐる者にせよ人體といふ物に對して切開といふやうな慘酷な事をするのは實に怖いことで、従つて此の並ならぬ仕事をさせるために最下級の賤民を雇つたわけである。

此の手術が終へた後で、その死骸を天然曹達の溶液中へ十週間浸して置いた。このソーダは此の目的に用ふるために遠いリビヤの沙漠から採集して來たものであつた。十週間経つてソーダ水から引き上げると、それで木乃伊が出來上つたのである。木乃伊とは英語の「マンミー」であるが其の體内に「マミアイ」即ち樹脂が詰め込んである所から「マンミー」と呼ばれるやうになつたのである。さて此のマンミーに特別製のリンネルをぐる／＼と厚く捲き附ける。それから美しく裝飾した木造りの棺に之を納める。これで西の方の沙漠にある最後の家へ移すばかりに用意が出來上つたのである。



ナイル河の岸邊

死人の國  
絶壁に見える數々の岩窟は墓穴——死人安住の家としてエジプト人の造りしもの。彼方に聳ゆるは死せる王達の安住の宮殿ピラミッド。



墓所その物は沙漠の砂中に造られた小さな石室又は丘陵の横腹などに掘り開けられた岩室であつた。

その中央に棺を据ゑ附けると其の周りには色々の料理道具や武器や粘土製又は木製の人形などを澤山納めた。此の人形は、棺の中の死人の主人が何か御望みの時には早速御用を務められるやうにと言ふので、料理人や牛殺しといふやうな下僕を表はしたものであつた。笛とか胡弓とかいふ様な樂器類なども納められた。それは死人が彼れの「永遠の家」たる墓所の中で過ごさねばならぬ長い時間を楽しみにして過ごせるやうにといふのであつた。

それから石室の家根に砂を盛り上げて蔽ひかくす。斯くして死んだエジプト人は永遠の眠の安らかな休息の中に置かれたのである。

併し沙漠にはハイーナ（一種の野犬で鬣たてがみがある）や狼といふやうな野獸が澤山迷つてゐた。彼等は墓地の砂を掘り返し木造りの家根などを破壊して石室に侵入し墓の御主人の木乃伊を食べて了ふことが良くあつた。

これはエジプト人に取つては實に怖るべき事であつた。といふのは大切な肉體が斯様にし

て無くなれば住み家を失つた魂は家のない人間と同じ様に苦しみ永遠に迷つてゐなければならぬ運命となるからであつた。そこで今度は死骸を確實に安全にするために、墓の周りに低い煉瓦塀を造り、その内側の空間は全部砂や砂利で埋めて墓を蔽ひかくすやうにした。斯様にして造られた低い人造の丘のお蔭で野獸や盜賊のために墓所内を荒らされたり木乃伊を食はれたりする心配が無いやうになつた。

その内に或る時、自分の最愛の母親に死なれ其の死骸を葬つたばかりの或るエジプト人が母のために何か記念碑でも建立しようと思ひ附いた。それはナイル河の谷間に曾て建てられた何物よりも優れた物でなければならぬと彼は考へた。

早速手下の農奴連中を呼び集めて周圍數哩の遠方から見えるやうな人造の山を築かせた。その山の四面全部に煉瓦を疊んで砂が吹き飛ばされぬやうにした。

人々は此の嶄新奇抜な思ひ附きを喜んだ。やがて彼等は競争を始めた。その結果墓は地上から二十呎、三十呎、更に五十呎と段々高くなつて行つた。



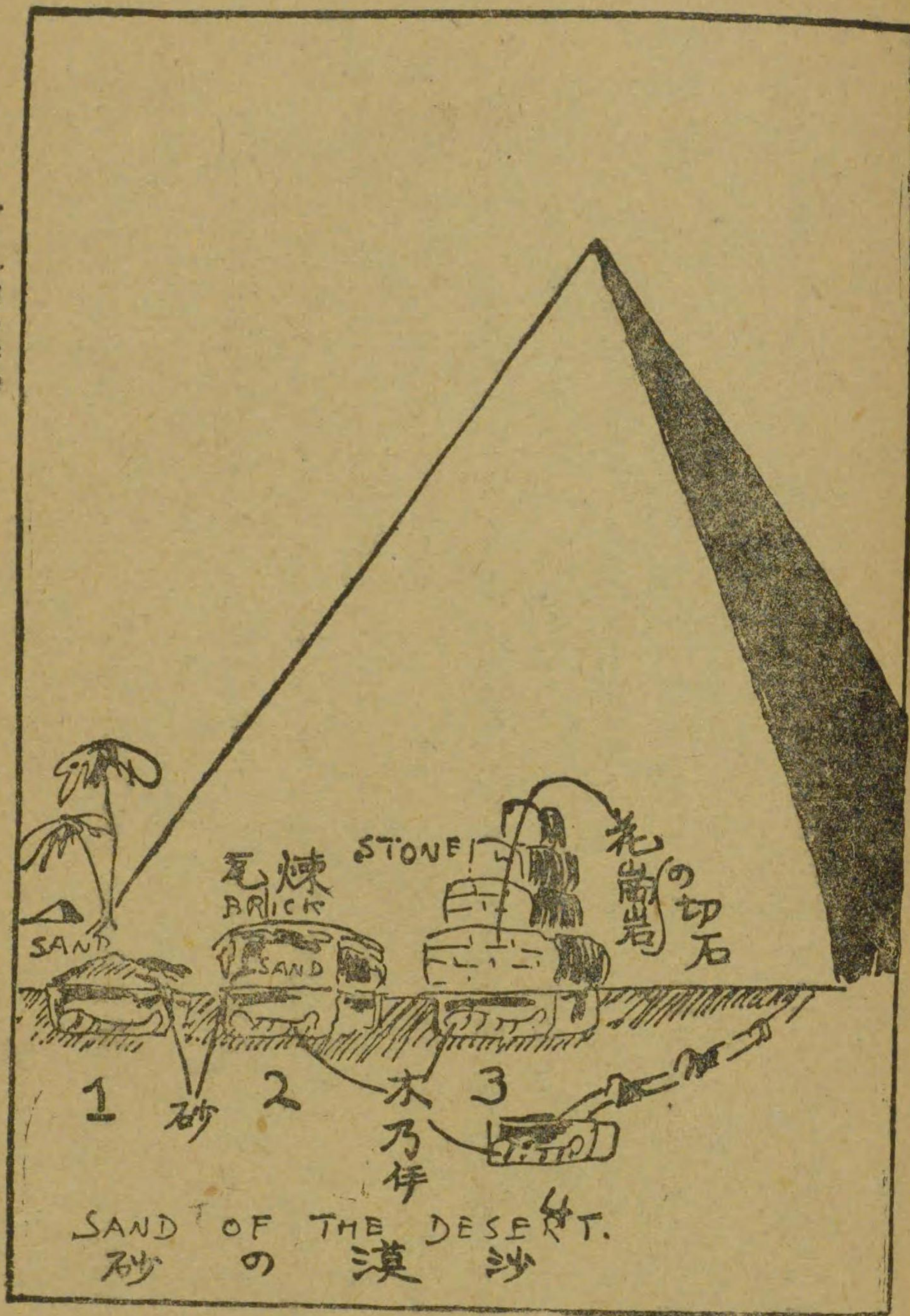
人類の足蹟

終に或る富裕な貴族が下臣に命じて墓室を堅固な石で造らせるに至つた。木乃伊の安置してある墓室の頂上に、彼れは煉瓦を高く積み上げた。空中へ數百呎も高く聳え立つた。その人口は細長いトンネルになつてゐて墓室へ這入れたが平生は侵入を許さぬ様に入口は大きな花崗岩の扁板<sup>ピライタ</sup>で塞いで在つた。

かういふ施設に就いて臣下は無論國王を凌ぐことは許されなかつた。エジプト王は國中でも最も廣大な宮殿に住み國中でも最も勢力があつたのだから其の墓も亦國內第一のものであつた。(七三頁は墓穴施設の發達順序を示す。)

王は臣下の貴族達が煉瓦で築いた所を更に費用のかゝる立派な材料を用ひて築造させた。先づ王は役人を遠く四方に派して労働者を狩り集めた。また道路も敷設させた。幾棟もバラックを建てさせ其處に全國から集めた労働者達を起臥させた。是等のバラックは今でも見ることが出来る。さて其れから愈々事業を始めて永遠に堪へ得べき墓所を築造したのである。

斯うして出來上つたのは偉大な石造物であつた。吾々が「ピラミッド」と呼んでゐるのが即



ピラミッド發達の順序

ナイル河の岸邊



人類の足蹟

ちそれである。此の語は面白い語源を持つてゐる。

ギリシヤ人が後になつてエジプトを訪れた時數々のピラミッドは既に數千年の齡を重ねてゐた。

恰度ロンドン人が外國人をウエスミンスター寺院やロンドン塔などへ案内して見せたがるやうに、エジプト人は訪ねて來たギリシヤ人達を沙漠へ連れて行つて大小數々のピラミッドが天地を壓して立つてゐる驚くべき光景を見せたことは言ふ迄もない。

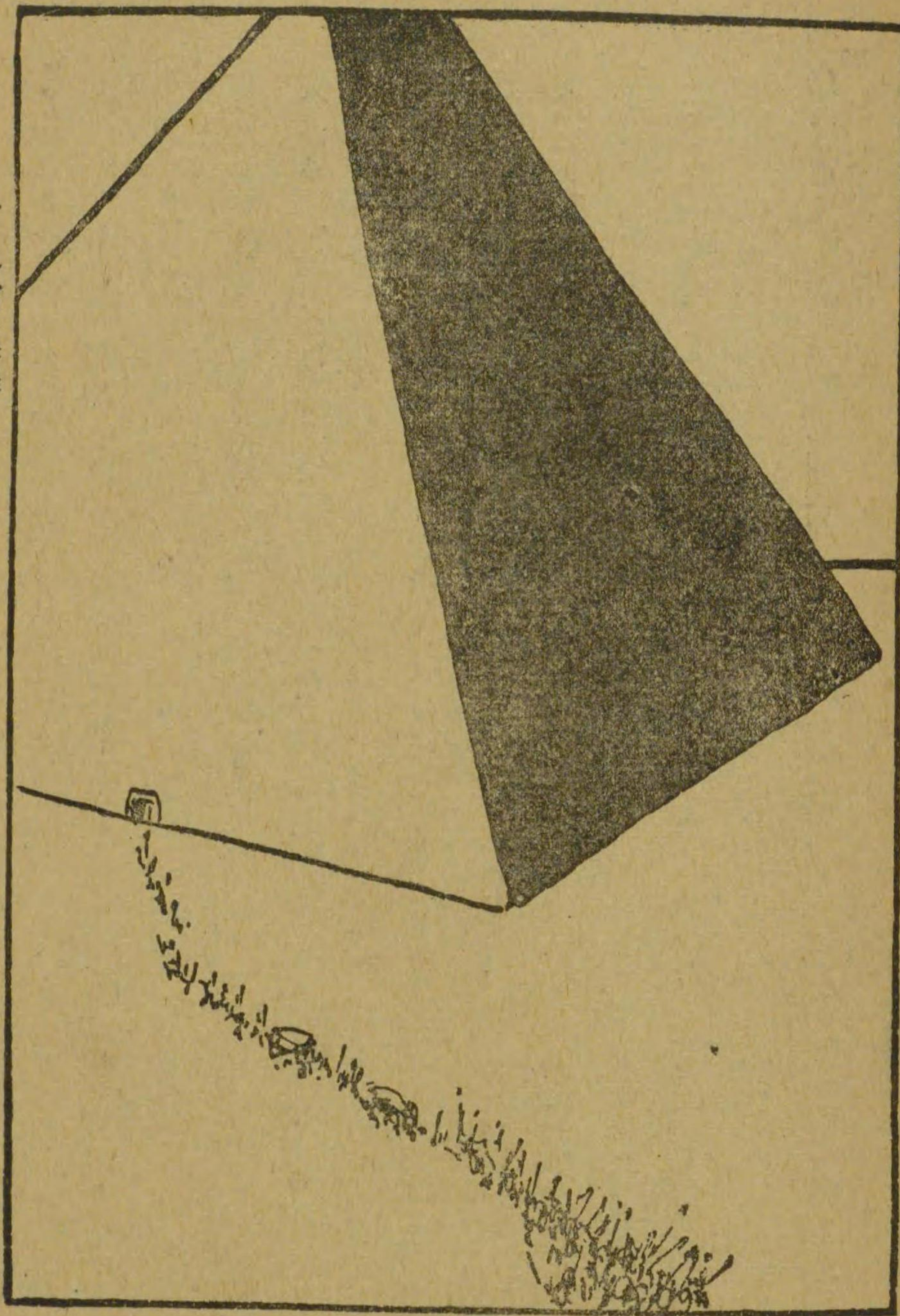
氣を失ふほど驚いたギリシヤ人は手眞似をしながら是等の奇妙な山は一體何だと尋ねた。

案内をして來たエジプト人には客の言葉は無論解らなかつたが客が手を振り上げたりする様子を見て「大變高いものだ、と言つて驚いてゐるのだわい。」と思つたので、

「左様、非常に高いです。」とエジプト語で答へた。

「ピレームスだつて！ ふむさうか、ピレームスつて言ふ名前なんだな此の珍妙な石造物は。」

それから「ピレームス」の語尾にギリシヤ語流の變化を與へて「ピレームス」として了つ



ナイル河の岸邊

ピラミッド  
エジプト王の葬列





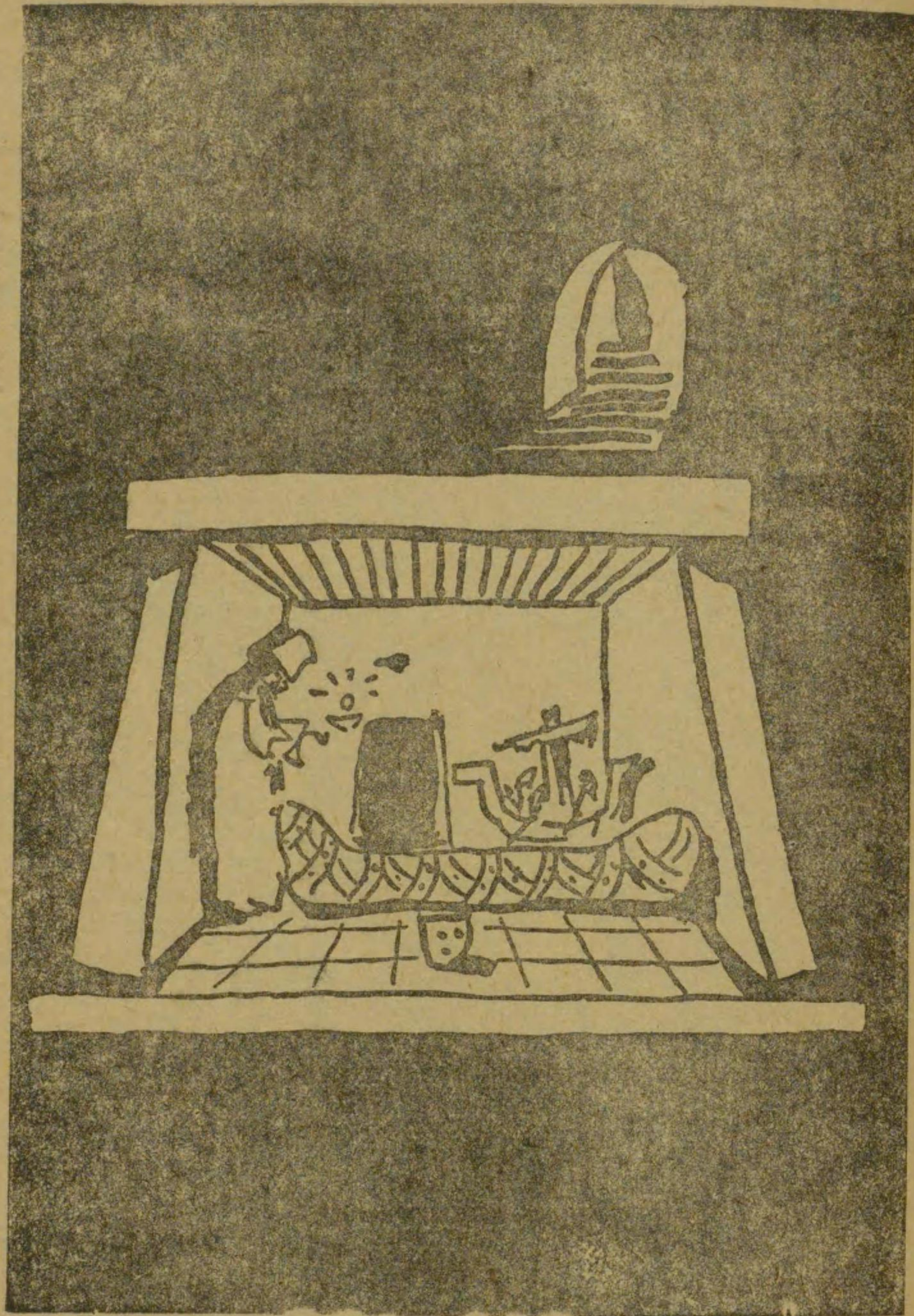
た。

今日吾々は「ピレミス」の語尾の「ス」を「ド」に變へて「ピラミッド」と呼んでゐるが要するに語根はエジプト語であるから、今でも吾々はナイル河畔の石造りの墓のことを話す場合には此のエジプト語を用ひてゐるわけである。

今から五十世紀前に造られた是等の多くのピラミッドの中で最も大なるものは高さ殆ど五百呎に及んでゐる。

その基底の幅は七百五十七呎もある。その占めてゐる面積は約十三エーカー即ち五町二反十畝餘に當つてゐる。一箇の建物でこんなに大きいのは一寸例があるまい。

之を建てる時には五萬餘の人間が二十年間も働き続けたのである。皆大きな四角な岩石を方錐形に積み重ねたのであるが、是等の岩石は遠いシナイ半島から運んで來た。茲まで運ぶ間には廣い沙漠があるしナイル河をも渡さなければならなかつた。此の大きな無數の岩石をナイル河を渡す時には何んな手段を工夫してやつたものか吾々には想像がつかない。彼等は無論その運搬法の原理として挺の理を應用してゐたらうと思はれるが、果して如何に應用し



墓穴内の木乃伊



たか不明である。

此のピラミッドの中心に王の墓所があつて外から細長いトンネルの様な道が通じてゐる。此の道は周り中に押しつけてゐる幾千萬トンといふ非常な重量があるに拘はらず少しも形が歪んだり横腹がつぶれ込んだりしてゐないが、こゝらを見ると王のために働いた設計者や建築技師の連中が如何に明敏な如何に用意周到な人達だつたかと察せられる。實に驚くべく立派に築造されたものである。(第九章の初め参照)

## 七、國家の起源

吾々と國家……原始人と國家……國家形成までの經路……村の長老……王の選舉……  
…農民……王の事業……税金……貴族階級の出現……百姓の魚どんが貴族になる迄の  
物語……「大きな家の持主」フェーロー即ち王……王と貴族と民衆

吾々は皆或る國家の一員である。フランス人にしろ日本人にしろロシア人にしろ、支那人にしろ、また東印度諸島の涯に住んでゐようと必ず吾々は、國家といふ人民の結合團體に屬してゐるのである。

吾々が自分等の統治者として王又は皇帝或ひは大統領の何れを認めるにせよ此の點に變りはない。即ち吾々の統治者が王であつても皇帝であつても或ひは大統領であつても兎に角吾々は或る國家の一員である。その國家の一員として吾々は生れ吾々は死ぬのであつて如何なる人も此の運命を免れることは出来ない。



然らば斯うした國家といふものは何時頃から出來たものか。といふと是れは人類最初からの歴史から言へば極く新しい近頃の發明である。

世界最初の原始人類は國家などといふものは知らなかつた。

數人の家族から成り立つ各家庭は自分だけの爲めに生活し狩獵し働き、そして其のまゝ死に失せて行く——これが彼等原始人類の凡てであつた。時としては、猛獸や他の野人の群などの危害をより良く防ぐために少數の家庭が寄り合つて、部落とか更に大きくなれば種族とかいふやうな緩い團結を作つたこともある。併し危険が去つて了ふと直ぐにまた勝手氣儘に行動し散り／＼になつた。若し弱い者が自分等だけの洞窟を防ぐことが出來ない場合にはハイナや虎などに蹂躪されるまゝとなり、猛獸の餌食と化しても別段哀れと思ふ者もないといふ有様であつた。

詰り各人は言はゞ彼自身で一つの小國家を造つてゐたやうなもので、彼れは隣人の安寧幸福に對しては全然無責任だつたのである。かういふ状態だつたのが極めて長い歲月の間に徐々に變化して來た。斯様にして數家合同して部族をなし氏族をなしやがて一種族の團結とな

り組織が堅固に整つて終に國家をなすやうになつたのである。さて其の住民が有機的に統合されて一つの充分に機制の整つた國家をなすに至つた世界最初の國は何處だつたかといふとエジプトであつた。

ナイル河は、斯ういふ國家を造るやうに住民の關係を發達させる上に直接の影響を持つてゐた。ナイル河は夏季になると毎年氾濫して、ナイル河を挟む谷間の大部分と下流の三角洲とは一大内海に變じた。この大洪水から生き逃れ而も之を最も良く利用するためには所に依つては何うしても堤防や島々を造らなければならなかつた。此の島々といふのは無論小さなものであるが人力で造り上げるのだから中々大變なことだつた。斯様にして造られた島々や堤防は八月九月の洪水期間人畜のために非常に役に立つた。

かういふ島々や堤防を築くことは一人や一家族の力では無論出來ない。小さな部落の連中が皆集つてさへ他の部落民の協力がなくては到底出來ないことだつた。

農夫は如何に近隣の農夫連中を好かなかつたにせよ洪水のために溺れ死ぬのは尙ほのこと厭やだつた。従つて彼れは、河水が増え始まつて自分の妻子や家畜などが破滅の危険に脅





ナイル河の上流

かされるとなれば、何うしても附近一帯の人々に頼み込んで手を借りなければならなかつた。

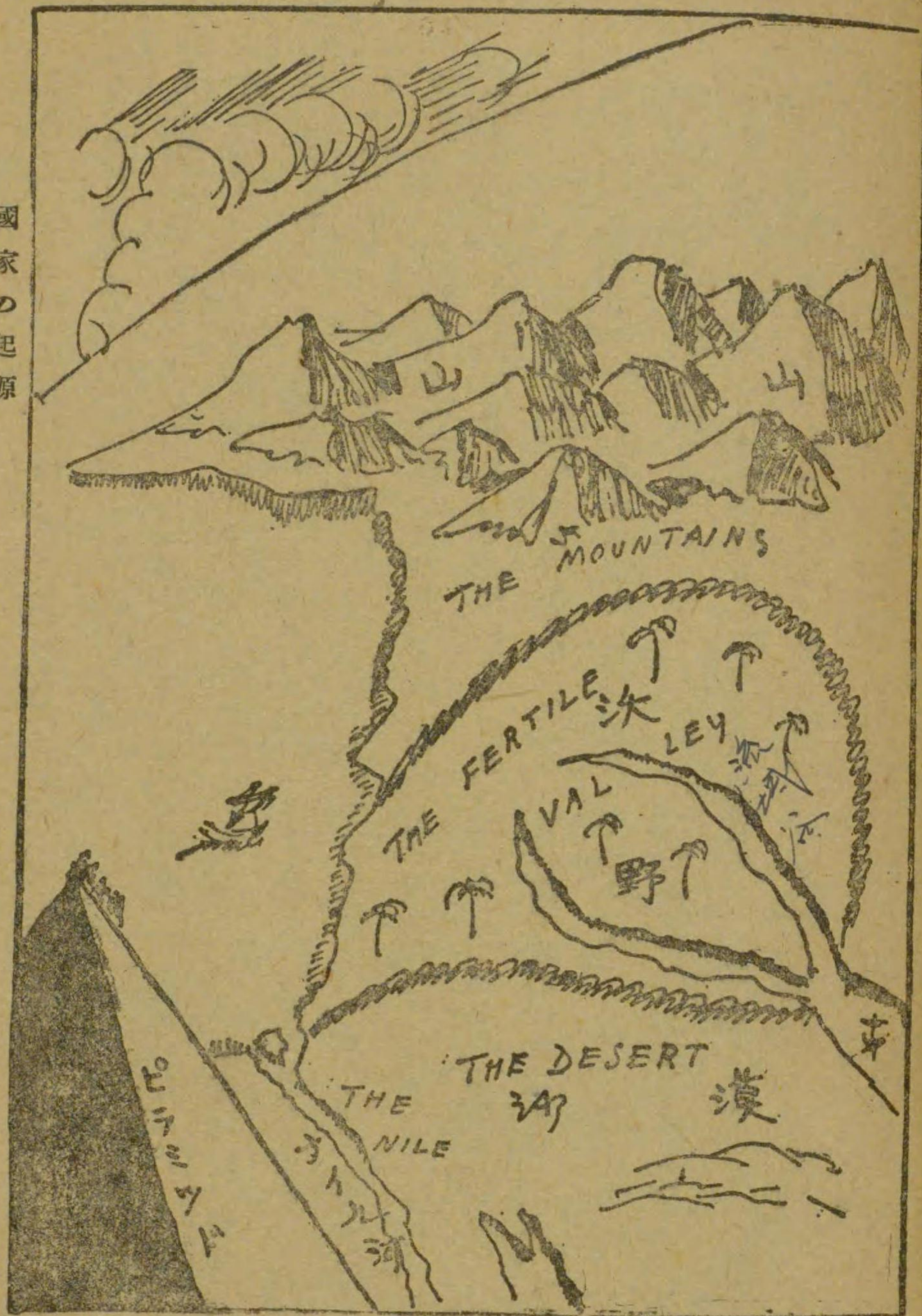
必要は人々をして止むなく彼等の小さな差別などは忘れさせた。その結果、一つの共通の目的のために常に協力して働き互に相寄り相助けて生活と繁榮とを計らうとする人々の小團體が澤山現れて来て、間もなくナイル河の谷間全體に行き亘つた。

かうした小さな團體から始まつてあの最初の強力な國家が生じたのである。

其はエジプトの地を眞に住み良き場所となし、無法なる殺人行爲の終熄を意味した。其はまた、人類のために會てなき大なる安寧を確保し、一族中の弱き者にも生き抜ける機会を供した。絶對的無秩序の状態はアフリカの叢林中にしか存しない今日に於ては、法律、警官、裁判官、保健官、病院、學校といふやうなもの、無い世界を想像することは困難である。

併し五千年前の世界に於ては、秩序ある國家としては只一つエジプトがあつたのみで従つ





ナイル河畔の沃野

て近隣の地方に住んでゐた他の民族から非常に羨ましく思はれた。彼等は未だ依然として多くの困難に單獨で打ち向はなければならぬ状態に在つたのである。

國家は人民の團結——組織あり統制ある強固なる團結であるが、併し國家は人民から組み立てられてゐるだけのものではない。

其處には法律を司り國務を執行すべき人々や、危険な秋に當つては全國民を統帥すべき人々が無ければならない。即ち如何なる國民でも、王(キング)又は皇帝(エムペラー)或ひはベルシヤに於けるが如きシャー又は共和國に於けるが如き大頭領(プレジデント)といふ様な上御一人を頂かすして存続し得たものは曾てないのである。

古代エジプトでは、各部落は、老年の人々であつて若い者より經驗の深いところの「村の長老」達の權威を認めてゐた。是等の長老は、彼等の軍隊を戦争の際に指揮したり洪水の時爲すべき事を軍隊に命令したりする所の一人の強力な男を選出した。長老達は此の男に、彼れを他の者と區別すべき或る資格を與へた。彼等は彼れを王(キング)又は主君(プリンス)と呼び、彼等自身の共通の利益の爲めに下す彼れの命令に服従した。

*Single Head*



其れ故エジプトの歴史の最古の時代には、人民の間に次ぎのやうな區別の在つたことを吾々は見出すのである。

大多數は農民であつた。

彼等は皆貧富の度が平等であつた。各人が平等に富んでをり平等に貧乏だつたのである。

彼等は強力な一人に支配されてゐた。此の男は彼等の軍隊の總司令官でもあり、彼等の裁判官達を任命したり共通の利益や安樂のために敷設せらるべき道路を決定したりした。

彼れはまた警察長官でもあつた。で盜賊その他の罪人を捕へた。

是等の價值ある勤勞の代償として彼れは各人の所有金中から或る金額を受け取つた。之を税金と稱した。併し是等の税金の大部分はこの王の私有に歸するのではない。税金は、共通の利益のために消費して貰うために王に委托された金である。

併し暫く経つてから農民でもなく王でもない新しい一階級が擡頭し始めた。此の新階級は通常貴族と稱されるもので、統治者たる王と王の臣民との中間に立つてゐた。

此の古い時代以來此の貴族階級なるものは各國の歴史の内に出現し、各國の發展の上に大

なる役割を演じ來つたのである。

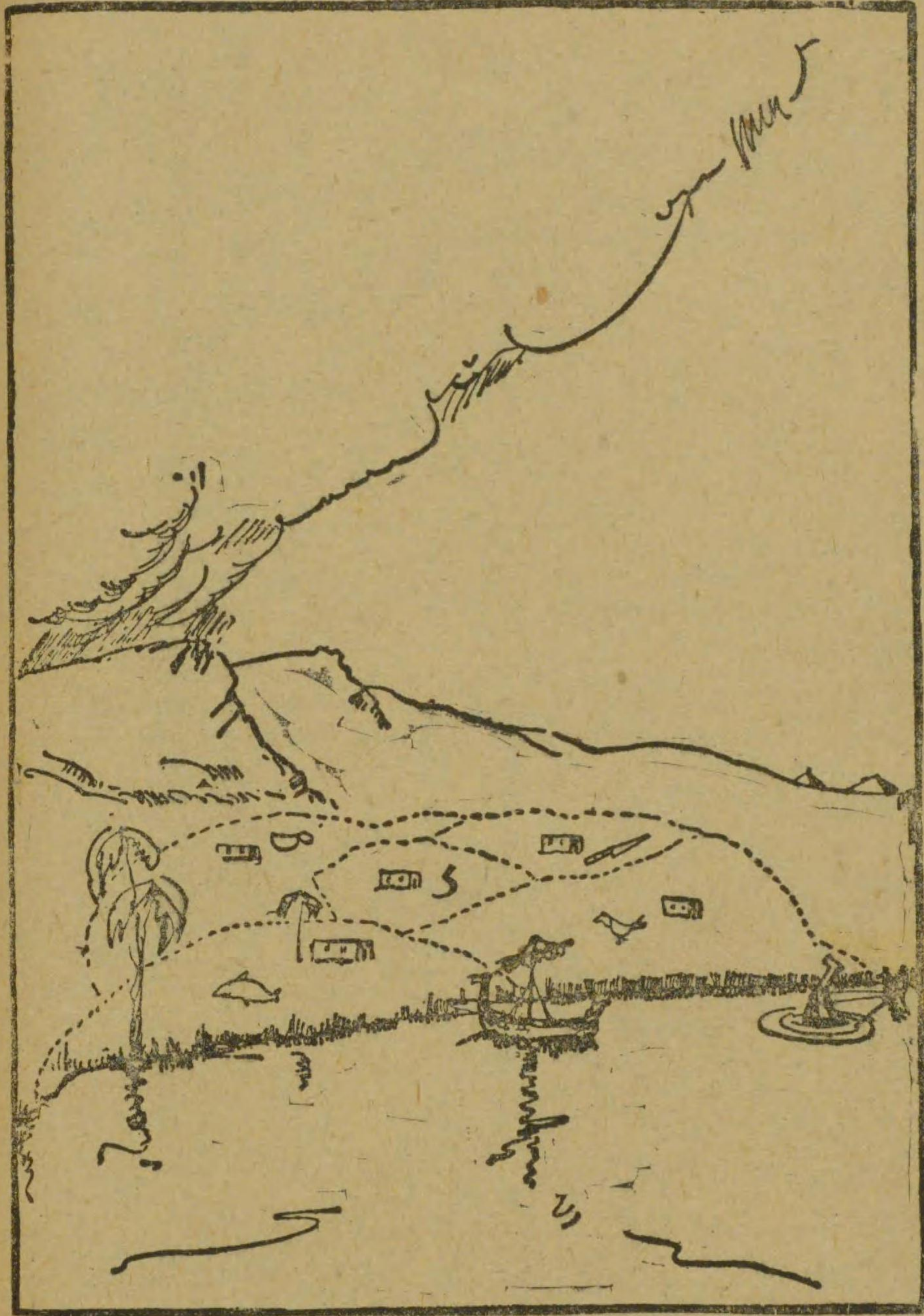
此の貴族階級なるものが日常生活の最も平凡な事情から如何にして發生し來つたか、また種々の形式の反抗に對抗して今日まで貴族階級が其れ自身を維持し來つたのは何故か。是等の問題に就いて説明しなければならぬ。

此の話を明快にするために私は一つの繪を描いて置いた。(八八頁参照)

その繪を見るとエジプトの農園が五つある。是等の農園の最初の所有者達はづつと大昔にエジプトへ入つて來たもので、當時是等の土地は所有者が無かつた。で各人、所有者のない土地の一部を占め其處に居を定めて、穀物を作つたり牛や豚を飼育したり、その他自分や自分の妻子の活計を立てる上に必要な仕事をした。斯様にして各自幾分かづつの田地を所有して暮らしてゐたのであるから彼等は明らかに生活上機會均等だつたのである。

然るに其後誰か其の隣人等の支配者となり、唯一つの法も犯すことなく彼等の田地や納屋まで悉く自分の所有に歸せしめるやうになつたが、それは如何にして起つたのであらうか？





封建制度の起源  
貴族階級出現の経路(前頁参照)

收穫後の或る日、魚殿さかなだん(挿畫を見ると象形文字で彼れの名が書いてある。)は自分の舟に穀類を積み込ませメムフィスの町へ送り出させた。彼れは積荷を中部エジプトの住民等に賣らうと思つたのである。此の年は會々百姓にはほく／＼の豊年だつたので魚どんも自分の小麥を賣つてしこたま金を取り込んだ。十日ばかり後に彼れの舟は歸つて來た。船頭は受け取つて來た金を自分の主人に渡した。

その後二三週間経つて、魚どんの畑の隣りに畑を持つてゐる雀どんは自分の小麥を最寄りの市場へ送り出した。可哀さうに此の雀といふ男は此の二三年といふもの餘り運が良くなかつたので大分損をしてゐた。で此の小麥を値段良く賣り當て、最近の損害を償ひ度いものだと思つてゐた。それで實はメンフィスの町の小麥相場が幾分か騰るまで待つてゐたのであつた。

ところが其の朝になつて、クリート島に饑饉が起つたといふ噂が村へ傳はつて來た。その結果エジプトの諸所の市場では穀類の相場が非常に奔騰した。



待つてゐた雀どんは此の意外の相場狂ひを利用してやらうと思つて早速自分の船頭に命じて船を急いで出させたのであつた。「良いか、急いでやつて呉れよ！」

さう言つて送り出されたので彼れの船頭は舟を急がせた。ところが餘り舵の取り様が亂暴だつたのでとうとう舟が岩に衝突して沈んで了つた。そして帆の下へ巻き込まれた相手の運轉士の男は溺死を遂げた。

運の悪い雀どんは自分の穀類と船とを全部なくして了つた上に、溺死した運轉士の細君へその夫を失つた賠償のために幾分か金を拂はなければならなかつた。

彼れは最早少しの損にも堪へ切れないといふせつば詰つた時に運悪くも斯うした出來事に遭遇したのだつた。

冬は近づいた。けれども子供達に着物を買つてやる金も無くなつてゐた。彼れの草削りや鋤などは全く使ひへらされてゐた。今までも新しいのを買はう／＼と思ひながら手許が苦しいものだから買ひ代へることも出來ずにゐたからだつた。彼れはまた自分の畑に播く種子さへ持つてゐなかつた。もう彼れの立場は絶望的な羽目になつて來た。

彼れはお隣りの魚どんを元來餘り虫が好かなかつた。だが背に腹は變へられなかつた。

彼れは魚どんの小屋へ訪ねて行つた。そして平身低頭して頼んだ。

「何うでせうか、ほんの少しで宜しいのですが……」

「金ですか。宜うがすとも、幾らなりと御望みだけ喜んで御融通申しやせう。だがね雀どん何か、その、擔保と言つてもなんだが其の邊の所は何か出來ようかね？」

「へい、承知致しました。」彼れは擔保として自分の畑を提供する決心だつた。

不幸にも魚どんは其の畑のことを萬事承知してゐた。それは何代も前から雀どんの家に傳はつて來たものだつた。雀どんの父はフェエニキア人の貿易商から手ひどく欺かれて大變な損をしたことがあつた。その商人といふのは彼れに「フィリジヤ牛」(この名前は今日誰にも分らない)を一番買はせたのだつた。非常に育ちの良い牛で而も飼ひ草などは殆どやらなくて良いといふ話だつた。それでゐて普通のエジプト牛の二倍も働くのだからこんな良い牛は無い、などと商人は褒めちぎつてゐた。雀の父は商人の言葉を眞に受けて買ひ込んだ。近所の村人は皆羨ましがつた。



ところが此の牛は非常に遅鈍で極端な怠け者<sup>なま</sup>だつた。三週間も経たぬ間に譯の分らぬ病氣に罹つて死んで了つた。

この年寄りの百姓は大變怒つて卒中を起して苦しみ死に死んで了つた。息子の雀はそれ以來父の田地の世話を引き受けて骨惜しみなく働いて來た。が何うも良い結果も見えなかつた。ところへ今度の災難である。沈めて了つた穀類や舟は彼れの最後の財産だつた。

若い雀は餓死するか、それとも隣りの魚に金の無心を頼むか何方かに決めなければならなかつたわけである。

魚どんは近所の百姓達の生活に就いて細かなこと迄呑み込んでゐた。無論雀の家の財政状態に就いても詳しいことを知つてゐた。で彼れは或る條件を言ひ張つた。雀は次ぎの様な條件に従へば欲しいだけの金を借りることが出來た。彼れは魚のために毎年六週間づゝ勞役しなければならぬ。且つ自分の地面へ魚が自由に出入することを常に許さなければならぬ。

雀も斯ういふ條件は厭やだつたが、もう日中はだんく短くなり始めてゐたし冬は目前に

迫つて來るのに家族の者は食物さへ無かつた。

止むなく彼れは其の條件を承諾した。此の時から彼れの息子達も娘達も最前のやうに自由ではなくなつた。彼れは必ずしも魚の下僕下婢になつたわけではない。無論奴隸になつたわけでもないが彼等の活計を保つ上には魚の親切を頼らなければならなかつたからである。彼等は道で魚に出會すと傍へよけて「お早う御座います、旦那様」と挨拶した。魚は會釋を返したり返さなかつたりした。

今や彼れの水際に面した地所は前の二倍にもなつた。彼れの田地は益々殖え雇人達も益々多くなつて來た。従つて收穫する穀類も益々増加するばかりだつた。近傍の村人達は、魚が今度建て始めた新しい邸のことを話し合つた。彼れは富裕になり勢力家になりつゝある羽振りの良い人として皆から眺められた。

すると其の夏もづつと遅くなつてから、曾て開いたこともない事件が起つた。

雨が降つたのである。最も年嵩の老人達もこんな事が前にあつたか何うか憶えてゐなかつた。こんな遅い季節に雨が降るなどとは聞いたこともなかつた。而もそれが豪雨で二日間も



降り續いた。誰も彼れも忘れ果て、ゐた小川が遽かに猛烈な激流に變じて流れ出した。眞夜中にそれが山から瀧の様に流れ落ちて来て丘の麓に岩石の多い地面を持つてゐた或る百姓の作物を悉く押し流して了つた。此の百姓の名は水呑どんといふのだつた。彼れも此の田地を百代も前から傳へられたのである。此の損害は殆ど償ふことは出来なかつた。水呑どんは作物の種子が必要だつた。而も今急に必要だつた。彼れは雀どんのことも話に聞いてゐた。ずるい遣り手といふ名で界限に廣く知れ渡つてゐたあの魚の奴に合力を頼むのは彼れも厭やだつた。だが何うし様も無かつた水呑はとうとう魚の家へ行つて、へり下つた態度で小麥を少し借り度いと言つて頼んだ。魚は早速貸してくれた。併しお蔭で水呑は魚の畑で毎年二ヶ月づつ働かなければならぬことになつた。

魚は羽振りが良かつた。彼れの新築した邸は萬端出来上つた。いよいよ俺も大家さんになる時が来たんだな、と彼れは思つた。

畑一枚向ふに可愛い一人娘を持つた百姓が住んでゐた、その名は小刀どんと言つた。彼れは暢氣な男だつたので娘の嫁入り仕度もしてやれなかつた。

或る日魚が小刀の家へ訪ねて来た。魚は獨り者だつた。

「小刀どん、わしは金なんか何うでも良うがす。……」

「何の事だい？ 溜り過ぎたから分けてやらうとでも言ふのかな？ お前さんのこつた。まさかさうでも無いだらうがね。」

「實は何さ、貰ひ度いんだが何うだらうね、仕度なんぞは係はないから。」

「何だか、さつぱり明瞭しないな！ 金のことなら自家には無いのは分つてるだらう。」

「いや、お前の娘さんの話さアね。」

「わしのところの娘が嫁に欲しいとでも言ふのかい！」

「是非御貰ひ申し度いんで。仕度なんぞは鏝一文だつてして頂かなくて結構ですから。」

「よし、合點だ。娘も幸だ。宜しく頼む。」

「だが一つ約束を願ひ度いことがあるので……」

魚は、娘の仕度はしてくれなくとも良いが其の代りに、小刀が死んだ曉にはその田地を女婿の自分に渡すことにして呉れと言つた。小刀も承知した。



契約は公證人の面前で正式に済まされ、間もなく結婚式も行はれた。魚は今では四つの田地の大部分を所有せんとばかりになつて來た。

是等の田地に挟まれて第五の田地があつた。併し鎌どんといふ其の持主は、魚が勢を振つてゐる地所を通らなければ自分の小麥を市場へ運び出すことが出来なかつた。その上この鎌どんは餘り根氣強くなかつたので、喜んで魚の家に、はれて働くことにしてゐた。彼れは年寄つた細君と一緒に、晩年は、一つの室と食事や衣類を當てがつて貰つて安樂に過でせるといふ約束を魚からして貰つた。子供も無かつたから斯ういふ事に決まつたのは此の天婦に取つては好都合だつた。

鎌どんが其の内に死んだ。すると彼れの遠い従弟だといふ男が出て來て、叔父の畑を相続する権利があると魚に要求した。魚は繫いであつた幾匹もの犬を放して其の男にけしかけた。彼れは再び姿を見せなかつた。

斯うした處分は約二十年間の内に行はれたのであつた。

水呑や鎌や雀などの家の次代の者共は自分等の世間に於ける立場を少しも疑ひもせず承服

してゐた。もう其の頃の魚は大地主になり済ましてゐた。彼等が生活を全うしやうと思へば何うしても魚の好意を頼みとしなければならぬやうになつてゐた。

年寄つた魚が死んだ時、彼れの廣大な田地田畑と、近隣の村人達の間には非常に有勢な地位とが其のまゝ息子の手で遺された。

息子の魚は父にそつくりだつた。非常な腕利きで大變な野心を懷いてゐた。上部エジプトの王がバーベル族の野人國を征伐に行つた時彼れは自ら進んで從軍した。

彼は勇敢に戦つたので王は彼れを收税官に任じ三百の部落から王に奉る税金を司らせた。その部落民の内には税金を拂ふことの出来ないものが時々あつた。さういふ時に若い魚は自分の懐から出して貸し附けた。

借りた連中は元利金辨済のために此の收税吏の田地で働かなければならなかつた。

さうしてゐる内に幾年か過ぎた。魚の家族はその界限一帯で最高の權勢を振つてゐた。彼等の古い家は斯うした豪勢な人達の住むには最早適しなくなつた。

そこでテーベの王宮の饗宴場に模した壯麗な建物が魚の地所に新築された。周りには高い



塀が立てられて群衆は近寄ることが出来なかつた。魚が外出する時は、武装した一隊の護衛兵が何時も御伴をしてゐた。

彼等は毎年二回づゝテーベへ行つて王に謁見した。王はエジプト中で最も廣大な建物を宮殿として住んでゐたので、「大きな家」の持主といふ意味で「フエイロー」と呼ばれてゐた。

或る時、魚は王を訪ねる時息子を連れて行つた。これは詰り彼れの家を興した初代の魚どんの孫に當るわけである。三代目の魚は男振りの良い若者だつた。

するとフエイローの娘が此の若者を見初めて婿様に欲しいといふ事になつた。此の結婚のため二代目の魚は財産を大部分費した。併し依然として王の收税吏だつた彼れは人民から容赦なく取り立て、三年も経たぬ内に慾深な財布を元通り一杯にして了つた。

とうとう、彼れは死んだ。その時彼れの死骸は小さなピラミッドに葬られた。彼れは恰も王家の一人であつたかの様に鄭重に葬られたのであつた。フエイローの娘は夫の父親の墓に詣で、熱い涙を流した。

下賤な百姓を先祖に持つた男が斯様にして低い階級から段々と經昇つて三代後にはエジプト王宮内の玉座近くに侍立するやうな身分になつた。これはナイル河畔の或る地方に起つた話である。

魚どんの身の上で起つたと同じ事が、同じ様に根氣も強く資力もあつた多くの人達の上で起つたのである。そして彼等は別に一階級を形造るに至つた。

彼等は互に娘を娶り合つた。彼等は此の婚姻關係に依つて小數者の手にその家運を維持したのである。

彼等は王に對しては、王の軍隊中の上官として或ひは王の收税吏として忠實に奉仕した。彼等はまた道路や水路の安全に就いて注意した。彼等は多くの有益な事業を遂行し、お互同志の間では名譽體面に關する極めて嚴格な慣例を守り合つた。

併し王が悪い時には貴族等も亦悪くなり勝ちだつた。王の勢力が弱い時には貴族等は國家を我が物にしようと工夫を凝らすことが屢々あつた。

そこで人民は忿然として立ち上り彼等を壓制した貴族達を勦滅するといふ様な事が屢々あ



つた。

古い貴族中の多くの者が殺され、土地には新しい分割が行はれた。それは各人に平等の機会を與へた。

併し暫く経つてからは前に話した様な關係が再び繰り返された。貧窮に落ちた雀の家の子孫達は利口に立ち廻つて勤勉に働いた揚げ句一地方の大地主となり上り、光榮ある歴史に飾られた魚の子孫が反對に昔の哀れな農民になり下るといふ様な變轉が起つたのもさうした間のことだつた。

その他の點では變化は殆ど無かつた。

忠實な農民等は依然舊の如く働き、税金を納めるために骨を折つた。何れ劣らぬ忠實振りを發揮してゐた收稅吏の連中も元のやうに財産を殖やすことに抜け目が無かつた。

さうした間に、人間共の野心や争鬭に無關心なナイルの流れは、幾歲月を經過した兩岸の間を昔の姿そのままに靜かに緩やかに流れ、自然力の内にもみ見出される偏頗無き公平を以て、其の裕かな恵みを富める者にも貧しき者にも一様に與へてゐた。

## 八、エジプトの興亡

文明の移動……エジプトの文明……メンフィスとテーベ……曆の始り……榮枯盛衰の理……ヒクソス……エジプト新帝國……武斷的國家の短命……トレミイ王朝……女王クレオパトラの自殺……エジプトの滅亡。

「文明は西方へ移動する。」吾々はさういふ事が言はれるのを屢々耳にする。

困難を物ともせぬ開拓者の連中は大西洋の怒濤を押し渡つて新大陸に上陸しニューイングランドやニューネザラランド等の海岸地方に落ち着いた。彼等の子供達は更に新大陸の廣漠たる大草原を通過した。更に彼等の孫達は米大陸の西端カリフォルニアの地方へ移動した。而して現代は渺茫たる太平洋を有史以來最も重要な海に變じようと望んでゐる。——斯く觀じ來れば「文明は西方へ移動す。」といふも蓋し至當の言と評さねばなるまい。

「文明」が同一の場所に長く留まらぬことは確かに事實である。それは常に何處かへ向つて

エジプトの興亡



移動しつゝある。併し乍ら常に西方へ移動してゐるとは限らないのである。時として其の進路は東を指すこともあり南に向ふこともある。屢々それは曲りくねつて進んで行く。が常に移動して止まることはない。二百年か三百年かの後に、文明は口を開いて――

「さア、私は是等の人民ともう充分長く道伴れになつて來た。さて何處かへ出かけて見ることにしやう。」

と言ふやうに見える。そして其の多くの書物やその科學やその藝術やその音樂やを荷造りして、新しい領土を探しに出かけて行くかのやうに思はれる。併し文明が何方へ行かうとしてゐるのか誰にも分らない。それが又、人生といふものを極めて興味深くしてゐるのである。

（エジプトの場合で言へば、文明の中心はナイル河の兩岸に沿うて北方へも南方へも移動した。前にお話した通り、先づ第一に、人々はアフリカの諸所や西部アジアの地方から此の谷間へ移つて來て落ち着いた。そこで彼等は諸所に小部落や小都會を形造り、フェイローと呼ばれてエジプト北部のメンフィスに其の首都を持つてゐた所の言はゞ總司令官ともいふべき

一人の統治に服してゐたのである。

それから約二千年後に、此の古い王家の統治者達は彼等の立場を維持することが出來ない程に衰へて來た。で其處から南方へ三百五十哩も離れた上部（南部）エジプトのテーベといふ町から起つた或る新しい一家がエジプト全國の主權を掌握しやうとした。紀元前二千四百年に此の運動は成就した。此の新王朝の代々の王は南北兩エジプトの支配者として更に軍を起し、世界の爾餘の地方をも征服しやうとした。彼等は遠く南方のナイル河水源地向つて進軍した。水源地の方までは到達しなかつたが彼等は終に此の未開暗黒なエシオピア地方を征服した。次ぎに彼等は軍を東北に轉じシナイ半島の沙漠を越えてシリアに侵入した。其處では彼等の名前がバビロニア人やアッシリア人などから非常に怖がられた。是等の在外の地方を征服したのでエジプト本國の安全は確保されたのである。今や彼等は、本國のナイル河の谷間を幸福な住家に變へるために事業を始めた。この谷間だけでも非常に多くの人民が充分に生活を享受し得る餘地があつたからである。先づ彼等は多くの新しい堤防や堰を築き、沙漠の中に廣大な貯水池を造つた。この貯水池へナイル河から水を引いて貯へ、旱魃が長引



いた時に用ひることにした。彼等は人民を奨励して數學や天文學を熱心に研究させた。それはナイルの氾濫する時を事前に豫期することが出来るやうに、時間といふものを明確に計算するためであつた。何時頃氾濫するか前以て其の時期を知るには何うしても時を計算する何か簡便な方法が必要になつて來た。數學者や天文學者が研究した結果、終に彼等は一年を三百六十五日と定め、一年を十二ヶ月に分けた。これが曆こよみの始りである。

エジプト人は如何なる外國品にも手出しをしてはならぬことにしてゐた在來の舊習に反抗して、彼等は人民に外國貿易を許可し、エジプトの商品を、彼等の港々へ諸處から運ばれて來た外國品と交易することを奨励した。

商人等はクリート島のギリシヤ人や西部アジアのアラビヤ人等と取引したり、印度人から香料を買ひ込んだり、支那から黄金や絹を輸入したりした。

併し凡て人類の施設は如何なる物でも先づ進歩して盛んなれば次ぎには又衰亡するといふ榮枯盛衰の法則に必ず従ふのである。國家でも王朝でも人類の施設の一種である以上この法則を免れることは出來ない。繁榮四百年にして是等の強力な王者達も衰亡の徴を現して來

た。駱駝の背に打ち跨つて軍隊の先頭に立つた偉大なるエジプト帝國の統治者達も、今では彼等の官殿裏に留まつて豎琴や笛などの音樂に耳を樂ませるのが慣はしとなつた。

或る日テーベの町へ怖い風聞が傳はつて來た。馬に跨つた一隊の野人の群が國境地方へ侵入して今しも掠奪を恣にしてゐるといふのだつた。直ちに一隊の軍兵が彼等を追ひ出すために派遣された。軍隊は沙漠へ深く進入して行つた。敵は狂暴なアラビヤ人だつた。彼等は羊の群を率ひ銘々の世帯道具を携へ、ナイルの岸邊を目指して今しも突進しつゝあつた。兩軍は激しく戦つた。エジプト軍が破れた。最後の兵まで猛惡なアラビヤ人のために斬り殺されて了つた。

彼等の進軍を押し止めるために更に軍隊は出動した。併し戦ひの結果はエジプト軍の全滅となり、ナイル河の谷間は侵入者のために開放された。彼等は敏捷な馬に乗り弓矢を使用した。暫くの内にはエジプト全土は残る所なく占領されて了つた。彼等は都をナイル河のデルタ(三角洲)に移した。エジプトの地はその後五世紀の間アラビヤ人に支配されてゐたのである。



彼等はエジプト人の農民に壓制を加へた。人々を虐待し子供等を殺し、此の地の古い神々に非禮を加へた。

アラビヤ人は都市に住むのを好まず、羊の群と共に打ち開けた野原に出て生活してゐた。そのため彼等はエジプト人からヒクソスと呼ばれてゐた。これは牧羊王の意味である。

終に暴虐なるアラビヤ人の支配は堪へ得べからざるものとなつた。

テーベの町から起つた或るエジプト貴族が此の外國の僭奮者等に對する征討軍を起しその革命の先頭に立つた。それは死物狂ひの戰鬪であつた。が勝利はエジプト軍に歸した。ヒクソスは國內から追放され、曩に彼等の來た沙漠の方へと歸つて行つた。この經驗はエジプト人民に取つては二つとなき教訓であつた。外國人の奴隸とされてゐた是までの五百年間は實に戰慄すべき經驗であつた。斯かる事は二度と起つてはならぬ。母國の境界地は嚴重に守備し此の聖地を敢て攻撃しようとする者を在らしめてはならぬ。エジプト人の覺悟は非常なものであつた。

テーベの新王テスモーシスは進撃してアジアに侵入し更に進軍を續けて遠くメソポタミア

の平原に到達した。彼れはユーフラテスの河で彼れの牛に水を飲ませた。バビロンやニネヅエトなどの町の者共はテスモーシスの名前を聞いたゞけでも慄へ上つた。彼れは行く先きゞに堅固な城塞を築き其れを立派な道路で連絡させた。斯様にして將來エジプト本國に外敵の侵入することが出来ぬやうにしてから彼れは母國に歸つて間もなく死んだ。併し彼れの娘ハトシエプスツが父の功業を繼いだ。彼女はヒクソスのために破壊された多くの寺々を再建し、軍隊と商人とが共同の目的に向つて一致協力して働いた所の強力な國家を立てた。これが即ち新帝國と呼ばれたものであつて紀元前千六百年から千三百年まで續いたのである。

併し乍ら武斷的國家といふものは決してさう長續きのするものではない。その國が廣大であればある程、その防備のために益々多くの人員を要し、無論軍隊としては多くの兵員を要するからして、家郷に在つて田園に勞作したり商工その他の産業に従事する者が益々減少するばかりとなる。その結果國家の基礎となる産業は萎微して振はず國費は多く軍備に消費され國勢日に衰退するのみである。此のエジプト新帝國がさうだつた。數年ならずして此の國は不釣合な頭出つ勝となり、最初外敵に對する保障であると思はれてゐた軍隊が國家に取つ



て何より怖い禍となつて來た。終に人員も金も極端に窮乏した結果、國家は崩壞の谷底へ軍隊のために引きずり落されて了つたのである。

文明世界全體の富を安穩に蓄積してゐたエジプトは、國境に繞らした堅固な城塞に感謝しなければならぬ。併し今や其の城塞をアジア方面から來た狂暴な民族が何等の反抗にも出會はず破壊しつゝあつた。最初はエジプトの國境守備隊も固守することが出來た。

併し或る日、遠いメソポタミヤの平原に新しい武斷的帝國が出現した。それはアッシリアと呼ばれた。此の武斷的なアッシリア帝國は藝術にも學術にもとんと意を留めず只管戦争のみを事とした。アッシリア人はエジプトに征め寄せエジプト人を打ち敗つた。その後二十餘年の間彼等はナイル河の谷間を支配した。エジプトに取つて此の一事は滅亡の始まりを意味した。

暫くの間は、エジプト人も獨立を回復しようとなつたことが幾度かあつた。併し彼等は古い種族だつた。彼等は數世紀の長きに亘つた過勞のために自ら疲弊し切つてゐた。

世界に於ける最も進歩せる民族としての先導者の立場を放棄し、歴史の舞臺から消えな

ればならぬ時が今や彼等の上に来たのである。ギリシヤの商人等がナイル河口にある町々へ群れをなして入り込んで來た。

ナイル河口に近いセイイスの地に新しい首都が建設された。エジプトは今や純然たる一箇の商業國となり、西部アジアと東部ヨーロッパとの間に行はれる通商貿易の中間宿場となつたのである。

ギリシヤ人の後からベルシヤ人が入り込んで來た。此のベルシヤ人等は既に北部アフリカの一帶を征服してゐた。

その後二百年経つてアレキサンダー大王は此の古い國、フェローの國をギリシヤ版圖の一州となした。彼れが死んだ時その部下の一將軍トレミイがエジプトを獨立させて其の王となつた。

トレミイ王朝はその後約二百年間エジプトを統治した。

紀元前三十年、トレミイ王朝の最後の統治者、女王クレオパトラは、ローマの常勝將軍オクタヴィアヌスの包圍に落ち、終に自殺を遂げた。



人類の足蹟

これがエジプトの末路であつた。終にローマ帝國の一部となり獨立國としてのエジプトの生命は絶えたのである。

九、メソポタミヤの平原

ピラミッドに攀ち登る……ナイルの流れ……沙漠の涯……舊約聖書の樂園……メソ  
ポタミヤの語源……ブラツツ（ユーフラテス）河とディクライト（チグリス）河……生  
活環境改善の欲望……住地争奪

私は今讀者を最も高いピラミッドの頂上へ連れて行かうと思つてゐる。

頂上まで行くには餘ほど攀ち登らなければならない。なかく骨が折れる。

此の人造の山を築くに用ひられたのは荒削りの花崗岩の切り石で、一つが平均二噸半即ち六百七十餘貫といふ非常に重い大きなものである。最大のピラミッドは斯ういふ大きな石を二百三十萬箇も積み上げて造つた。全體の形は方錐形である。面積十二エーカー半を占め、底邊の長さは一邊が七百五十五呎、高さは四百八十一呎。この全體の體積は實に八千八百五十萬立方呎あるといふ。斯様に花崗岩を澤山積み上げた表面へ石灰石の板を被せて置いたの

メソポタミヤの平原



である。これは長い歲月の間に風雨のために侵蝕されて今日では剝け落ちてゐる。併し中には上部にだけ今でも其の被ひが附着したまゝになつてゐるのがある。剝けた後は花崗岩の切石が曝け出てゐるから、見たところ全く切石を規丁面に積み重ねた方錐形の山である。石灰石の被ひが無くなつてゐる此の最大のピラミッドではその露出してゐる花崗石が丁度段々をなしてゐる面を攀ち登ることが出来るのである。此の石灰石の被ひはローマ人が入つて來てから彼等の新しい都市を築くために盜まれて行つたのが多かつた。頂上は元は尖つてゐて丁度四百八十一呎の高さになつてゐたが、今では例の被ひが剝け落ちたので少し低くなつてゐる。尖つた頭も石灰石で被はれてゐたのである。今では之を切り落した形になつてゐる。今日エジプトの首都カイロから少し西、ナイル河の左岸のギゼーといふ所に斯ういふ大ピラミッドが三つ立つてゐる。廣い沙漠の上に殆ど五十世紀といふ長い歲月を経て來た是等の奇妙な岩山を眺める時、吾々は其の上のエジプトの文明を思ひ、當時の彼等の生活に遠く想像の目を投げずには居られない。あゝ懐しきナイルの流れよ、懐しきピラミッドよ！

此の奇妙な岩山に曾ては山羊などが攀ち登つて戯れた時であつたのであらう。吾々も二三のアラビヤ人の子供等に助けられて一二時間も骨を折れば大ピラミッドの頂上に達することが出来る。さて其の頂に憩ひながら、人類の歴史の次ぎの場面を回顧することにしよう。

水源を南方遠くアビシニヤの彼方に發し、北へ〜と地中海目指して流れて來たナイル河も、リビヤの大沙漠に入る頃からは靜かに緩やかに流れゆく老いた河となる。その大沙漠の黄色い砂の東へ〜と打ち續いた彼方、遠い〜彼方の涯に目を放てば、微かにちらつく様な、綠色の物が見える心地がする。

其れは二つの大河に挟まれてゐる廣漠たる谷間である。これこそ古代の地圖の上で最も興味ある地點である。

其處は「オールドテストメント 舊約聖書」の「パラダイス 樂園」であり、これこそ彼のギリシヤ人がメソポタミヤと呼んだ、神秘と驚異との古い國である。

中央又は間といふ意味を持つた「メソス」といふギリシヤ語と、河といふ意味のギリシヤ語「ボトモス」とが結び附いて「メソス・ボトモス」から「メソポタミヤ」即ち「河の間に挟ま

メソポタミヤの平原



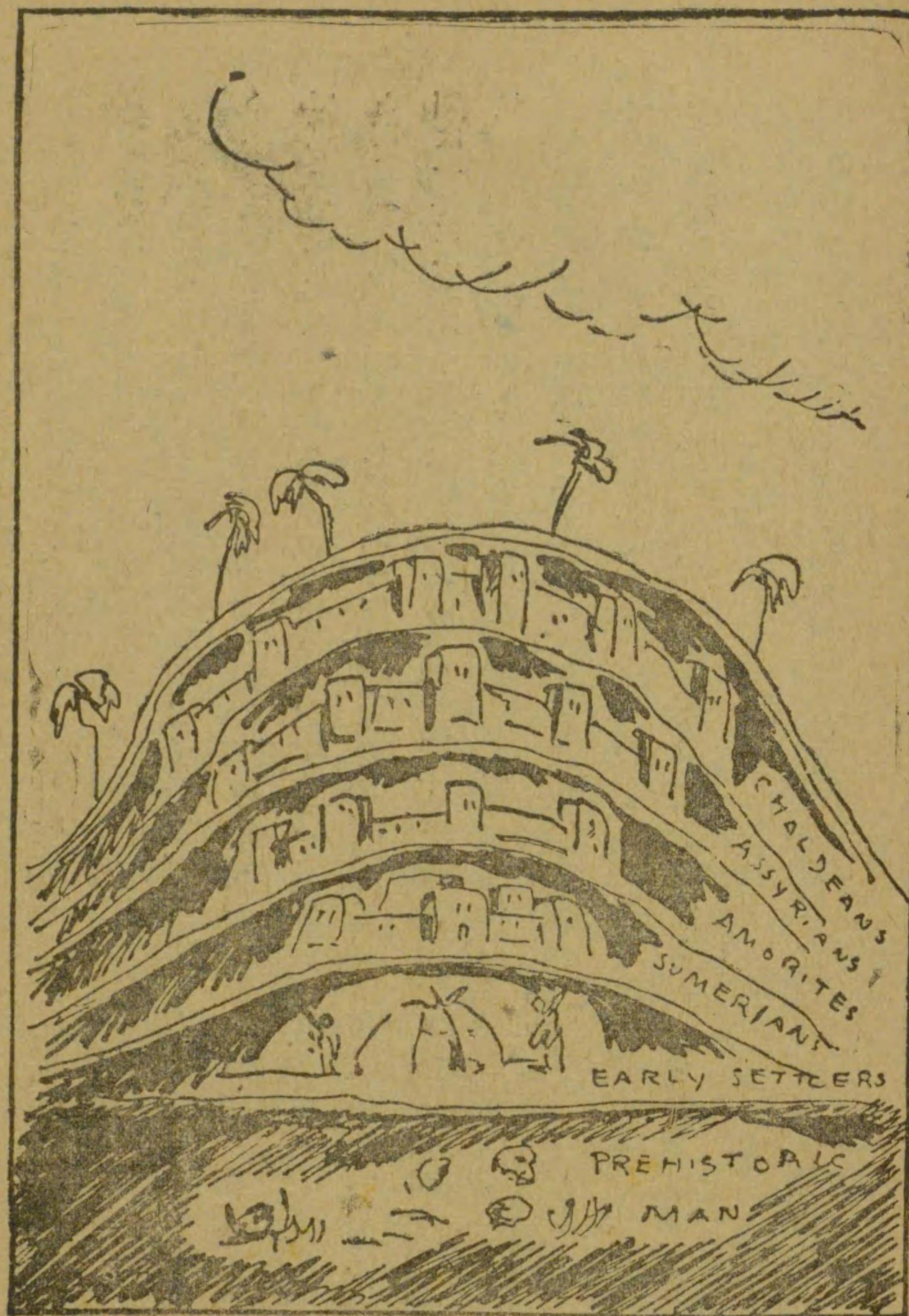
人類の足蹟

れた地」といふ語が出来たのである。(斯ういふ語の例は澤山ある。例へばヒッポボタマスといふ語は河馬であるが、ヒッポスは馬の意で之に河といふ意味のポトモスが結び附いて、河に棲む馬となつたのである。)

(Mesos + potomos = Mesopotamia. Hippos + potomos = Hippopotamus.)

さて其の挟んでゐる二大河といふのは何れかといふとユーフラテス河とチグリス河である。バビロニア人はユーフラテスとは言はず、プラトゥー (Parattu) と呼び、チグリスの方はダイクラート (Diklat) と呼んでゐた。此の二大河は地図を見れば分る通り、水源をアルメニヤの北部に在る白雪を頂いた山地に發し、靜かに南東へ流れ廣漠たる平原を貫流して終にペルシヤ灣の岸に流れ込んでゐる。併し印度洋の支海たるペルシヤ灣の波間に消え失せて了ふ前に、此の二大河は非常に偉大な有益な仕事を成就してゐるのである。即ち西部アジアに於ける唯一の肥沃な地方は此の二大河の流域なのであるが、若し此の兩河が無かつたならば此の地方一帯は乾燥不毛な地として残されてゐたに相違ない。

當時北方の山嶽地帯や南方の沙漠地方に住んでゐた民族の間にメソポタミヤの名は非常な



メソポタミヤの平原

メソポタミヤ沃野の土  
下から上へ。有史前の人類時代、初期の住民。スメリア人。  
アモライト人。アッシリア人。カレドニア人。



評判になつてゐた。言ふ迄もなく、此の地方に於てはメソポタミヤが唯一の肥沃豊穰な土地だつたからである。

凡そ如何なる生物も己が生活の快適であることを好む。これは良く知れてゐる事實で疑ひの餘地は存しない。雨が降れば猫は早速物蔭に逃げ込む。寒くなると犬はストーヴの前へ来て寝ころぶ。海水が前よりも鹽辛くなるとか薄くなるとかすれば、其の邊に居た魚類は今迄と同じ様な状態の海を探して移つて了ふ。鳥類などは特に此の移動の例が著しい。大抵の鳥類は一年に一回必ず棲む土地を變へる。季節が寒くなると鴨が飛び去る。燕が一羽南方から現れると吾々は、あゝ夏が吾等の地にも微笑みかけて來たのだと思ふ。

人類も此の例に洩れぬ。吾々は寒い風よりも暖い室内の方がすつと好きである。食事にしてもさうだ。美事な御馳走とパン屑と何方でも選べといふことになれば、誰れしもパン屑の方に御免蒙り度い。若し絶対に必要であるならば沙漠の中でも北極の雪の中にでも住むであらうが、もつと肥沃な住み良い土地が在るとなれば誰れしも早速移住し度くなる。自分の環境を改善し度いといふ此の欲望は要するに生活をより、快適にし無駄な勞力を省き度いといふ欲

望に他ならない。此の欲望が人類世界の向上進歩を促す重要な要素なのである。

此の欲望はヨーロッパの白人を新大陸に追ひやつた。山や野、到る所に人家を建てさせたのも詰り此の欲望である。それは數百萬の人間を東から西へ、南から北へと間斷なく旅行させ、終に彼等は自分に最も適した氣候とその他の生活状態を見出したのである。

勞力の消費を出来るだけ最少にして、出来るだけ最多の快適を獲得するやうに生物を促すところの此の本能が、アジアの西部地方では、兩地方の住民即ち北方の寒くて住みにくい山嶽地帯の住民と、南方の不毛の沙漠に於ける住民とを驅つて、新しい居住地を終にメソポタミヤの幸福な谷間に探し出させるやうにしたのである。

此の兩民族は地上に於ける此の樂園を獨占しようとして闘ひ合つた。あの本能が彼等をして斯く闘はしめるに至つたのである。彼等は、此の樂園の名に惹きつけられて次ぎから次ぎへと新たに入つて來る侵入者の群を防いで、彼等の家や田地や妻子を護るために、驚くべき崇高な勇氣を發揮し、彼等の發明工夫の才能を最高度に發揮した。これも亦あの本能が彼等を促した結果に他ならない。



斯様にして古くから此の地に落ち着いた民族と、この地の分け前を望んで喧々囂々と喚き寄せ攻め寄せて来る他の諸民族との間には激しい争闘が間斷なく行はれた。弱かつた者、多量のエネルギーを持たなかつた者には成功の機會が無かつた。否、生存といふ事さへ叶はなかつたのである。

最も智慧のあつた者、最も勇敢だつた者だけが生き抜けられた。此の事實は、メソポタミヤの地が強力な人種——その後代の有ゆる人類に取つて非常なる大利益となつたところの文明を生み出してくれたあの強大なる國家を創造し得た強力な人種——の住み家となつた所以を説明してゐる。

## 十、楔形文字とバベルの塔

ベルシャのシラツ丘陵の廢寺……爪痕の様な文字……其の發見者と研究者……スメリヤ人の發明した楔形文字の讀方……ベヒスタンの岩壁……ダリウス王の事蹟刻文……スメリヤ人の住地「葦原の國」……岩山の神壇……「バブーイリー」(ハビロン)……スメリヤ人の塔……バベルの塔。

コロンブスのアメリカ發見に先つこと二十年の一四七二年に、ジョサファット・バーバロー(Josaphat Barbaro)とヴェイタリーのヴェニス人がベルシャを旅行中、シラツ(Shiraz)附近の高原を通過した時、彼は驚くべきものを見た。此の高原は丘陵が起伏してゐたが、その丘陵の至る所に古い寺が澤山あるのだつた。皆、丘の横腹の岩を掘り込んだものであつた。何れも皆甚しく荒廢してゐた。古い信者達は既に幾世紀も前に消えて無くなつてゐたのである。併しバーバローは其の荒廢した寺々の岩壁に、鋭い爪痕のやうに見える奇妙な書體で彫

楔形文字とバベルの塔



りつけられてゐる長い文句を明らかに認めた。

彼れは歸國した時此の發見を自分の町の人々に語つたが、恰かも此の時はトルコ人がヨーロッパへ侵入しようとしてゐた頃なので、人々は此の西部アジアの中部地方の何處かの奇妙な文字などを氣に懸けてゐる暇は無かつた。そんな譯だつたから此のペルシヤの刻文のことなどは直ぐと忘れられて了つた。

その後二世紀半經つた頃、ピエトロ・デラ・ヴァルレといふローマの若い貴族がバーバローの通過した此の同じ高原を通つた。彼れも此の廢寺の岩壁に彫りつけてある奇妙な碑文を認めて駭いた。感じ易い若者だつた彼れは之に強い興味を感じ、注意して皆寫し取つた。そしてナポリにゐる友人の所へ之を送つた。友人といふのはナポリで開業してゐる醫師でスキバノーと言つた。此の男は學問に興味を持つてゐた。

スキバノーは此の妙な小さな文字を寫し取つて他の學者達に持つて行つて見せた。不幸にもヨーロッパはまた他の問題で多忙を極めてゐた。

プロテスタント（新教徒）とカトリック（舊教徒）との間に激烈な戦争が勃發し、宗教問

題に就いて彼等の忌避に觸れた人々が盛んに殺されてゐる最中だつた。

斯様な有様で此の楔形の文字の研究が眞面目に始まつたのは其れから更に百年も經つてからだつた。

十八世紀は科學的驚異を愛した。活潑な好奇心を持つた人々には歡ばしい時代だつた。其故、デムマーク王フレデリック五世が、西部アジアへ彼れの派遣しようとしてゐた探險隊に學者の参加を求めた時の如きは希望者引きも切らぬ有様であつた。

此の探險隊は一七六一年にコペンハーゲンを出立してから六ケ年も航海を續けた。その間に隊員はたゞ一人残して皆死んで了つた。残つた一人といふのはカールステン・ニールといふ男で、元來獨逸の百姓の生れだつたので、圖書室の息の詰まるやうな書籍の間ではかり暮らしてゐた他の學者連中よりも困難に打ち勝つことが出来たのである。

彼れは測量師だつた。未だ若者であつたが吾々は彼れを賞讃せずに居られぬわけがある。隊員に死なれて了つてから彼れはたつた一人で航海を續け終にベルセボリスの廢墟に達した。彼れは其處に一ヶ月程留まつて、荒廢した宮殿や寺々の壁に發見された例の刻文を悉く



寫し取つた。

デンマークへ歸つてから科學界のために其の發見を發表し、是等の原文の内に何かの意味を読み解かうと思つて熱心に努力した。

彼れは成功しなかつた。併し成功しなかつたのも無理はない。彼れが解かうとした物が如何に困難な物であつたかを知れば吾々は彼れの不成功を異としなない。彼のシャーンポリヨンが古代エジプトの象形文字の解讀に手を付けた時彼れは多くの小さな繪から研究を進めることが出來た。然るに此のベルセボリスの刻文は全然繪にはなつてゐなかつた。



それは大低V字形即ち楔くさびの様な恰好かくかうをしてゐて、其れが無限に繰り返して使用されてゐた。ヨーロッパ人の目には何物も暗示されなかつた。


此の難題も解決されて了つた今日の吾々は、此のスメリア人の抑々の最初の文字がエジプトの象形文字と同じく矢張り一種の繪文字であつたことを知つてゐるが、然し最初は全く解らなかつたのである。



併しエジプト人は非常に早い時代に既にあのバビルス草を發見して、その葉を乾して滑ら




かな面に彼等の繪文字を書くことが出來たが、之に反してメソポタミヤの住民は山腹の堅い岩石とか、軟らかな煉瓦の様な粘土板とかへ刻み付けるより他に道を知らなかつた。

必要に驅られて彼等は其の最初の繪を段々と簡略して終に彼等の用途に必要な組み合せ文字を五百種餘り作り出した。

その例を少し擧げて見よう。星といふ意味を示した彼等の繪文字は最初は  であつた。これは骨又は釘で粘土の板へ搔き附けたものである。併し此の形は面倒である所から暫くの内に棄てられて今度は  となつた。

その内に此の星といふ字の意味に天の意味が附加され、形も簡略されて  となつた。今迄の形なら吾々が初めて見ても凡そ其の意味を推測することが出来るが、かうなつた形に初めて出會つたのでは解らない。

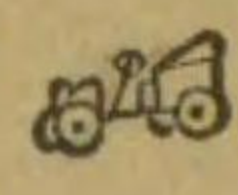
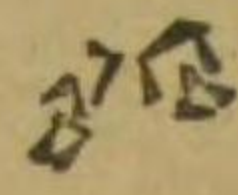
同じ様にして牛といふ意味の  は  から變化して來たのである。

魚は  から  に變つた。太陽は最初はたゞの圓を描いたものであつたが其れが  となつた。

楔形文字とバベルの塔



若し今日吾々が此のスメリア式の刻字を用ふるものとすれば吾々は  
やうに作ることであらう。

 を  の

斯ういふ形の意味を推讀することが如何に困難だつたかは誰にも分るだらうと思ふ。當時  
獨逸の或る學校教師でグローテフェンドといふ人が熱心に此の研究に従つてゐたが終にその  
我慢強い努力は報いられ、ニールブルの最初の發表以後三十年にして漸く四つの字が解讀さ  
れた。此の楔形繪文字の最初の發見から三世紀後のことである。

四つの字といふのはD、A、R、Shであつた。是等四箇の字は、吾々がダリウス(Darius)  
王と呼んでゐる所のベルシヤ王の名前 Darhoush の中に在つた。

それから重要な事が起つた。——電話線や汽船などが全世界を一つの大きな都市に變じて  
了つた以前の、あの希望に充ちた幸福な時代にのみ在り得た所の多くの重要な事件の其の一  
つが起つたのである。

忍耐強い歐洲の學者教授といふやうな人達が、此の新しく見出されたアジアの秘密を解決  
するために眞夜中にも蠟燭の火を點して熱心に研究してゐる間に、若いヘンリー・ローリン

ソンはイギリスの東印度會社に見習士官として奉職してゐた。

彼れは餘暇を利用してベルシヤ語を勉強してゐたが、或る時ベルシヤ王が其の軍隊訓練のた  
めに數人の英國士官を雇ひ度い旨を英國政府に請求した。その時ローリンソンも其の一人と  
して任命されベルシヤのテヘランへ行つた。其の後彼れはベルシヤ中を旅行したが或日會々入  
つた村がベヒスタナ(Behistan)と云ふ村であつた。ベルシヤ人は此の村をバジスタナ(Bagis  
tana)と呼んでゐた。これは「神々の住む地」の意味である。(ローリンソンは一八一〇年四月  
十一日にイングランドのオックスフォード州チャドリンントンに生れた。東印度會社に入つたの  
は一八二七年。その六年後ベルシヤ軍隊の訓練に雇はれた。譯者註)

紀元前五世紀の頃、メソポタミヤから初期のベルシヤ人の住地イラン高原の地方に通ず  
る本道が、此のバジスタナの村落を貫通してゐた。此處には諸所に高い懸崖があつた。ダリ  
ウス王は當時、彼れの偉大なる努力を世界に廣く告げるために是等の高い懸崖の險しい岩壁  
を使用した。路傍に高く突き立つてゐる絶壁に、彼れの光輝ある功績に就いて彫り付けさせ  
たのである。

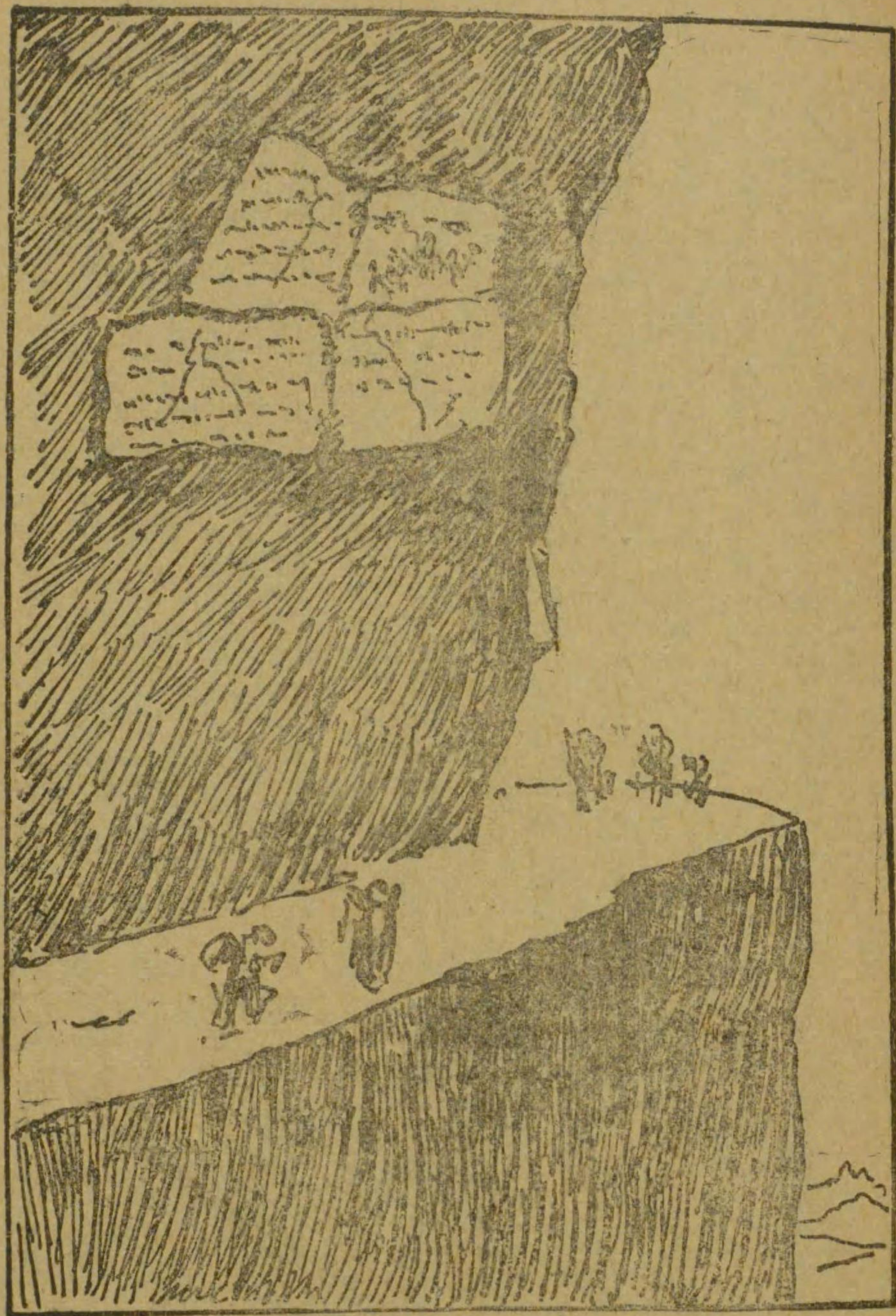


此の刻文はベルシヤ語、バビロニヤ語、及びスーサの町の方言と此の三體で彫りつけられてあつた。之を少しも讀むことの出来なかつた人々に此の話を明瞭に分らせるために、碑文の傍に彫刻がしてあつた。その彫刻は、正統な統治者からベルシヤの王位を盗み取らうとした篡奪者ゴータマの身體を、勝ち誇つた足下にダリウス王が踏まへてゐる所を現してゐる。周りには打ち敗られたゴータマの家來達が十二人彫り附けられてゐる。其等は背景に立つてゐる。彼等の手は疲れ切つてゐる。もう數分間の内に生命を奪はれようとしてゐる所である。なか／＼立派にさうした光景が映し出されてゐる。

此の彫刻と三體の刻文とは道の上數百呎の高い所に在つたが、ローリンソンは非常な危険を冒して此の絶壁を這ひ上つて全部寫し取つた。

彼れの發見は人類史上に於ける最も重要な發見の一つである。此の「ベヒスタンの岩」はロセッタ・ストーンの様になつた。ローリンソンは、此の太古の楔形文字解讀といふ光榮をグローテフェンドと共有した。

此の二人は互に相見たことも名前を聞いたことも無かつたけれども、凡ての偉大な科學者



ベヒスタンの岩壁  
ダリウス王の事蹟が刻みつけられてゐる。



がさうであるやうに一つの共通の目的に向つて働いたのであつた。

彼等が此の原文から取つた寫しは各國で印刷に附された。此の文字は楔形をしてゐるので楔形文字 (Cuneiform Letters) と稱されることになつた。キューネウス即ち cuneus は楔くわいと云ふ意味のラテン語である。

併し此の賢い記録法を發明した民族に就いては吾々は今日まで餘り詳しく知ることが出来ないでゐる。彼等は白人種で、スメリア人と呼ばれた。

彼等の住地は吾々が今日シヨマー (Shomer) と呼んでゐる地方だつた。之を當時のスメリア人はケンジー (Kensji) と呼んでゐた。此のケンジーといふ語は「葦原の國」の意で、彼等がメソポタミアの谷の、沼澤の多い部分に住んでゐたことを示してゐる。

スメリア人は元來山嶽地に住んでゐたのであるが、肥沃な南方の野原に誘はれて山地から引き移つた。併し西部アジアの高い峯々の間に彼等の古い住地を残して來たが、彼等は古い風俗習慣を棄てなかつた。其の内に一つ特に吾々の興味を惹くことがある。

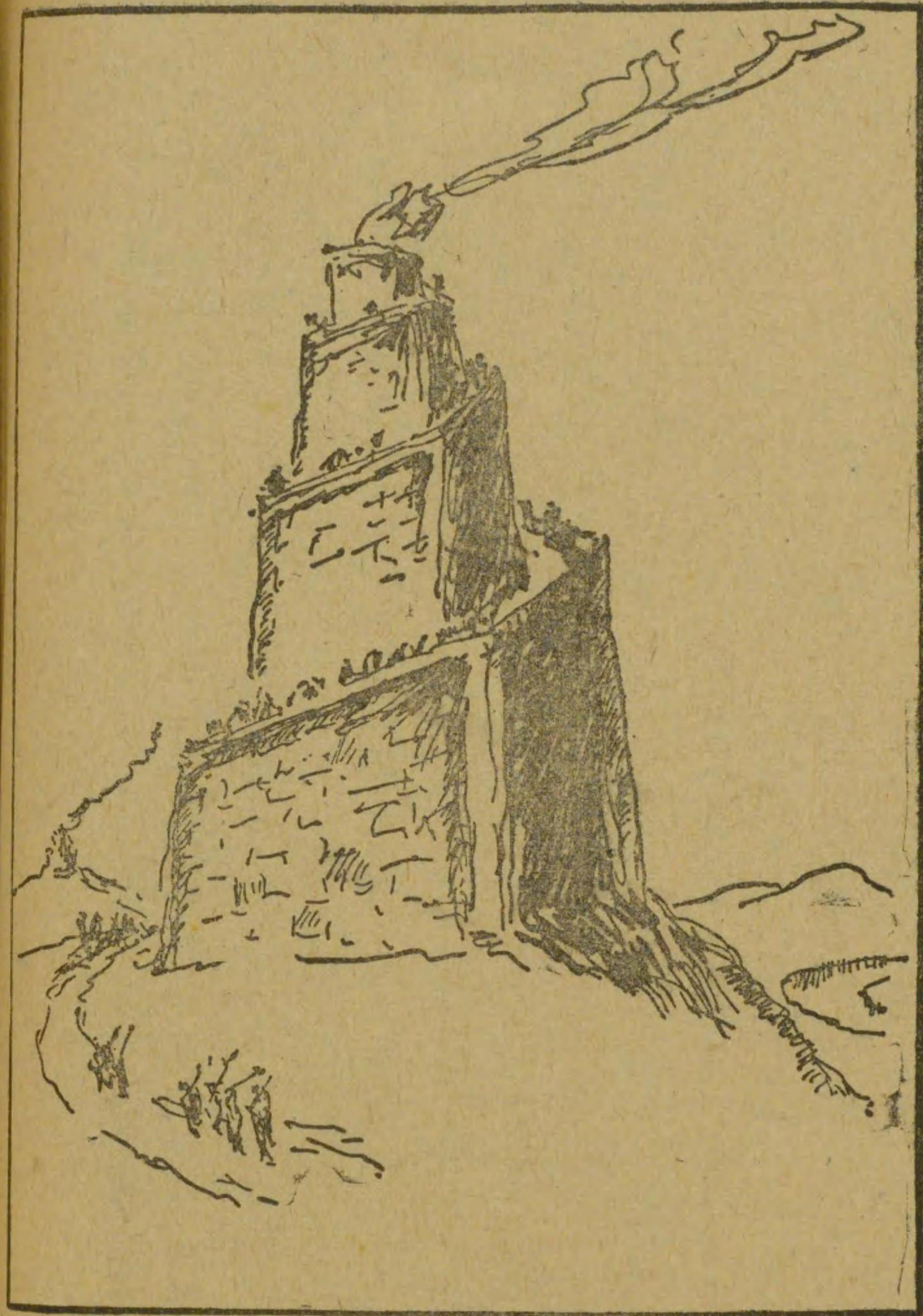
西部アジアの高峯連る間に住んでゐた頃、彼等は高い岩石の頂に建てた神壇の前に額いて

彼等の神々を拜した。平原地方の新しい住地に移つてからは、さうした岩石が無かつたので前と同じ様式に彼等の禮拜所を建てることは出来なかつた。彼等にはそれが面白くなかつた。

アジア民族は凡て、古來の傳統といふものに深い敬虔の念を懷いてゐる。スメリアの傳統は、周圍數哩から神壇が明らかに見えるやうに建てなければならぬことを要求した。併し山地の様に高い岩などは見附からなかつた。此の困難を打ち破つて、彼等の祖先が崇拜した神々を祭るために、彼等は小さな丘とも見えるやうな低い塔を澤山建て、其の頂上に彼等の古い神々のために神聖なる火を焚いた。

スメリア人が悉く死に絶えてから多くの世紀が過ぎ去つた頃、「バブーイリー」(Bab-III)の町——吾々がバビロン (Babylon) と呼んでゐる町——に訪ねて來たユダヤ人等は、メソポタミアの綠野に立つてゐる奇妙な形をした數々の塔を眺めて不思議な感に打たれた。舊約聖書の中に書いてある「バベルの塔」は、信心深いスメリア人の或る一團が數千年前に建てた所の例の人造丘の廢墟に他ならない。それは奇妙な構造になつてゐた。





バベルの塔

スメリア人は階段の造り方を未だ知らなかつた。彼等は塔の外側に、勾配の緩い歩廊のやうな道をぐるぐると巻き上るやうに造り附けた。地面から塔の頂上へ行くには此の螺旋道を行くのと歩いて行つたものである。

今から數年前のことであるがニューヨーク市の中心に鐵道のステーションを新に建築しなければならぬ事になつた。それは數千の乗客を低い所から高い所へ一度に昇らせるやうに造る必要があつた。普通の階段では混雜の時には足を踏み外して倒れる者なども出るだらうから安全でないと言はれた。特に何か怖しい恐慌でも生じた場合には人々は慌てふためいて非常な混亂を來すだらうから、さういふ時には階段では危険だといふことになつた。で此の難問を解決する手段を技師連は昔のスメリア人から思ひ附いた。

三千年の昔に始めてメソポタミヤの平原へ紹介された、あの昇廊と同じ物が今ではグラント・セントラル・ステーションの構内に取り附けられてゐる。



# 十一、アッシリヤ人とバビロニヤ人

セミ種族の一大坩堝……アメリカは世界人種の坩堝……スメリヤ人……遊牧民の生活……サルゴン王……アッカディア人……アモライト人……ハンムラビー大王……バビロニヤ大帝國……ヒッタイト人……アッシリヤ人の都ニヌア……チグラース・ベルザ  
 ー王……ブールー王の宏圖……アッシリヤ帝國の疲弊……シンメリア人……シ、ア人……カルデア人……アッシリヤ帝國の崩壞……バビロンの復活……ネアカドネツザール王……バビロン世界的名地となる……カルデア人と星……時間の勘定……十進法……十二進法……定休日などの制定……ペルシヤ人……アレキサンダー大王……新都セリューシア……バビロンの廢墟。

「アメリカは坩堝だ。」

吾々はアメリカのことを屢々さう呼ぶことがある。といふのは、世界各地に散在してゐる多くの人種が、生れ故郷に見附けられる生活環境よりも更に天恵の多い環境を發見して新し

い住み家として新生涯を開拓しやうといふので、大西洋、太平洋の岸邊を指してアメリカへ盛んに集つて來るからである。メソポタミヤがアメリカ大陸より小さいことは言ふ迄もない。併し其の肥沃な原野は世界未有會の特別な坩堝であつた。殆ど二千年の間此の坩堝は新しい人種を次から次へ呑み込んだのである。チギリス、ユーフラテス兩河の岸に住み家を求めて囂々として蝟集し來つた新民族は各々興味ある歴史を織り成してゐるが、此處ではたゞ彼等の冒險に就いて簡明に短くお話しすることゝしやう。

前章で吾々の出會つたスメリヤ人は彼等の歴史を岩壁や粘土板などに搔き付けてゐた。彼等はメソポタミヤにさ迷ひ込んだ最初の遊牧民であつた。(彼等はセミ種族には屬してゐな

50) 遊牧民といふのは、一定の場所にきまつた住み家もなく田畑も持たず、羊、山羊、牛などを野放しに飼ひながらテントに露營し、牧草が青々と茂り水が豊かな所ならば何處へでも羊や牛の群を引き連れテントを纏めて、牧場から牧場へと始終移り歩いて生活してゐる民族である。

アッシリヤ人とバビロニヤ人



人類の足蹟

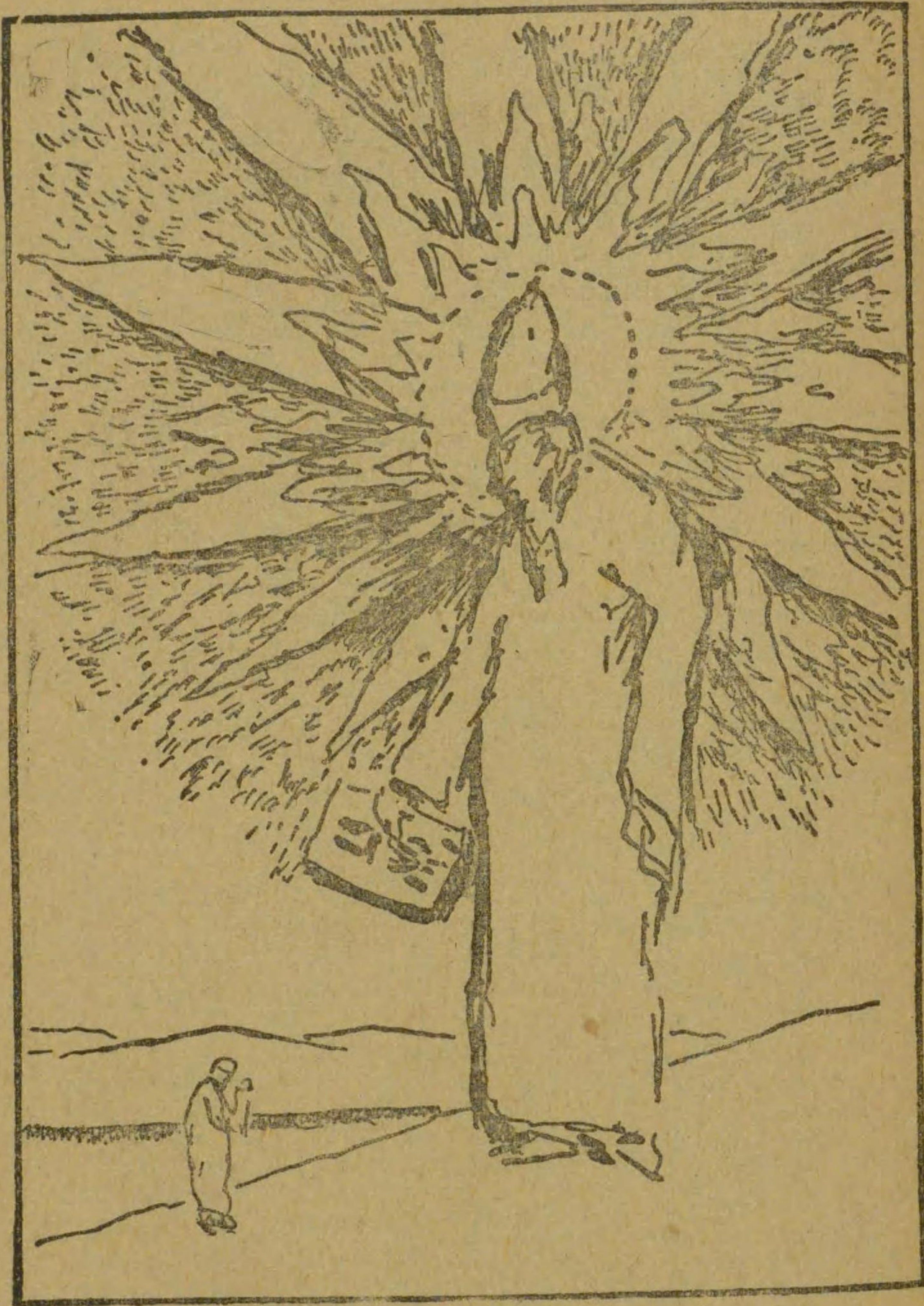
廣い平原が彼等のテントや泥造りの小屋などで蔽はれた。彼等は戦争が強かつた。長い間彼等は凡ての侵入者を追ひ拂ひ撃滅して其の住み家を固守することが出来た。

ところが今から四千年以前にアッカディア人といふセミ種族に屬する一族がアラビアの沙漠から出て来て、スメリア人を破つてメソポタミヤを征服した。此の民族の王達の内で最も有名なのはサルゴン王といふのである。

此の王は、彼等が今占領した地の先住者スメリヤ人の文字を使つて自分等のセミチック語を書く方法を人民に教へた。サルゴン王は賢明な統治振りを見せた。前からの住民と新に入つて来たアッカディア人との間に存した差別は忽ちにして消滅し兩民族は互に同化し合つて親密な友となり平和と調和の内に共にその生を享受することが出来た。

此の帝國の令名は忽ち西部アジアの到る所に廣まつた。此の成功を耳にした他の遊牧民は幸福を引き當て度い野心に驅られた。斯くて沙漠地方の遊牧民の一族でアモライト族といふのがアラビアの沙漠にその露營を破り棄て、北の方メソポミヤを指して動き出した。

平和な緑の谷間はたゞならぬ騒動と混亂の修羅場と化した。終に、名をハンムラビー (Hammurabi)



アッシリヤ人とバビロニヤ人

ハムラビー大王  
有名なハムラビー法典の制定者 (B.C.2200)



mmurapi) 又はハムラビー (Hammurabi) と呼ぶアモライト族の酋長が「バブローイー」(神の門)の町を占領しバビロニヤ大帝國の統治者となつた。

キリストの誕生前二十一世紀の頃に生きてゐた此のハムラビーは吾々に取つて極めて興味ある人物である。彼等はバビロンを古代世界に於ける最も重要な都にした。其處では博識な僧侶達が、彼等の偉大なる統治者に太陽神手づから賜はつたといふ法律を司つてゐた。商人等は公平誠實に遇されたので此の町で取引するのを好んだ。

この法律は所謂「ハムラビーの法典」として有名なものである。之を詳しく述べれば丁度此の書の四十頁位を埋めて了ふことになる。充分此處にその餘白があれば私は、此の古代のバビロニヤ帝國が吾々の近代的國家の多くのものに比して、多くの點に於て遙かに良く統治せられ、人民もづつと幸福であり、法律や秩序も遙かに注意深く制定保持せられ、言論の自由も遙かに良く認められてゐた事などを詳しく述べて見度いと思ふが、それはまた他の機會に譲ることにしやう。

併し此の國が全く完全であつたといふのではない。間もなく北方の山地から降りて來た野

蕃狂暴な他の民族に侵され、ハムラビーの靈才に依つて創造された偉業も破壊されて了つたのである。

此の新しい侵入者の名はヒッタイト族と稱した。この民族に就いては私はスメリア人に關して話したほど多く話すことが出来ない。バイブルには彼等に關する事が書いてある。彼等の文明の廢墟は此の地方一帯に廣く残つてゐる。彼等の用ひてゐた文字は一種の象形文字で奇妙な形をしてゐる。併し之を解讀し得た者は今日迄未だ一人も無い。彼等は統治者としての才能は左ほど恵まれてゐなかつた。僅か數年ならずして彼等の領土は分裂して了つたのである。

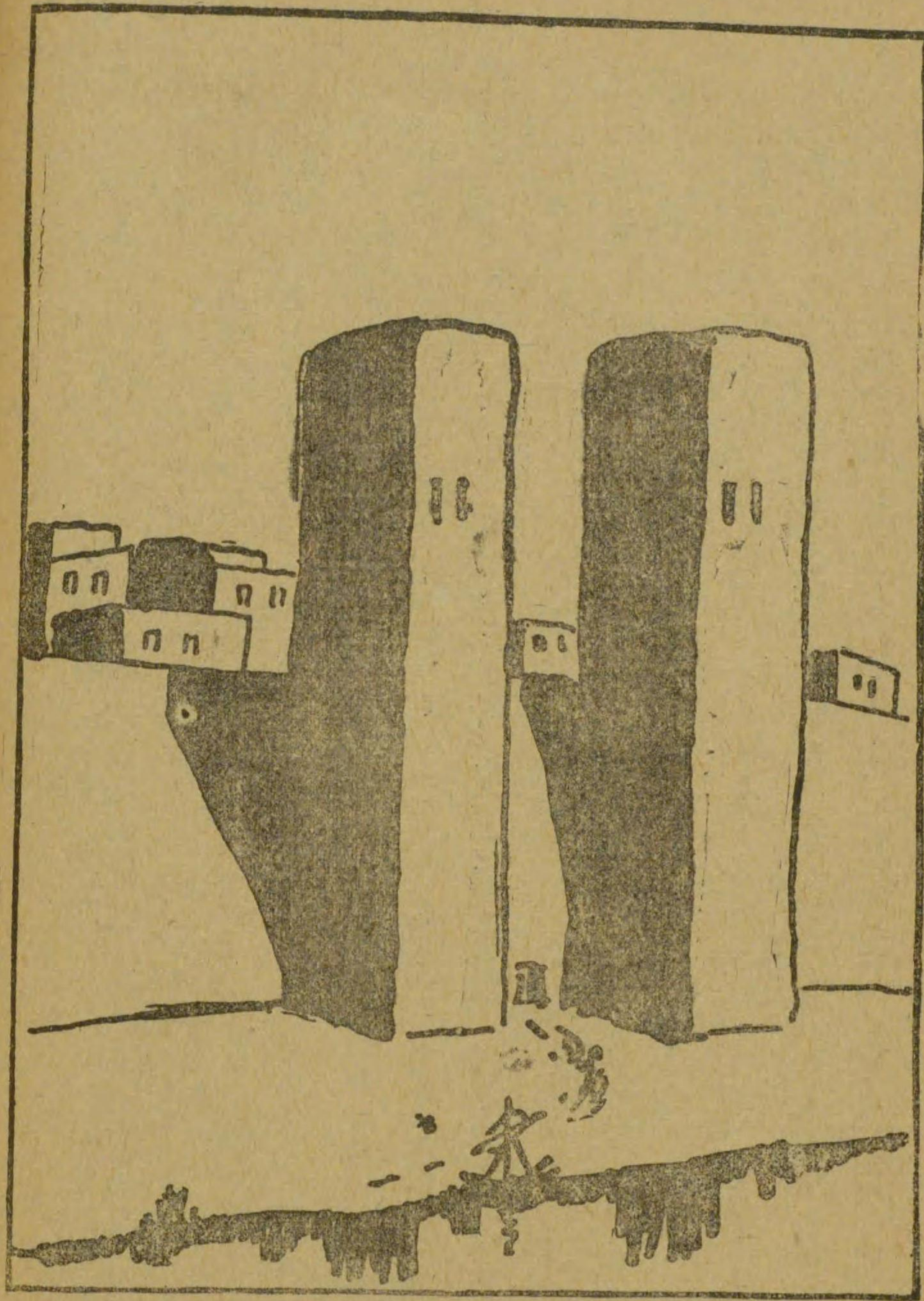
他の民族が非常な苦心と努力とを以て建設した多くの物を破壊したといふ評判と彼等民族の奇妙な名前との他、殆ど何物も彼等は残さなかつた。

やがて新たな侵入者が來た。併しこれは今迄のものとは非常にその趣が異つてゐた。

大神アッスールの名に於て虐殺と掠奪を恣にした所の沙漠彷徨者の狂惡な一族が、アラビアの沙漠を後にして北方へ進出し終に山地の傾斜面に達した。それから方向を轉じて東へ行

アッシリヤ人とバビロニヤ人





アッシリア帝國の都ニネヴェー (B.C.1900)

き、ユーフラテスの河岸に町を建てた。彼等は之をニヌアと呼んだ。此の名はギリシヤ名前のニネヴェーとなつて今日の吾々まで傳はつて來たのである。一般にアッシリヤ人として知られてゐる是等の新來者の一族は直ちに戦争を開始した。彼等はメソポタミヤの平原に住む他の諸民族に對して徐々たる併し怖るべき戦争を始めたのである。

紀元前十二世紀に彼等はバビロンを破壊すべき最初の企圖を試みたが、彼等の王チグラース・ヘルサーの側が先づ最初に勝利を占めた後に、間もなく打ち敗られ止むなく自分等の元の國へ引き返さなければならなかつた。

それから五百年後に彼等は再び試みた。其の時ブールーといふ名前の冒險好きな將軍がアッシリアの王位を占めた。彼れはアッシリアの國家的英雄と見做された前のチグラース・ヘルサーの名を襲ひ、全世界征服の意思を宣言した。

事實に於て彼れはその宣言通りだつた。小アジア、アルメニヤ、エジプト、北部アラビヤ、西部ベルシヤ及びバビロニヤ等悉くアッシリヤの屬州となり終つたのである。是等の地方は其れ／＼アッシリヤの知事に依つて治められたが、此の役人等は租税を集め、全國の壯丁を悉

アッシリヤ人とバビロニヤ人



く召集してアッシリヤの軍務に服せしめた。間もなく彼等は貪慾と暴虐の故を以て諸州の人民から非常に憎悪されるやうになつた。

幸にも此の帝國の最大勢力の時はさう長続きがしなかつた。それは恰かも船體が非常に小さい癖に餘りに多くの帆や檣を持つた船のやうな物だつた。其處では餘りに多過ぎる軍隊があつて必要な農民が不足し、將軍や士官のみが徒らに多く實務に携る者が足らなかつた。

王や貴族達は非常に富んで來た代りに民衆は垢塗れの貧苦の底に蠢いてゐた。此の國は平和といふ事が暫くもなかつた。常に誰かと戦ひ、絶えず何處かしらに戦亂があつた。それは皆、少しも人民のためにならぬ禍根を生ずるのみであつた。國民を疲弊させるだけに過ぎぬ此の間斷なき戦役のために、終にアッシリヤの軍隊は殆ど悉く戦死し残つた者も大部分は不具者であつた。そこで外國人を軍隊に這入らせる必要に迫られて來た。是等の外國人は、自分等の家を破壊し自分等の子供達を奪ひ取つた彼等の野蠻狂暴な主人等を好む筈が無かつた。従つて彼等は戦ひに出ても少しも奮戦するといふことが無かつた。

アッシリヤの國境地方の生活は最早安穩では無くなつて來た。見知らぬ新しい民族が北方

の國境を絶えず攻撃してゐた。其等の内にシンメリア人といふのがあつた。最初此の民族は北方の山脈の彼方に在る茫漠たる大原野の地方に住んでゐたのである。詩祖ホーマーは「オディシウスの航海」の内に彼等の國のことを歌つてゐる。「常闇の底に沈める地……」と彼れはその國を歌つてゐる。彼等は白人種だつた。彼等は更に他の民族——シシア族と稱するアジア人種の遊牧民——のために其の住み家から追ひ出されて南下して來たのである。

シ、ア族は近代のコサック族の祖先である。遠い以前の其の頃でも彼等は騎馬術に巧みなので有名になつてゐた。

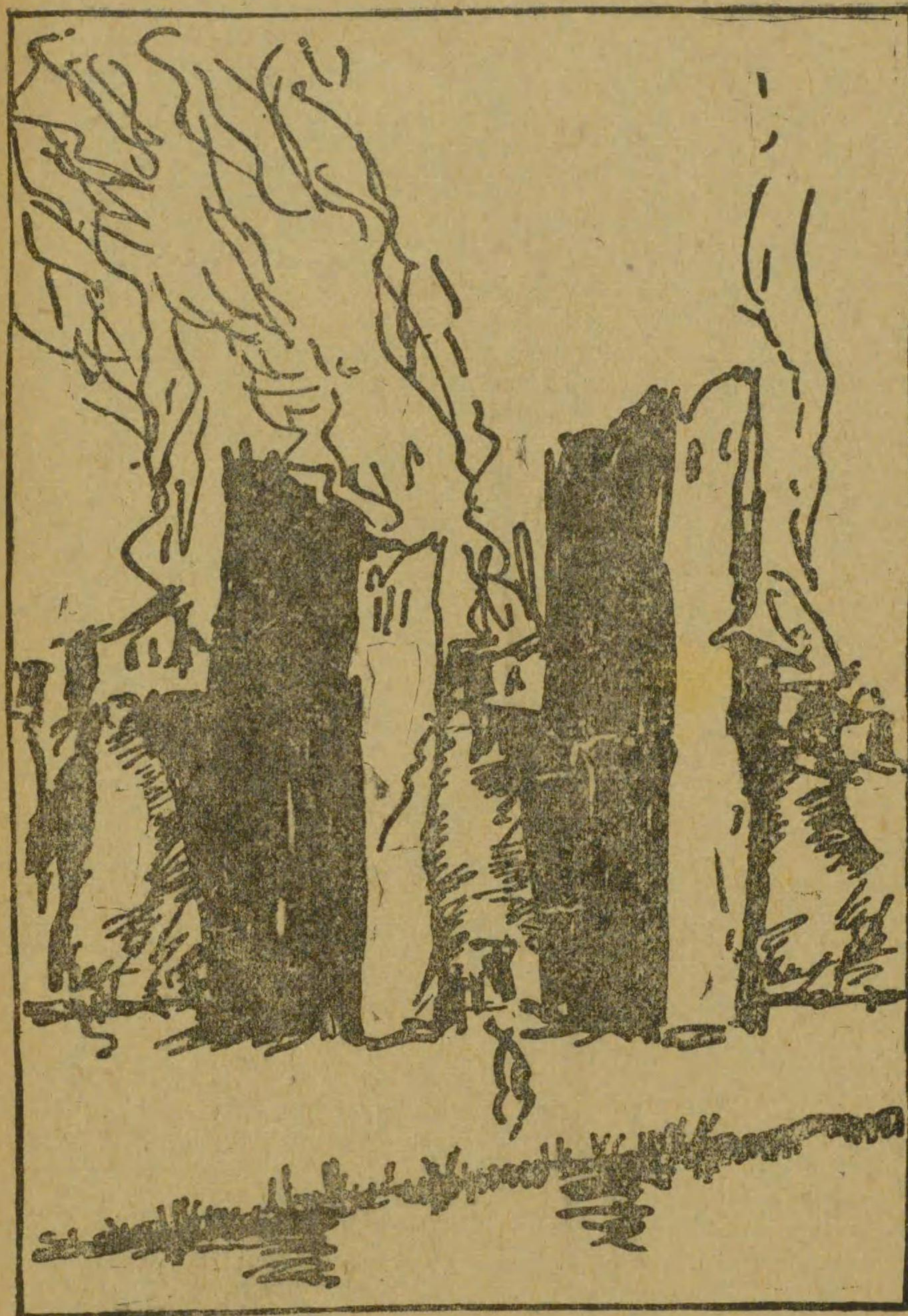
シ、ア族のために激しい壓迫を受けたシンメリア族はヨーロッパからアジアに入り、ヒッタイト族の住地を征服した。その後小アジアの山地を後にして南下しメソポタミヤ平原に入るや、アッシリア帝國の疲弊し盡くした人民の間に戦慄すべき大破壊を行つた。

ニネヴェーでは此の侵入を阻止すべき者を募つた。疲弊し切つた軍隊がそれでも北方指して進み出で行つた。と、其の時また新たな一層急速な危険が東南から迫つて來た。

カルデア人とセミ族の一小種族が、メソポタミヤの沃野の東南部に、ウルと稱する彼等の

アッシリヤ人とバビロニヤ人





ニネグーの破壊

國で、長年の間平和に、生活してゐた。是等のカルデア人が突然戰端を開いて、アッシリヤに對して堂々たる鋒先を向けて來たのである。

隣國の何れからも友誼を得られなかつたアッシリア帝國は今や四面楚歌の有様となり、終に滅亡の氣運に落ちた。

ニネグーの町が陥落し、數世紀に亘つた劫掠で一杯に詰め込まれた此の氣味の悪い寶物藏ほうぶつざんが終に破壊された時、東はベルシヤ灣の濱邊から西は遠くナイルの河岸かはぎしに到る迄、何處の小屋こむらにも何處の小屋にも歡よろこびの聲が漲り渡つた。

その後數代を経て、ユーフラテスの岸邊を訪ねたギリシヤ人が、林や藪に蔽はれてゐる廣大な廢墟を見出して尋ねた時、それが何であつたかを話してくれる者さへ無かつた。斯くも甚しき殘虐と壓制もて庶民の膏血を搾り奮つた町の名も數代後には早くも人々の心から忘れ果てられてゐたのである。

然るに、之とは全く違つた仕方て人民を治めてゐたバビロンの町が、やがて甦よみがへつて來た。

明君ネブカドネザールの長い治世の間に古い寺々は再建された。數々の廣大な宮殿が短



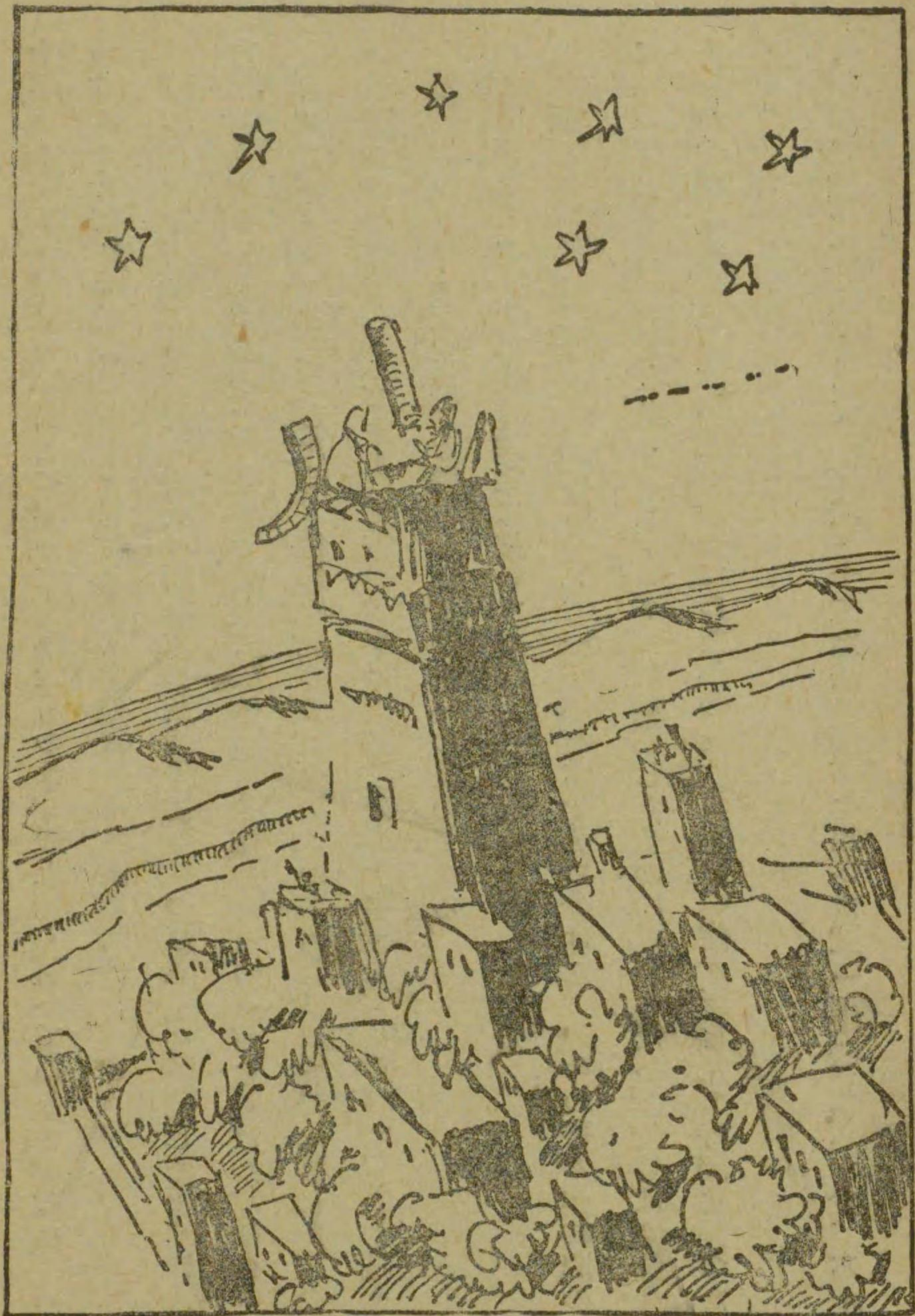
期間の内に建立された。田畑を灌漑するために新しい運河が此の沃野の到る所に掘られた。喧嘩好きな近隣の國々は厳しく罰せられた。

エジプトは單なる國境の一州に下げられ、ユダヤ人の首都イエルサレムは破壊された。モーゼの一聖典は奪はれてバビロンに移され、數千のユダヤ人は人質としてバビロンに護送された。是等のユダヤ人は、バレスチナの故國に居残つた同胞の善行保證として人質になりバビロンの王に従つて彼れの都へ行かなければならなかつたのである。

併しバビロンは古代世界に於ける七不思議の一つとなつた。樹々はユーフラテスの兩岸に沿つて植えつけられ、色とりどりの草花は町の數々の城壁の上に咲き亂れた。數年後のバビロンの町は、數も千餘に及ぶ美しい花園が古色を帯びた町の家根々々から華かに吊り下つた様に見えた。

カルデア人の都バビロンは今や世界的名地となつて來た。その時彼等の注意は、心と靈とに關する問題へ集中されて行つた。

凡ての沙漠民族と同じく、彼等も亦深く星の世界に興味を惹かれた。——夜間、路もない



カルデア人



沙漠をさ迷ふ時、彼等を安全に導いて呉れたものは、頭上高く耀いてゐる光點であつた。彼等は天體を研究して所謂十二宮（又は獸帶宮）の名前を附けた。

晴れた夜の空を眺めて彼等は星の圖を作つた。最初の五つの遊星を發見したのは實に此の古代のカルデア人であつた。是等の遊星に彼等は自分達の神々の名前を附けた。後にローマ人がメソポタミヤを征服した時、彼等は此のカルデア式の名前をラテン語に移した。今日吾々が五つの遊星を「ジュピター」（木星）、「ヴァーナス」（金星）、「マーズ」（火星）、「マーキュリー」（水星）、「サターン」（土星）と呼んでゐるのは其のためである。

カルデア人はまた時間の勘定に就いても驚くべき發明をなした。

彼等は一晝夜を二十四時間に等分し、一時間を六十分に分けた。現今の吾々が時間の勘定に用ひてゐる方法は實に此のバビロニア人の發明したものに他ならない。彼等は無論今日の吾々のやうに時計といふ器械は持つてゐなかつた。日時計の指す影を見て時間を測つたのである。

彼等は數の計算法として十進法と十二進法の兩方を用ひた。十二進法は、六十分、六十秒、

二十四時間などの基礎になつてゐる。今日では多く十進法が使用されて十二進法の方は餘り用ひられてゐない。

定休日の必要を認めたのも此のカルデア人が最初である。彼等は一ヶ年を週間に分けた時、六日間を労働日とし其の次に休日を一日置いて此の日を「魂の平和」に捧げることにした。

斯様にカルデア人は今日吾々の日常生活に深い關係のある色々な制度を定めたのであつた。斯うした偉大な智慧と勤勉との中心地だつた彼等の國が、永遠に存続することが出来なかつた事は返す／＼も遺憾の至りである。相繼いで現れた明君の靈才を以てしても、メソポタミヤの古い民草を其の最後の運命から救ひ出すことは終に出来なかつた。

セミ族の世界は老衰しかゝつてゐた。時は既に新しい人種のものでつたのである。

紀元前五世紀に、ペルシヤ人と呼ぶインドヨーロッパ人種が、イラン高原の山嶽地に在つた彼等の牧場を後にして南下し終に此の沃野を征服したのである。

バビロンの町は苦もなく略取されて了つた。バビロンの最後の王ナボニダスは逃亡した。



彼れは自分の町や國を守ることよりも宗教上の問題に深く心を惹かれてゐたのだつた。後に残つた彼れの幼い王子は其の數日後に死んだ。

ベルシヤ王サイラスは、此の小王子をいとも鄭重に葬つた後で、「朕は、これよりバビロニヤ歴代諸王の正統なる後繼者たるべし。」と宣布した。斯くてメソポタミヤは獨立國で無くなつた。そしてベルシヤのサトラップ即ち知事に依つて統治されるベルシヤの一州となり終つたのである。

バビロンの町は何うなつたか。其處は最早王の住む所ではなくなつたので、忽ち舊時の重きを失ひ單なる田舎村と變じた。

併し紀元前第四世紀の頃バビロンは一時また光榮の光を浴びた。

ベルシヤ、インド、エジプト、その他各地を征服し終つた若いギリシヤ人——アレキサンダー大王が、この神聖なる紀念の都を訪れたのは紀元前三百三十一年のことだつた。彼れは、新に獲得した己が光榮の背景として、此の古い都を用ひようと欲した。命を下して宮殿の再建を始め、古い寺々から瓦礫廢物の類を清らかに除り去らせた。

不幸にも彼れはネブカドネザール王の饗宴場で全く突然に死んで了つた。其の後、バビロンの町を其の廢墟から救ひ起すものは絶えて無かつたのである。

アレキサンダー大王幕下の一將軍セリユカス・ニカトールが、チギリス、ユーフラテス兩河を連ねた大運河の河口に、新都建設の計を成就した時、終にバビロンの運命は封じられて了つた。

紀元前二百七十五年に作られた粘土製の書牌タレットの文句は、當時最後のバビロニア人等が自分等の住み慣れた家を捨て、セリユシアと呼ばれた新都に移住しなければならなかつた事情を今日の吾々に物語つてくれる。間もなくバビロンの聖地は荒れ果て、豺狼の棲み家と化した。長く住み慣れた我が古の町は忘れ難く、彼等代々の守り神の聖地に終始訪れて來る者も中には幾人かあつた。

大多數のものは過ぎし時代の半ば忘れられた神々には殆んど興を惹かなかつた。彼等は以前の自分等の家をもつと、實際的に利用した。他でもない、石採場いしとりばとして用ひたのである。

バビロンは殆ど三千年の長い間、セミチック世界の靈智的の一大中心であつた。一代三



十年、實に百代といふ長い年代が此の都をその國民精神の最も完全なる表現と見做したのであつた。

其は古代世界に於けるバリーでありロンドンでありニューヨークであつた。

現今メソポタミヤの原に三つの大きな圓い丘陵が蹲つてゐるのが見られる。其處に、絶えず蠶食して止まぬ沙漠の砂に埋もれて、昔の都バビロンの廢墟が眠つてゐるのである。

*mantomi  
ama hois*

## 十二、モーゼの話

- ヘブライ人の住地ウル……エジプト時代のヘブライ人……ユダヤ人とヒクソス……
- モーゼ……エジプト人の異人種差別待遇……モーゼの出奔……ミディア沙漠の生活……
- ……モーゼの企圖……ユダヤ人エジプトを脱出しシナイ半島へ行く……シナイ山下の生活……
- モーゼの改革的事業……イェホヴァ大神……モーゼの十誡……多神教より一神教へ……ユダヤ人バレスチナに入る……モーゼの功績。

ぎら／＼と強い日光を浴びた、遠い微かな東南の地平線の上に、小さな一團の雲が高く舞ひ上つた。と又、後から續いて段々と激しく舞ひ上る。沙漠の砂が蹴立てられて亂れ昇る土煙りに違ひない。

ユーフラテスの河岸から餘ほど離れて、もう沃野とも言はれぬやうな土色をした野末に、今しも自分の瘦せ畑で草むしりをしてゐたバビロニヤの百姓が、一休みしようかと腰を伸ば



した拍子に、目に映つたのが其の舞ひ上る土煙りであつた。

「又かい、馬鹿な！ 何處の毛唐奴等か、また俺等の土地へ暴れ込まうっていふのぢやな。」彼は氣の毒さうな苦笑を浮べた。「何處まで寄つて來られることかい。王様の兵隊さん等に又候追ひ出されるに極まつちよるわい。」

氣に懸る事ではないと言つた様子で、小腰をかどめると、百姓はまた草むしりの手を動かして始めた。

彼れの考へに間違ひは無かつた。見知らぬ野人の群が地平線の此方に現れて來た。と、此方からは國境守備の一隊の兵が白刃を抜き進んで進んだ。野人の群は忽ち追ひ散らされた。彼等の蹴立てる土煙も間もなく地平線の彼方にかくれた。

バビロンの南方の國境に沿つて彼等野人の群は西へ西へと向つた。彼方此方とさ迷ひ歩いた後に漸く地中海の岸邊に着いた彼等は、其處に落ち着いて牧羊を始め、彼等の祖先がウルの土地に棲んでゐた時代そのまゝの單純な生活を始めた。

やがて雨が降らなくなつた。自分達や羊の群などの食ひ物が其處では充分に得られなかつ

たので、何處かまた新しい牧場を探さなければ其のまゝ此處で死んで了ふより他はなくなつて來た。

ヘブライ又はヒーブルー（英語ではヘブリュー）と呼ばれた此の牧羊民の一團はもう一度家族や家畜を引き連れてぞろ／＼と動き出した。南へ／＼と移つて行き漸くエジプトの國に近い、紅海の岸邊に新たな住地を見出した。併しその航海後に彼等は饑饉に見舞はれたので最早何うすることも出来なくなつた。止むなく食を乞ふためにエジプトの役人達を訪ねた。

エジプト人はづゝと前から饑饉の來るのを豫期して、大きな貯藏庫を幾つも建て、過去七一年間に餘つたところの小麥を澤山積み込んで置いた。この小麥が牧羊民へ分配されることになつて、富者貧者の區別なく一律平等に分配するために一人の食料管理人が任命された。此の男の名はヨセフと言つてヘブライ族に屬してゐた。

彼れは未だほんの子供だつた頃自分の家を逃げ出したのであつた。自分が父の愛を得てゐるのを妬んでゐた他の兄弟達の怒りから逃れるために、生れた家を出奔したのだと言はれてゐた。



事實は何れにもせよヨセフがエジプトへ行つたことは事實である。彼れは、丁度その頃此の國を征服したばかりだつたヒクソスの王達から情なさけをかけられた。彼等はその新領土の管轄に就いて此の恟潑な若者を登用した。

ヘブライの餓えた牧羊民の連中が助けを請ひにヨセフの前へ現れた時、その中に彼れは自分の近親の者達があるのを認めた。自分を苦しめたことのある兄弟達がゐたのである。併し彼れは寛大な男だつた。彼れの魂には卑しい心根などは微塵も染みついてゐなかつた。以前に自分を苦しめた人達に復讐するどころか、却つて彼れは請はれるまゝに小麦を與へてやりエジプトの領内に落ち着くことを許してやつた。

その後長年の間、このヘブライ人等は、自分達の選んだ國の東部に住み、萬事好都合に運んでゐた。彼等は平和な日を送つてゐた。(このヘブライ人はユダヤ人としての方が一層良く知られてゐる。)

すると其處へ或る大變化が起つた。といふのは遽に革命が勃發したのである。ヒクソスの王達は、今迄の權勢を剝奪され、此の國から退去せざるを得ない事になつた。エジプト人は

もう一度自分等の住み家の主人になれたわけである。元來、彼等は異國人が嫌ひだつた。アラビア人の牧羊民の一團に三百年間も抑へられてゐたので、自國以外の凡ての事物に對する彼等の嫌厭の念は非常に増大された。

然るにユダヤ人の連中は、同人種に屬してゐるヒクソスと親しい交誼を結んでゐた。此の事は、エジプト人をして彼等ユダヤ人も反逆者だと思はせるに充分だつた。ヨセフは最早生きてゐなかつたからユダヤ人保護の手は自然と薄くなつて來てゐた。

暫時の葛藤の後彼等は今迄の住家から引つ張り出されて、エジプトの中心へ追ひ込まれ其處で奴隸のやうに虐遇される事になつた。

數々のピラミッドを築造するための無数の巨大な岩石を運搬するやら、役所その他の公用建築物のために必要な煉瓦を造るやら、遠い田畑にナイル河の水を引くために幾條もの運河を開鑿するやらして、一般勞働者のする様な骨折仕事に長年の間こき使はれたのであつた。

彼等の苦痛は大きかつたが少しも勇氣を挫かなかつた。救ひの手は近づいて來た。

其處に名をモーゼと呼ぶ或る若者がゐた。極めて賢明だつた彼れは、フェローの膝下に



勤めるやうにエジプト人から命ぜられたので、お蔭で良い教育を受けてゐた。彼れの怒りを掻き起す事件が無かつたならば、モーゼは小さな州の知事か在外領土の收税吏として平和にその生涯を畢つたことであらう。

ところがエジプト人は前にもお話した通りで、自分達と同じやうに見える面貌を持たぬ者や眞のエジプト風の服装をしてゐない者などを輕蔑し、「自分達とは違つてゐる」といふ理由でさうした人々に侮辱を加へ勝ちだつた。斯様にしてエジプト人から異國人として差別的待遇を受けたユダヤ人は、數から言つて到底エジプト人に及ばなかつたから、自分等の不平を法廷へ持ち出しても少しも良い結果は得られなかつた。エジプトの神々を崇拜するのは厭やだと言つて、法廷で激越な調子で言ひ張るユダヤ人などがあつても裁判官は少しの同情も示なさかつた。

或る日のこと、モーゼは二三人のエジプト人の友達と一緒に散歩してゐた。すると其の一人がユダヤ人に就いて特に不快なことを口走つた上に、行き會つたユダヤ人に向つて腕を振り上げ今にも擲り掛らうとした。

熱し易い青年だつたモーゼは其の有様を見てかつとして了つた。忽ち彼れの拳はエジプト人の横面にぐわんと飛びついた。擲り様が餘り激しかつたので男は打つ倒れてそのまま死んで了つた。

この國の人民を殺害するといふ事は極めて怖るべき重大事であつた。あのバビロニヤの明君ハムラビは、殺人犯を二種に分け所謂謀殺犯の場合と然らざるもの即ち加害者が相手から重大な凌辱を加へられた、めに非常に憤怒して其の結果相手を殺したといふ様な場合と其の間に區別を認め、彼れの有名な法典中には此の區別に立脚した處罰規定が設けられてゐた。然るにエジプトの法律はさうではなかつた。そんな區別などは設けられてゐなかつた。その上モーゼはエジプト人から嫌はれてゐる異國人の一人である。危険が彼れに迫つて來るのは言ふ迄もない事だつた。

モーゼは逃亡した。

彼れは自分の祖先の國へ、紅海の東岸に沿うてゐるメディア沙漠へと逃げ込んだ。其處は彼れの種族が數百年前に牧羊を營んでゐた所だつた。





シナイ山上のモーゼ

其處にイエスローといふ親切な僧侶がゐてモーゼを自分の家に迎へ入れた。そして娘の一人  
ジノボラアを嫁はせた。

モーゼは其處で長い間暮した。そして多くの深遠な問題に就いて瞑想を凝らした。彼れは  
フェーローの宮殿に於ける豪華逸樂の生活を去つて沙漠の僧侶の單純素樸な生活に觸れたの  
であつた。

ユダヤの住民は未だエジプトへ入國しなかつた前の古い時代には、アラビヤの涯なき曠野  
の間を流浪してゐたのであつた。天幕に露營し野の食物を喰ひ、僅かな所有物に満足し心の  
正しきを誇りとせる誠實な男達であり女達であつた。

彼等がエジプトの文明に觸れるやうになつてから此の素樸誠實な生活が全く一變して了つ  
た。彼等は快樂を好むエジプト人の風習に慣れて來た。彼等は自分達を統治する他の人種を  
承認し、自分等の獨立自存のために鬪はうとする氣は無かつた。

熱風吹き荒む沙漠の古い神々の代りに、暗いエジプト寺院のぎら／＼する華麗の内に住む  
奇異な神々を彼等は崇拜し始めてゐた。



モーゼは感じた——あそこへ行つて彼等同胞をその運命から救ひ出し昔時の單純素朴な眞理へと引き戻してやらねばならぬ。これが自分の義務だと感じた。

そこで彼等は、エジプトにゐる自分の血族の者達の所へ數人の使者を送り、奴隸の國を去つて沙漠にゐる自分の所へ來て一緒に暮すが良いと傳へさせた。

併しエジプト人等は此の事を耳にして前よりも一層ユダヤ人に對する監視の目を嚴重にして來た。

その内にナイルの谷間の住民の間に恐しい流行病が遽に起つた。その時モーゼの計畫も失敗に歸するのではないかと思はれた。死する者忽ち何十萬の多きに達した。其れは皆エジプト人であつた。其の間にゐたユダヤ人等は保健といふ事に就いて或る極めて嚴格な規律を常に守つてゐたので疫病を免れることが出來た。此の規律こそは彼等が未だ東方の沙漠に生活してゐた困難な時代に覚え込んだものであつた。

此の「沈黙の死」の後に起つた混亂と恐慌の最中に、ユダヤ人等は其の所有物を荷造りして逃亡の身仕度を整へた。かくて彼等は、自分等に餘り多くを約束した癖に餘りに少しゝか

與へなかつた此の國を急いで逃げ出したのである。

ユダヤ人逃亡の事實が知れ亘るや、エジプト人は直ちに軍隊を以て之が追跡を試みたが、彼等の軍隊は中途にして災厄に會ひユダヤ人の群は終に逃げ去つた。

彼等は安全だつた、自由だつた。彼等は東へ東へと進み更に南下してシナイ半島の南部に於ける人跡稀れな沙漠に進入した。其處に「シナイの山」があつた。彼等は此の山の麓に在る荒野を住み家として定めたのである。シナイ山といふ名はバビロニアの月の神「シン」から命名されたものであつた。(此のシナイ山は舊約聖書に出てゐるが今日ではさう呼ばれてゐる山がない。これは多分現今のゲベル・カテリナといふ山だらうといふことになつてゐる。此の山は、シナイ半島の南部にある沙漠中に立つてゐて、全山草木殆どなく所謂禿げ山と思へば間違ひない。これは海拔八五五〇呎ある。この南方にゲベル・ウムーシヨマー(高さ八四五〇呎)があり、西北にゲベル・セルバル(六七五〇呎)がある。ゲベル・カテリナは峰が二つになつてゐる。ホレブ山とゲベル・ムーザで、後者は即ちモーゼの山であつて、ヘブライの掟有名な「十誡」をモーゼが定めた場所と傳へられてゐるのは此の峰である。譯者註。)



エジプトから逃げて来たユダヤ人の連中は斯くしてシナイの山の麓に落ち着いて其處に待つてゐたモーゼに従つた。モーゼはユダヤ族の長となつて彼れの改革的大事業を開始した。

その頃のユダヤ人は他の凡ての民族と同じ様に多くの神々を崇拜してゐた。即ち彼等の宗教は多神教であつた。エジプトに滞在してゐた間に彼等はエジプト人の崇拜する様々な動物に敬意を捧げることを學んだ。其處では彼等の主人となつてゐたエジプト人が自分等の特殊な利益のために崇嚴な寺々を建立して熱心に様々な動物を神々として崇めてゐたのであるからユダヤ人等も其の風習に無理にも従はなければならぬのであつた。然るにモーゼは、此の半島の沙漠の上に連り續く丘の間で淋しい長い生活を送つてゐる内に、「嵐と雷」の大神の威力を崇めることを知つた。「嵐と雷」の大神、それは高き天界を統べ給ふ神であり、その善意に依つて沙漠の彷徨者は生命と光と呼吸とを得てゐるところの神であると信じられてゐた。

此の神はイエホヴァと呼ばれ、後に西部アジアのセミ族の凡てが懼れ畏んで深く崇拜してゐた偉大な存在であつた。

モーゼの教へに依つて此のイエホヴァはユダヤ種族の唯一の主となつたのである。即ち彼等の宗教は所謂一神教であつて、此のイエホヴァの他には神は無かつた。

或る日、モーゼの姿がヘブライ人の部落から見えなくなつた。彼れは荒れ削りの石版を二枚携へたまゝ、何處かへ出て行つた。彼れはシナイの最高峰の寂境を求めに行つたのだらうと村人達は囁き合つた。

その日の午後になるとシナイ山の頂が見えなくなつた。物凄しい嵐が起つて眞つ黒な怖しい密雲が山を蔽ひかくして了つた。

モーゼが村へ戻つて来た時、見よ！ その二枚の石版の上に奇怪な文字が彫りつけられてゐるではないか！ それは大神イエホヴァが、彼れの轟かす雷の響と彼れの射放つ稲妻の眼も眩むばかりの閃の只中で、口づからモーゼに仰せ下された神託であつた。

その時以來、モーゼの權威を敢て疑はうとするユダヤ人は一人もなかつた。「人々は彷徨遍歴の旅を更に繼續して倦む勿れ！ 皆の者、イエホヴァー大神がさう仰せられたのぢや。」



人類の足蹟

モーゼが村人達にさう語つた時、彼等は直ぐに従つた。人々は心から流浪の旅を欲した。その後彼等ユダヤ人は長年の間沙漠地方の路もない丘から丘へとさ迷ひ歩いて暮らした。数々の非常な大艱難に會ひ、食ひ物も水も缺乏して殆ど全滅して了ひさうな危険にも遭遇した。

併しモーゼは、イェホヴァの眞の信徒たる人々に永久の住み家を供してくれるに違ひない「約束の地」の存在に就いて、人々の希望を強く持たせ少しも意氣を沮喪せしめなかつた。漸く彼等は肥沃な地方に達した。

あの神聖な掟の石版を携へて、ヨルダンの河瀬を押し渡つた彼等は、ダン (Dan) からビアーシハバ (Beersheba) まで延び擴がる草原を今や將に占領するばかりとなつた。

モーゼはといふと、彼れは最早ユダヤ同胞の指導者ではなくなつてゐた。

彼れは年寄りになつて元氣も衰へて來た。彼れは、パレスチナの山脈の上に聳え立つ峰々が遠く眺められる所まで行つた。其等の峰々の間に、彼れの引き連れたユダヤ人等がその郷國を見附ける時もう間近に迫つてゐたのである。

その時モーゼはその賢明な眼を永久に閉ぢた。彼れは若い時代から一身を投じて盡くした大使命を茲に成就したのである。彼れは、自分の同胞を異國に於ける奴隸の境涯から獨立生活の新しき自由へと救ひ出した。

モーゼは同胞を團結せしめてユダヤ民族の獨立國を創建させ、唯一神を崇拜する凡ての國々の最初の國としたのである。



### 十三、掟の都イエルサレム

パレスチナ……クナーン人……ユダヤ人……フィリスチヤ人……ブラサティ……甲  
胃を着けたゴリアス……強力者サムソンの話……イエルサレムの建設……イェブサイ  
ト人……ソロモン王……イエルサレム寺院の建立……ネブカドネザールとイエルサレ  
ム……ローマ人とイエルサレム……ヘロド王……ローマ人の屬領統治の仕方……對宗  
教不干渉主義……ローマ人とユダヤ民族性……ローマ人のイエルサレム破壊……新都  
エーリナ・カピトリナ……世界の流浪者ユダヤ人……ユダヤ教の傳播。

パレスチナ（或ひはパレスティン）はシリアの山脈を東北に背負ひ西に地中海の碧水を控へた南北に細長い土地である。極めて早い時代から人類が棲んでゐた。その最初の住民に吾々はクナーン人（ヘブライ語）又はケーナン人或ひはケーナ、イツ（英語）などといふ名前を付けてゐるけれども、此の住民に就いては餘り知れてをらない。

クナーン人はセミ族に屬してゐた。彼等の祖先はユダヤ人やバビロニヤ人の祖先と同じく

沙漠民であつた。併しユダヤ人がパレスチナを見附けて入つて來た時、クナーン人は既に町や部落を造つて生活してゐた。彼等は最早牧羊民ではなくなつて商人であつた。實際、ユダヤ語では、クナーンと商人は同じ意味を現すほどに近づいてゐたのである。

彼等クナーン人は、周圍に高い壁を繞らして堅固な都市を築き、ユダヤ人には其等の城門から入らせなかつた。ユダヤ人は止むなく打ち開けた野原に留まり、谷間々々の青草の茂つた野原の中に住家を建てなければならなかつた。

併し暫くする内にユダヤ人とクナーン人とは親しくなつた。彼等は要するに一つの種族に屬してゐただから、これは甚しく困難なことではなかつた。その上彼等には怖るべき共同の敵があつた。それは彼等と全然異つた人種に屬してゐる民族でフィリスチヤ人と稱した。この民族はパレスチナの西南岸に住んでゐたが性極めて慍悍であつた。ユダヤ人とクナーン人は此の怖るべき隣國に對して自國を充分に守るには何うしても互に協力しなければならなかつた。

フィリスチヤ人は實際アジアには何も仕事を持つてゐたわけではなかつた。彼等はヨーロッパ



ッバ人種で、其の最初の住み家はクリートの島だつた。彼等が此の地中海の東岸の一部に住むやうになつたのは一體何時頃のことか全く漠然としてゐる。といふのは彼等がインドヨーロッパ人の侵入を受けてクリートの母國から追ひ出された時期が何時頃なのか吾々に知れてゐないからである。エジプト人は彼等をプரசアティ(Puraseti)と呼んでゐた。エジプト人が彼等を怖れたことは非常なものだつた。アメリカのレッド・インディアン(南北アメリカに散在してゐる赤銅色のアメリカインド人)のやうに頭に羽毛で拵へた冠をつけてゐた當時のフィリスチヤ人が遠征に出かけた時には、西アジアの全住民は自分等の國境を守るために大軍を派遣したことがある。

フィリスチヤ人とユダヤ人との間でも無論激しい戦闘が行はれ何時までも終りさうになかつた。フィリスチヤ人の内にゴリアスといふ軍人がゐた。彼れは當時では極めて稀しかつた甲冑を着けてゐた。これはサイブラス島から輸入された物に相違ない。この島では銅山が発見されてゐたのである。

ダヴィッド(又はダビデ)がゴリアスを殺した。強力者サムソンがうりきものがその強力を發揮して數多

の敵を殺した。かういふ話は舊約聖書の中に物語られてゐる。サムソンはフィリスチヤ人に捕はれて髪を削り落されたり眼玉を引き抜かれたりした上に見世物扱ひにされた。彼れを捕虜とした祝賀會をやらうといふのでフィリスチヤ人の連中はダーゴン寺院に集つた。そして慰み物にしようといふので眼玉の無くなつたサムソンを其處へ連れて來た。

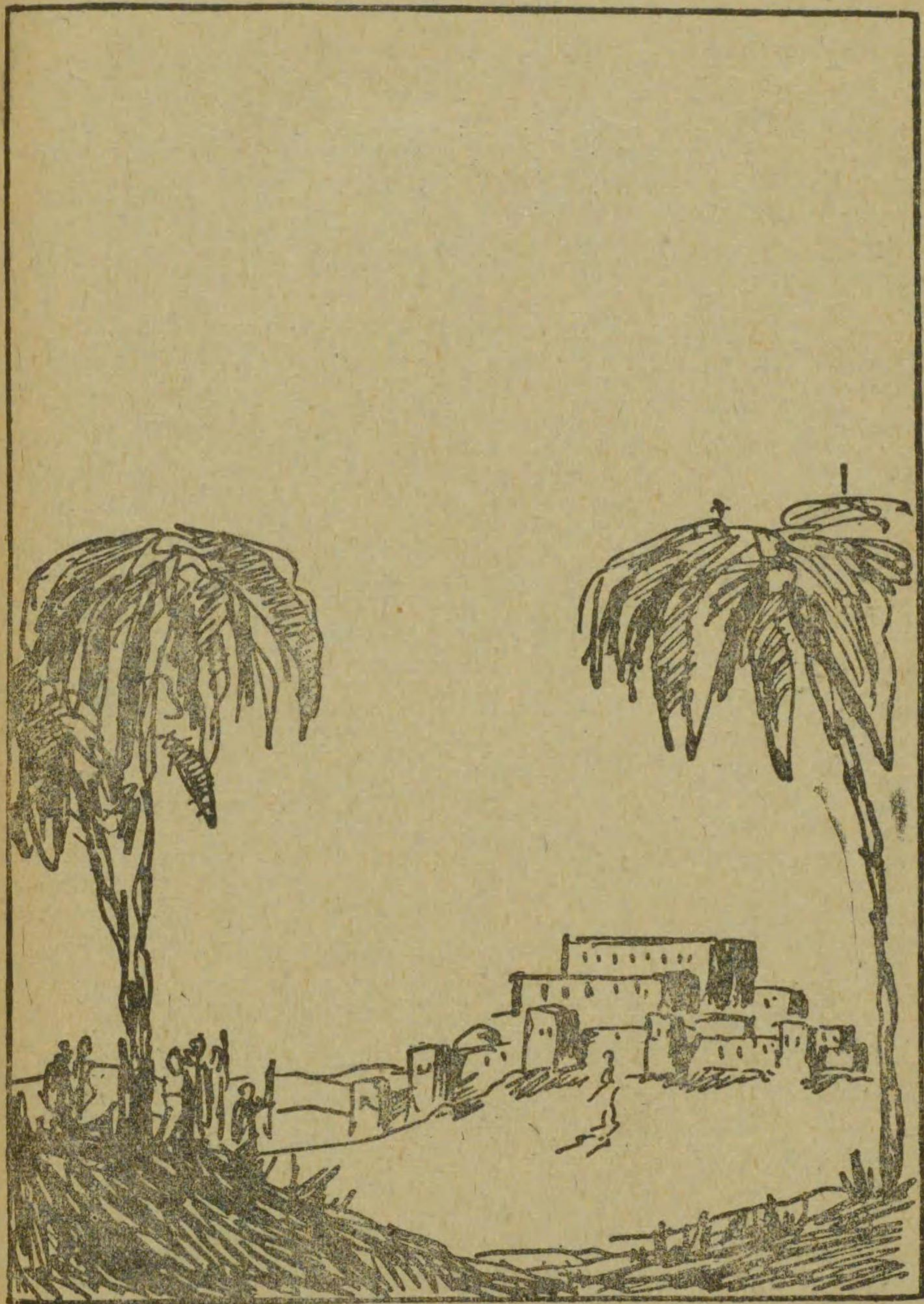
サムソンは禱りをした。すると彼れの怖しい力が蘇つて來た。忽ち彼れは寺院の柱を兩腕に力を籠めて引つ外した。寺院はがら／＼と倒潰して了つた。中にゐた大勢のフィリスチヤ人は悉く押し潰された。サムソンも運命を共にしたのである。

けれどもフィリスチヤ人の勢力は常に優勢でユダヤ人は敵はなかつた。ヘブライ人の連中は地中海に臨んだ港を一つでも良いから欲しいと思つたがフィリスチヤ人は決して許さなかつた。

そこでユダヤ人は止むなく東部バレンチスナの谷々だけで満足しなければならなかつた。其處の或る低い禿山の上に彼等の都を建設した。

この都の名がイエルサレムであつた。その後三千年の間此のイエルサレムは西方世界の最も





ユダヤ人の掟の都イエルサレム

神聖な土地の一つだったのである。

漠として知られぬ太古時代には、「平和の家」イエルサレムはエジプト人の築いた小さな城塞であつた。當時のエジプト人は彼等の本國から離れてゐる遠い領土の國境を東方民族の攻撃に對して守備する必要からして、バレスチナの山脈に沿つて諸所に小さな城塞や砦を築いた。イエルサレムも其の一つであつた。

エジプト帝國の瓦壞後、この附近に元から住んでゐたイエブサイト人といふ一族が此の荒れ果てた町へ入り込んだ。次ぎにやつて來たのがユダヤ人で長い間の葛藤を経て終に之を占領し、彼等の王ダビデの都としたのである。

長年の間さ迷つた後に、終に彼の「神聖なる石版」も落ち着いて休める場所に達したやうに思はれた。(此のモーゼの神聖なる石版にはイエホヴァの言葉が記されてゐることは前に述べた。この神聖なる言葉はデカローグ(十誡)と言はれてゐる。譯者註) 賢王ソロモンは此の神聖なる石版に崇嚴な家を供へようと決心した。大勢の使者を遠く諸方に派して珍稀な材木や尊い金屬類を探索させた。全國の人民は、此の神聖な名前に相當した「神の家」を造るため

掟の都イエルサレム



に各々その富を捧げよと請はれた。寺院の周りに繞らした塀は「イエホヴァの聖なる掟」を永久に守護するために益々高くくと増築された。

然るに豫期された永久は哀れにも短い期間で終らねばならなかつた。フィリスチナ人には頻々として攻撃を受けるし、四面の隣國からも仇と憎まれ、終にユダヤ人はその獨立を餘り長い間保持することは出来なかつた。

彼等は良く戦ひ勇敢に闘つた。併し色々な狭量な美望や妬みを受けて弱らされてゐた此の小さな國は、アッシリア人やカルデア人やエジプト人などに攻撃を受けるに及んで容易に征服されて了つた。バビロンの王ネブカドネザールが紀元前五八六年にイエルサレムを占領した時、彼れは此の町と寺院とを破壊した。神聖なる掟の石もこの大火のために姿が見えなくなつて了つた。

ユダヤ人は直ちに彼等の神聖な寺院再建の事業を始めた。併しソロモンの榮華の日は最早過ぎ去つた。ユダヤ人は今や人種の違つた異國人に支配される人民であり金錢は殆ど無かつた。そのために此の古い寺院を再建するのに六十年もかゝつた。其れは無事に三百年間立つ

てゐたが再度の侵入があつて又も焼失の憂き目に會はなければならなかつた。燃え行く寺院の赤い焔はバレスチナの空を焦がした。

三回目に建てられた時、其の周圍には高い城壁が二重に繞らされ所々に小さな門があつた。内側にはあちこちに廣い庭が造られた。斯様にして將來、突然侵入者が攻め込んでも寺院の境内へは入ることが出来ないやうにした。

併し不運は尙ほイエルサレムの町をつけ切つた。

キリストの生誕前六十五年、將軍ポンペイの率ゆるローマ人が此のユダヤの都を占領した。實際的實行のだつたローマ人は、この古い町を親切に取扱はなかつた。といふのは曲りくねつた通りや薄暗い通り、不健康な多くの狭い路地などばかりある町が彼等には氣に入らなかつたからである。此の古い瓦礫太——と彼等は見做した——を綺麗に取り片附けて新しいバラックや數々の大きな公會堂を建築したり游泳池や運動競技場などを諸所に建設した。斯様にしてローマ人は、氣の進まない民衆の上に自分等の近代的進歩を無理に押しつけたのである。ローマ人から見れば、ユダヤ人の寺院などは少しも實際上の役に立たぬ物であつたから彼



等は之には少しも意を用ひなかつた。否全く顧みなかつた。その内にヘロド王（ヘロデともいふ）の時になつた。王の虚榮心は、過去の時代の古き華麗を今の世に甦らせて見度いと思つた。例の寺院の建立を思ひ立つたのである。人民にその命令を下した。けれども壓服されてゐた人民は、自分等の自由に選んだ王ではなくローマの権力の庇護に依つてユダヤ王となつてゐるヘロデの命令に従ふのは氣が進まなかつた。併し王命止み難く、終に人民はその仕事に着手した。——身に染みぬ様子で不熱心にのろ／＼と仕事を始めた。

それでも寺院完成の日は近づいて來た。昔の華麗な趣が今日の邊りに現出して來た。併し最後の石が適當な位置に置かれた時突然又革命が勃發した。ローマの無慈悲な收税者共に對して一部人民の不平が爆發したのである。暴動の最初の犠牲は此の寺院であつた。ローマ皇帝タイタスの部下の兵が古いユダヤの信仰の中心たる此の寺院に早くも火を放つた。併しイエルサレムの町は焼かれずに濟んだ。

けれどもバレスチナは不安な騒動の場面と化して何時までも續いた。有ゆる人種に親しく接してをり、千餘の異つた神々が崇拜されてゐる諸國を巧みに統治し

たローマ人も、ユダヤ人に對する扱ひ様は知らなかつた。彼等はユダヤ人の性格——ユダヤの民族性を全然理解しなかつた。元來ローマ人が廣大な帝國を斯く迄立派に建設することが出來たのは、彼等が異人種の宗教を默認し極端に寛大な態度を探り之を基礎に帝國を建設したからであつた。ローマ本國から各領土へ派遣されてゐた知事達も其の地の人民の宗教上の信仰に對しては決して干渉しなかつた。彼等はローマ皇帝の肖像畫や彫像などを在外領土の人民の寺々に安置すべしと要求したが、これは單に形式だけの事で別に深い意味は無かつた。併しユダヤ人に取つては斯様な事は重大な神聖冒瀆だと思はれたのである。ユダヤ人は彼等の「聖の聖なる神」をローマの主權者の彫像に依つて汚辱することを許さなかつた。

彼等は拒絶した。ローマ人は頑張つた。

事は左程重大ではないけれども斯様な些々たる誤解は、延いて又更に不快な感情を掻き起すことになる。皇帝タイタスの治下に起つた彼の暴動以後五十二年目にユダヤ人は再び反亂を起した。此の時ローマ人は決心した。——良し、何處までも破壊の敢行だ！

イエルサレムは斯くして終に破壊され、イェホヴァの寺は焼かれた。



曾てはソロモンの榮華極まり無かりし古き都も一朝にして瓦礫散亂の荒地と化し、信仰篤きユダヤ人等が父子相傳へて殆ど一千年の久しきに亘つて、聖の聖なる神イエホヴァに禮拜の誠を捧げ祭つた寺も忽ちにして焦土と化し去つた。イエルサレムの廢墟の上には今やエーリア・カピトリナと呼ばれる新しいローマの町が聳え立ち、イエホヴァの寺の跡には今は異教の社が建てられジュピター大神の宮居となつた。

ユダヤ人自身の運命は如何にと見れば、住み慣れた舊都から放還され、祖先の家から追放された者數千に及んだ。

その時以來、彼等ユダヤ人は全世界到る所をさ迷ひ歩く流浪者となつたのである。

併し「神聖なる掟」に取つては最早、今迄のやうに國立の寺院といふ様な安全な避難所などは必要でなくなつてゐた。

その影響感化は既に餘ほど以前から狭いユダヤの國境を越えて他國にまで及びつゝあつた。そして正しき生活を營まうと努める眞面目な人々の住む所なら何處でも、それは正義の生ける象徴となつて來たのである。

## 十四、交易市ダマスカス

アモライト人の城塞……マラム人……商業市ダマスカスの發達……アラム語の流行

……キリストの使つた言葉

エジプトの數々の古い都市は地球の表から消え失せた。ニネヴェーもバビロンも瓦礫積む荒れ果てし丘となつた。イエルサレムの古き寺院は、己が榮華の色も褪せて黒み渡つた廢墟の下に埋もれ、たゞ音もなく横はつてゐる。

時代から時代への激しい幾變遷を餘所にして、斯かる内にもたゞ獨り、珍らしくも生き残つて來た都があつた。それはダマスカスの市と呼ばれる。

其處では四つの大門と堅固に繞らした城壁の内側に、連續五千年といふ長い間人々は毎日忙しく營業にいそしんで來たのである。市内目貫きの商業街「眞つ直ぐな街」と呼ばれた通りは、町人の父から子へと實に百五十數代の移り變りを見て來たのである。

ダマスカスの市は、彼の大王ハムラビーを生み出した有名な沙漠民「アモライト」族の國

交易市ダマスカス



培城塞として、其の經歷の一步を始めた。アモライト族が更に東方に進んでメソポタミヤの谷間に入りバビロン王國の建設を始めてからも、ダマスカスは、小アジアの山嶽地方に住んでゐたヒタイト族と通商交易を續けてゐた。既にその前から交易市として知られ此の地方に於ける最も重要な場所となつてゐたのである。

時の経過に連れて最初の住民は、アラム人（アラミアンズ）と稱するセミ族の一種に混り込んで了つたが、市その物は元からの性質を變へなかつた。それは商業の一大中心地として各時代の無数の變遷を突き抜けて榮えて來たのである。

ダマスカスの位置はエジプトからメソポタミヤに至る本道に在つて、地中海東岸の諸港から上陸すれば七日路の旅で行き着ける所に在つた。ダマスカスは一人の大將軍も、一人の大政治家も生まなかつたし、有名な王の一人も生み出さなかつた。それはまた隣接した他國の領土をたゞの一哩でも併呑したことはない。ダマスカスは純然たる商業都市として平和な事業を進めてゐたのである。それは當時の世界各國と通商し、商人や職人などには安全な住み家となつてゐた。その結果西部アジアの大部分に此の市の住民の言葉が自然に擴まつた。

商業といふものは、異つた國々の間に迅速にして且つ實際的な交通手段の存することを常に必要とするものである。彼の古代スメリア人の發明に係る楔形文字は念入りに組み立てられた物であつたが、アラムの商業民に取つては餘りに煩雜であつた。其處で彼等は、バビロンの古い楔形文字より遙かに手早く書ける新しい一組の文字を工夫し出した。

彼等アラム人の言葉は彼等の取引上の通信關係から自然と生じて來たのである。やがて其れは當時交通の開かれてゐた世界各國へ擴まつて行つた。

アラム語（アラミアン）は實に古代世界に於ける英語（イングリッシュ）となつたのである。メソポタミヤではアラム語が土地の言葉と同じ様に通用しない所は殆ど無かつたと言つて良し。或る三四の國々では、アラム語が入つてから其の地の古い民族語が廢れて了つた。

彼のキリストが衆生濟度の説教を始めた時彼れの口から迸り出たのは、モーゼが其の掟「十誡」を仲間の流浪民族に説明した時に使つた、あの古いユダヤ語ではなかつた。

キリストは商人の言葉だつたアラム語で話した。それは實に當時の地中海世界の單純素樸な住民の通用語となつてゐたのである。